

博士論文

【題目】

中国語の取り立て副詞の意味決定における韻律特徴の役割について

熊本大学大学院社会文化科学研究科博士後期課程
人間・社会科学専攻 フィールドリサーチ領域

学生番号：117-G9107

氏名：李 智麗

主指導教員：児玉 望 教授

目次

序論	1
0.1 問題提起	1
0.2 本論の目的	2
0.3 先行研究	3
0.3.1 副詞の分類及び統語位置	3
0.3.2 焦点と取り立て	4
0.3.3 多義文の意味と音韻との関係	5
0.3.4 副詞の意味と音韻との関係	6
0.4 研究対象	7
0.5 研究方法	8
0.6 本論の構成	8
第一章 取り立て副詞と取り立てスコープ	9
1.1 取り立て副詞	9
1.2 主な取り立て副詞の用法	10
1.3 取り立てスコープの種類	17
1.4 取り立て副詞の特徴	20
第二章 取り立て副詞の意味決定における重音の役割	24
2.1 重音の分類及び先行研究	24
2.1.1 「語法重音」	24
2.1.2 「邏輯重音」	27
2.1.3 「感情重音」	28
2.2 取り立て副詞の意味解釈と重音の関係	29
2.2.1 取り立てスコープと重音との関係	29
2.2.2 副詞自身に重音が置かれる	35
2.3 重音による音節強勢	37
2.3.1 中国語2音節語の重音分析	37
2.3.2 取り立てスコープと語法重音	38
2.4 重音のレベル	38
第三章 取り立て副詞の意味決定における「弱化」の役割	40
3.1 「弱化」の定義	40
3.2 「弱化」に関する先行研究	42
3.3 「弱化」の4つの特徴	43
3.3 取り立てスコープと「弱化」の関係	47

第四章	取り立て副詞の意味解釈に関わる「語調重音フレーズ」	52
4.1	取り立て副詞の意味とポーズとの関係	52
4.1.1	ポーズに関する先行研究	52
4.1.2	取り立て副詞の意味解釈に関わるポーズの役割	53
4.2	「語調重音フレーズ」の定義及び特徴	54
4.2.1	「韻律詞」、「フレーズ」に関する先行研究	54
4.2.2	「語調重音フレーズ」の定義	54
4.3	「語調重音フレーズ」のパターン	55
4.3.1	「前方スコープ」のパターン	56
4.3.2	「後方スコープ」のパターン	59
4.3.3	取り立て副詞が焦点	61
第五章	Praat ソフトによる音声分析	62
5.1	重音の音声特徴	63
5.1.1	取り立て副詞の重音の音声特徴	64
5.1.2	語アクセントパターンによる2音節語の重音の音声特徴	68
5.1.3	「感情重音」の音声特徴	72
5.2	「弱化」の音声特徴	74
5.2.1	取り立て副詞の弱化の音声特徴	74
5.2.2	語アクセントパターンによる2音節語の弱化の音声特徴	77
5.2.3	重音と弱化の細かい分析	78
5.3	「語調重音フレーズ」の音声的实现	80
第六章	取り立て副詞の音声パターンの提案	83
6.1	「也」の音声パターン	84
6.2	「又」の音声パターン	85
6.3	「再」の音声パターン	85
6.4	「就」の音声パターン	86
6.5	「才」の音声パターン	86
6.6	「都」の音声パターン	87
6.7	「只」の音声パターン	87
	まとめ	88
	参考文献	92

序論

0.1 問題提起

現代中国語の副詞には、同じ文中位置でありながら、意味的にいくつかの要素を取り立てることができる特殊的な副詞が存在する。これらの副詞は常に文中のある意味的に繋がりのある成分(本稿では「取り立てスコープ」と呼ぶ)と共起しなければならない。取り立てスコープの違いに応じて意味の違いが見られる特徴を有する典型的な副詞としては、「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「都」、「只」などが挙げられる。コンテキストが不明な場合は、これらの副詞が含まれる文は複数の意味に解釈され、文の意味が曖昧になってくる。これは副詞としての位置の制約があり、日本語の助詞のように、取り立てスコープとなる句を位置のみによって示すことができないからである。取り立てスコープがどこにあるかにコンテキスト、語順、音韻等様々な要素が関与している。特に、ポーズやストレスのような音韻的な要素が同言語における意味決定に深く関わっていると見られる。そこで、本論文はこれらの取り立て副詞の意味決定における韻律特徴の役割を探ることを主眼とする。さらに、中国語学習者に音調の情報が書面からでも分かるように、様々な音声符号を用いた教授法を提案したい。

一般的に、中国語の語順は比較的固定されていて、文の意味を決定するのに大きな役割を果たしていると言われている。¹しかし、語順だけによっては、文の意味を必ずしも完全に表せない場合も存在する。前述したように、同じ文中位置でありながら、意味的にいくつかの要素を取り立てることができる特殊的な副詞が存在する。コンテキストが不明な場合は、これらの副詞が含まれる文は複数の意味に解釈され、文の意味が曖昧になってくる。現代中国語の副詞「也」を例に挙げる。現代中国語の副詞「也」は日本語の「も」に相当し、その基本的な働きは前の文脈に描き出されたのと類似の事態を追加し、示すことである。本稿ではこのような意味で使われている「也」を「類似追加」の「也」と呼ぶ。コンテキストが不明な場合や音調の情報がなければ以下のような「也」を含む文の意味は曖昧である。

- (0-1) 过些日子他也要去杭州。
- a いく日かしたら彼も杭州へ行く。
 - b いく日かしたら彼は杭州へも行く。
 - c いく日かしたら彼は杭州へ行きもする。

香坂順一 (1988) p. 268

上記用例の下線部で示したように、「也」を用いた文を日本語に訳す際、コンテキストが不明な場合、いくつかの意味に解釈される。「也」が文中のどの箇所を修飾しているかは、統語的に明らかではなく、「也」は「他」、「杭州」、「去」のいずれかを修飾し得る。上記香坂では、「也」は日本語の「も」にあたり、前に述べていることと対比し同じところがあ

ることを表す。「也」と対比される事柄が現れない場合もある」と説明し、例文(0-1)の中国語を(0-1a)のように訳している。しかし、例(0-1)では、「也」と対比される事柄が現れない場合、いくつかの解釈が可能である。例えば、「也」が取り立てる要素が「他」(「彼」)であれば、彼以外の誰かが杭州へ行くことを含意し、「也」が取り立てる要素が「杭州」(「杭州」)であれば、彼は杭州以外のところにも行くことを含意し、それぞれ(0-1a)、(0-1b)に対応する。さらに、「也」が「去」(「行く」)を取り立てることもあり得る。この場合は、例文(0-1)はcの「彼は杭州へ行きもする」と訳されるべきである。

また、「也」の基本義は前の文脈に描き出されたのと類似の事態を追加し、示すことであるが、その基本義から取り立てスコープの語のみではなく、その指示対象と比べ、程度の甚だしいものを例示し、強調する派生義も有する。本稿ではこのような「也」を「極端な場合の例示」の「也」と呼ぶ。例文(0-1)は以下のような読みにも取れる。

d いく日かしたら彼でさえも杭州へ行く。

このように、副詞「也」は同じ文中位置でありながら、意味的にはいくつかの要素を取り立てることができる。これは、統語的には、「也」という副詞に生起位置の制約があることによる。「也」が文中のどの要素を取り立てているのかはコンテキスト、語順、音韻等様々な要素が関与する。特に、「也」等の取り立て副詞の意味は重音やポーズの位置などといった書き言葉では現れにくい音韻的条件にも密接に関わっている。

0.2 本論の目的

前述したように、中国語の取り立て副詞の意味は重音やポーズの位置などといった書面上現れにくい音韻的条件にも密接に関わっている。このため、一部の取り立て副詞が持つこの曖昧性は中国語を母語としない人々の中国語学習上での妨げになっている。また、取り立て副詞は意味が多岐にわたり、用法も複雑であるため、中国語学習者にとって学習上最も難しいと感じる点の1つであるとみられ、中国語教育現場においても、この問題はよく学生から質問され、悩まされる問題である。

これらの取り立て副詞は極めて頻繁に使用されているが、取り立て副詞の解釈の違いを生じるような音韻の仕組みの記述に関する研究については未だ十分とは言えない。今までの副詞に関する研究において、取り立て副詞に関する研究は少なからずあったが、主に形態論や構文論の研究であって、必ずしも取り立て副詞の意味と発音との関係まで分かりやすく説明するような音韻論的研究ではなかった。特に、重音とポーズ(句切り)の間関係を明らかにする必要があると思われる。そこで、本稿ではより一般的な取り立て副詞を含む文において、重音、ポーズ等の音韻要素が意味解釈とどのように関係するかを明らかにし、これらの取り立て副詞の取り立ての構造と音韻の関係を考察する。よく使われる取り立て副詞には主に「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「都」、「只」が挙げられる。本稿はこれらの取り立て副詞を中心的な対象として、これらの意味解釈の違いを生じるような韻律的特徴(重音や重音の後続部分の弱化、ポーズ)を整理したうえで、これらの重音の音

声の実現にどのような特徴があるかを、実験音声学的分析にしばしば用いられるパソコンソフトPraat (version 5.3.55)による、母語話者発音の波形とピッチ曲線の分析によって提示する。韻律特徴のこのような視覚化の重要性は、中国語教育においても近年重要性が認められつつある。

本稿は「語調重音フレーズ」の概念を導入することで、取り立て副詞の意味決定における重音、ポーズの役割を説明することができるという点を主眼とする。取り立て副詞を含む文の曖昧性を解消できる有効な手段は従来の研究で重要視されてきた重音ではなく、弱化やポーズも関与するが、これらを統合した概念として、重音句を含む韻律構造として「語調重音フレーズ」を立て、重音とポーズの配置による発音の違いを統一的に説明できることを示す。その上、中国語学習者に音調の情報が書面からでも分かるように、様々な音声符号を用いた教授法を提案したい。

0.3 先行研究

0.3.1 副詞の分類及び統語位置

本論文では、中国語の副詞については、「主に状語(連用修飾語)としての機能を持ち、動詞や形容詞などを修飾し、動作・行為の時間・範囲・程度・量や性質、状態の程度、語気、頻度と否定を表すものである」と定義する²。

中国語では実在の意味を持つかどうかという基準によって実詞(詞)と虚詞(辞)の2つに分けることができる。実詞とは実在の意味を持つ語という意味で、実詞には名詞・代名詞・動詞・助動詞・形容詞・副詞・数詞・量詞がある。一方、実在の意味を持たない語は虚詞に分類される。虚詞には連詞(接続詞)・介詞(格助詞)・助詞(助動詞の一部)・語気詞(終助詞)・嘆詞が入る。

中国語の副詞は、連用修飾語としてのみ用いられ、述語の前という位置に来なければならないという制限が課せられている。日本語の助詞のように、主語の前に来ることはない。例外として、「就」、「只有」が「範囲を限定する」という意味を表す場合は限定される対象が主語になることができる。この場合に限り、「就」、「只有」は主語の前という位置に来ることができる。「就」の他の意味、また他の副詞は主語の前に来ることはできない。また、同様に、副詞は目的語の後の位置(目的語が前置させられる場合を除く)に来ることもない。日本語では、「太郎さんは花子のことも好き」というように、「も」は目的語である「花子のこと」の後に来ることができるが、中国語では、「太郎喜欢华子也」のような語順はない。このように、取り立て副詞の位置が述語の前に限られているため、同じ位置にありながら、意味的に主語、述語、目的語のいくつかの要素を取り立てることができる。

0.3.2 焦点と取り立て

現代中国語の副詞には取り立て機能を持つものとそうでないものが存在する。よく使われている取り立て機能を持つ副詞には「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「都」、「只」の7つ

が挙げられる。これらの副詞は20世紀の50年代から数多くの研究者によって研究されてきたが、80年代に、中国語の学者達が「焦点」という概念を取り入れ、中国語の言語特徴と結び付け、さらに深く研究がなされた。

焦点の研究について、欧米ではLambrecht (1986, 1987, 1994) が焦点を3種類に分け、それぞれを「述語焦点」(predicate focus)、「狭い焦点」(narrow focus)、「文焦点」(sentence focus)と呼んで区別している。「述語焦点」は「話題—論評」という形式で現れ、述語は話題 (topic) に対する論評 (comment) である。これは最も一般的な焦点構造だとLambrechtが指摘している。「狭い焦点」は「対比焦点」(contrastive focus)とも呼ばれ、焦点が1つの名詞フレーズ (NP) で、焦点以外のすべての部分が省略できるという。ここでいう焦点NPは必ずしも「新情報」とは言えない。「文焦点」とは文全体が焦点となっているということである。

中国語研究における焦点の分類について、中国語学界では、未だに統一した定論がなく、主に4つの見方が存在している。それぞれは①自然焦点と対比焦点 (方梅 1995)、②無表記焦点と有表記焦点 (陳昌来 2000)、③構造焦点と語気焦点 (範開泰 1985)、④情報焦点、語義焦点と話題焦点 (劉丹青 徐烈炯 1998) の4つである。

1つの文の中には焦点が必ず1つだけ存在するのか、2つ或いは2つ以上が同時に存在するのか等の問題を巡る議論も多い。「多焦点派」は「1つの文には少なくとも1つの焦点があり、自然焦点と対比焦点が共に現れることができる。」と主張している。多くの学者は「多焦点派」に賛成し、「多焦点論」が主流となっている。それに対して、「唯一焦点派」は焦点は話し手が最も重要だと思う情報であり、1つの文の中には必ず1つしか現れないと反論している。その他に、挨拶、決まり文句等には焦点が存在しないという見方もある。本論は1つの文に自然焦点と対比焦点が共に現れることができると思う。

焦点は話し手が最も重要だと思う情報、あるいは最も聞き手に伝えたい情報のことであるため、新しい情報が焦点になりやすい傾向が見られる。しかし、焦点が必ずしも新しい情報とは限らず、旧情報も焦点になれる。焦点を特定する手段、即ち、文中のある部分の重要性を際立たせる手段としては、主に「音韻手段」と「文法手段」の2種類に分かれる。「音韻手段」は重音とポーズ等の音韻的手段で焦点を特定する方法のことである。Halliday (1967) は「焦点は重音が最も顕著な部分である」と定義し、焦点と重音との密接な関係を指摘している。「文法手段」とは焦点マーカー、特別な文型及び語順を用い、焦点を特定する方法のことである。中国語学界では、「是」、「连」を「焦点标记词」「焦点マーカー」と呼び、「就」、「才」、「都」、「又」、「也」等を「焦点敏感算子」(focus sensitive)と呼んで区別している。一方、张谊生 (2004) は少量を表す範囲副詞「只」、「就」、「唯」、「惟」、「唯独」、「仅」、「仅仅」、「单」、「单单」を「焦点敏感算子」(focus sensitive) から独立させるべきと主張し、「唯量词」と呼んでいる。このように、「就」、「才」、「都」、「又」、「也」等の副詞の定義、分類はまだ統一していない面と焦点の分類が多岐にわたり、説得力のある理論とは言えない面の2つから、まだ議論の余地が残されていると思われる。

本稿は日本語学でしばしば用いられる「取り立てスコープ」(沼田 1995)の概念がこれら

の副詞の「焦点」と重なることに着目し、「取り立て」の観点からこれらの副詞の多義を説明することを試みる。

取り立て詞は、すべて取り立てスコープを持っている。取り立てスコープとは、取り立て詞が文中で意味的に影響を及ぼし得る最大の領域で、当該取り立て詞によって、他と範列的な対立関係をなすと捉えられる、文中の範囲である。取り立てスコープは、取り立て詞の分布及び文脈等の情報による、統語論的側面と語用論的側面の両方から規定されるものである。

副詞(語気副詞のを除く)が焦点の働きを実現する手段は以下の2つに分けられる。

1. 副詞自体が焦点として働く。この場合、副詞に「重音」が付加される。他の取り立てられる要素がない。
2. 副詞自体が単独で焦点として働くわけではなく、意味的繋がりがある成分(取り立てスコープ)とともに焦点の働きをする。

0.3.3 多義文の意味と音韻との関係

楊曉安(2006)では、中国語の多義文の意味と音声との関係について、次のように述べている：

ある書かれた多義文を見たとき、その文の正確な意味を判断するのは難しいが、発話者の口から直接聞いたのであれば、事情は違ってくる。発話者による音の高低、強弱、音長の処理、あるいはポーズの位置、時間、スピードなどがヒントとなって、われわれは多くの可能性の中からその多義文の正確な意味を選び出すことができる。

楊氏は以上のことから、語音は文法・語彙の構造を示す1つの重要な手段だということができると指摘している。楊氏は以下の例を挙げている：

(0-2)a 咬伤了/猎人的狗 (ポーズ)

ハンターを噛んで、怪我させた犬。

b 咬伤了猎人的/狗 (ポーズ)

ハンターの犬が噛まれて怪我した。

(0-3)a 东京和大阪的中央区

東京及び大阪の中央区

b 东京和大阪的中央区 (音の強さ)

東京の中央区と大阪の中央区

上の例(0-2)、(0-3)から楊氏は中国語では、音の強さの増減やポーズの有無によって語意を限定・区別することは、最もよく用いられる方法であると説明している。

中国語学界で有名な語学者朱德熙(1987)も中国語の文法と音声の研究の位置づけをこの

ように示している：「语音节律(轻重音、语调、变调)跟语法的关系，是语法研究中最根本最重要的方面。(韻律(軽音、重音、イントネーション、声調の変化)が文法との関係に関する研究は文法研究の中の最も根本的かつ重要な点である。)

0.3.4 副詞の意味と音韻との関係

Jackendoff(1972)では、英語の文の焦点にストレスがいつも付加されると述べている。副詞の多義的現象と音声言語の韻律との関係について、多くの研究が重ねられてきた。例えば、趙元任(1980)が最も早く『軽重音の型』とポーズがこのような多義文の意味識別に有効であると指摘した。

実験音声学の手法を用いた研究報告も見られる。楊立明(2003)、楊曉安(2005)、等がある。楊曉安(2005)が多義句の構造は文の構造関係上から区別する以外に、音声上でかすかな区別が存在していることを説明し、さらに、音声実験を通じて周波数、振幅、時間の長さの面から検証した。楊立明(2003)は副詞に関わる「岐義文」に焦点を絞り、さらに、文レベルのものと語レベルのものに分けて分析した。音声分析と聴取実験を行い、以下のような結果結論が得られた：

文レベルの岐義文とストレスとの関係について、ストレスの文中位置が意味判定に最も深く寄与していることが明らかになった。ストレスの文中位置が「語義指向」などの要請に合わせて前後移動するが、それによって韻律構造のパタンも変わっていく。

しかし、語レベルの岐義文とストレスとの関係については「語義指向」の理論は適応できない。このような岐義文の意味判定において、ストレスが副詞自体にかかるか否かは、重要な手掛かりである。

楊立明は「頭高型」、「中高型」、「尾高型」の三つの韻律構造を提唱し、文レベルのものと語レベルのものと韻律関係の異同も考慮した。さらに、楊立明(2003)は「也」の「語義指向」と韻律構造について、次のように述べている。「「也」は典型的な『双方指向性』を持つ副詞で、『語義前指』³の場合は文ストレスが文頭にかかり、『頭高型』の韻律構造をなす。『語義後指』の場合は文ストレスが文末に移り、『尾高型』の韻律構造をなす。」楊氏はイントネーションがかぶせる時、ストレスの弁別機能についても論じた。今までの研究にない斬新な考え方で、大きな一歩を踏み込んだ。

また、陳雅(2003)、徐以中・楊亦鳴(2010)等が「就」の意味と音韻的要素の関係を考察し、ストレスの位置が取り立て副詞を含む同音異義文の意味解釈に決定的な役割を果たしていると指摘している。「就」の他に、パソコンソフト Praat による音声実験を行い、「都」の意味と音韻構造の関係を調べる先行研究もある。

しかし、それらの研究は個別の副詞の音声特徴を調べるものであって、より一般的な副

詞と音韻構造の関係を調べるデータはまだ見られていない。また、それらの研究は重音とポーズをそれぞれ分離した単独の韻律特徴として扱い、重音以外の部分の音声特徴にも触れていない。

本稿はより一般的な副詞と重音、ポーズの関係について考察する。また Praat による音声分析では、1 音節語である各取り立て副詞に重音が付加される場合、2 音節語のアクセントパターン（「軽声」を含む語、「前重型重音」の語と「後重型重音」の語）による重音、弱化のそれぞれの声調に応じた音声特徴の変化の有無を考察する。

0.4 研究対象

本稿は取り立て機能を持つ副詞「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「都」、「只」の 7 つを研究対象とする。これらの副詞は日常会話の中で、頻繁に使用されているため、本稿の研究対象とする。一方、「唯」、「惟」、「唯独」、「仅」、「仅仅」、「单」、「单单」等は使用頻度が低く、かつ副詞「只」の用法との変わりがほとんど見られないため、本稿の研究対象から外す。また、中国語の副詞には取り立ての機能を有するものと、そうではないものがあることを示し、その弁別基準を提示する。その上で、取り立ての機能を有する中国語の副詞と日本語の取り立て副詞の異同について考察する。中国語の副詞により取り立てられる要素を副詞の直前にある焦点位置におくという操作が必要であるのに対し、日本語の取り立て副詞は取り立てられる要素に後接し、出現位置で焦点を示し得るという相違点があることを示す。例えば、「也」には主に下が示すような 4 つの意味⁴があり、その中で取り立て機能が果たす用法は①と③だけである。

- ① 2 つの事柄が同じであることを表す。
- ② 仮定が成り立つかどうかにかかわらず結果が同じことを表す。
- ③ 程度の甚だしいことを表す。語気を強め、前に「连」(…でさえ) の意味を暗に含む。否定文に用いることが多い。
- ④ 婉曲の語気を表す。

取り立て副詞はそれぞれ 2 つ以上の用法があり、本稿取り立て機能を持たない用法を研究対象から外す。また、これらの取り立て副詞はそれぞれ語気を表す機能があり、それも取り立て機能を持たないため、研究対象としない。従い、本稿は、現代中国語の取り立て機能を持つ副詞及び副詞の取り立ての機能を持つ用法を研究対象とする。

副詞は省略可能であり、副詞が省略されても文の知的意味は変わらない。しかし、副詞と意味的に結ぶ語を残し、副詞は省略できない場合がある。副詞が用いられないと、文の知的意味が変わるかまたは非文になる。

取り立ての機能を有する語は、明示される意味と暗示される意味が複合化された語類であると考えられる。このような副詞が文中に現れる場合、その明示される意味と同時に、暗示される意味も生じるが、副詞が現れない文では暗示的な意味が読み取れず、文の知的意味が変わってしまうかまたは非文となるのである。

0.5 研究方法

研究方法としては、中国語と日本語の辞書、文学作品などから「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「都」、「只」等の副詞を抽出し、分析を行う。また、音声分析ソフト Praat により、音韻分析をする。Praat を用いた調査においては、得られたデータに対しては、パソコンソフト Praat を用い、音声資料から音声の高さ、持続時間、強さなどのデータを抽出し、分析を行う。副詞の解釈に主として影響しているのは何か（ピッチの大きさか、ポーズの長さか、音節の長さか）を多角的に分析して明らかにする。

0.6 本論の構成

本稿の構成は以下のとおりである。まず第一章で、取り立ての概念を取り入れ、取り立て副詞の定義と分類を行う。その上で、それぞれの取り立てスコープの特徴を考察する。また、各取り立て副詞の用法も例示しながら、説明する。第二章では、先行研究の主張を網羅する形で取り立て副詞と重音の関係をまとめる。取り立て副詞が含まれる同音異義文において、重音の種類、位置、レベルが文の意味決定にどう関係しているかの解釈を試みる。第三章では、重音だけでは不十分な場合として、「弱化」による区別を取り上げる。第四章では、「弱化」と「ポーズ」の関係を統合した概念として、「語調重音フレーズ」を提案し、「語調重音フレーズ」に基づいた分析を行う。第五章では、Praat ソフトによる音声的実現の可視化を行い、先行研究ですでに明らかにされている重音の実現と対比して、本稿で導入した「弱化」の特徴を示す。さらに、潜在的なポーズの可能性により定義した「語調重音フレーズ」の中で、これらの「重音」と「弱化」の特徴が確認でき、ポーズが顕在化しない場合でも弱化の有無によって意味の弁別が可能であることを述べる。第六章では、各取り立て副詞の音声パターンをまとめ、様々な音声符号を用いた教授法を提案する。

本論は次の6つの部分からなる：

- ① 取り立て副詞と取り立てスコープ
- ② 取り立て副詞の意味決定における重音の役割
- ③ 取り立て副詞の意味決定における「弱化」の役割
- ④ 取り立て副詞の意味決定における「語調重音フレーズ」の役割
- ⑤ Praat ソフトによる音声実験
- ⑥ 各取り立て副詞の音声パターン

第一章 取り立て副詞と取り立てスコープ

1.1 取り立て副詞

日本語の取り立て詞⁵(取り立て助詞)に関する研究の代表的なものに、沼田善子(1986, 1995)などが挙げられる。沼田善子(1986b)は従来副助詞と係助詞に分類された助詞のうちいくつかを取り出し、それを「取り立て詞」というカテゴリーにまとめた。沼田(1986b)は「取り立て詞」について、それらの語の個々の構文的、意味的特徴を考察するばかりでなく、「取り立て詞」全体に共通する一般的な構文的、意味的な特徴を体系付けることも試みた。「取り立て詞」という概念については、次のように定義している。⁶

取り立て詞は、すべて取り立てスコープを持っている。取り立てスコープとは、取り立て詞が文中で意味的に影響を及ぼし得る最大の領域で、当該取り立て詞によって、他と範列的な対立関係をなすと捉えられる、文中の範囲である。取り立てスコープは、取り立て詞の分布及び文脈等の情報による、統語論的側面と語用論的側面の両方から規定されるものである。

「とりたて詞」の語彙項目として、「も」、「でも」、「さえ」、「すら」、「まで」、「だけ」、「のみ」、「ばかり」、「しか」、「こそ」、「など」、「なんか」、「くらい」、「は」の14語をあげている。沼田(2006)では、「自者」、「他者」、「主張」、「含み」の4つの概念を用い、取り立ての機能を説明している。

「自者」：文中の様々な要素

「他者」：自者と範列的に対立する他の要素

「主張」：自者について明示される文

「含み」：他者について暗示される文

つまり、文中のある要素を「自者」としてとりたて、主張として明示される述語句に対し、「他者」との論理的関係を示す役割を果たすのが、取り立ての機能であると考えられる。日本語の取り立て詞と同様に、中国語の取り立て副詞も意味的に繋がる語句と一緒に明示されている。金(2009)は日本語の取り立て副詞「さえ」と中国語の取り立ての機能を有し、意外の意味を表す「都」の取り立て特徴の異同を考察し、「都」の取り立ての機能有無の弁別基準をについて、「都」と意味的に結ぶ語句が基本的に「都」とともに文中に明示されるべきか否かを挙げている。本稿は金氏の先行研究を踏まえて、取り立て副詞の取り立ての機能有無の弁別基準を以下のように示す：

- ①取り立て副詞は意味的に繋がりのある成分と共起する。
- ②取り立て副詞が文中に現れない場合、文の論理的意味が変わる(非文となる場合も含む)。
- ③取り立てスコープの示す「自者」に対する「他者」が文中に明示されているか、あるいは暗示的に含まれている。

以上の 3 つの条件を同時に満たせば、取り立ての機能を認める。次節では、上記で述べた 3 点を基準に、それぞれの副詞の取り立ての機能を有する用法について考察する。

1.2 主な取り立て副詞の用法

現代中国語の「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「只」、「都」は極めて使用頻度が高く、重要な単語である。これらは主に副詞として用いられるが、その他に、接続的な機能も有する。例えば：「只说不做」（口先だけで行動しない）における「只」は接続詞だと考えられる。また、介詞の機能を果たし、動作の対象、或いは範囲を導く用法も見られる。例えば：「就事论事」（事実即して論じる）。本稿は取り立ての機能を有する副詞としての用法のみ対象とする。また、同一語形の取り立て副詞には取り立ての機能を有するものとそうでないものがある。両者の弁別基準について上の節に述べたが、ここでは、まずそれぞれの取り立て副詞の用法を記述した先行研究をとりあげ、それぞれの副詞の用法の全体像をみる上で、それぞれの取り立ての機能を有する用法を説明する。

I 「也」の意味と用法

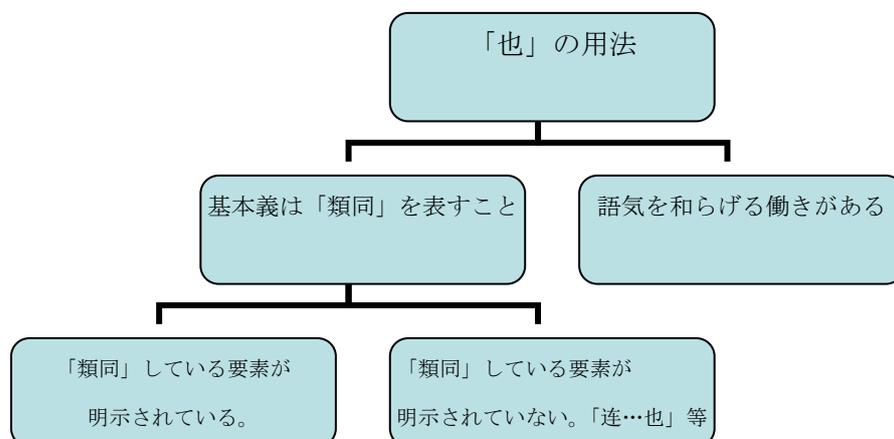
前述したように、現代中国語の副詞「也」は使用頻度が極めて高い副詞であり、「也」の用法に関する研究は数多くある。⁷代表的なものとしては、陆俭明、马真(1999)、 吕叔湘(2003)⁸などがあり、それらをまとめると、以下のようになる。

陆・马(1999)は「说「也」」という論文で、図1が示すように、現代中国語の「也」を「類同」を表す基本義と「和らげ」の語気を表す意味のつのパターンに大きく分類し。さらに、「類同」を表す基本義を「实用用法」（「実用用法」）と「虚用用法」（「虚用用法」）の2つに分けている。「実用用法」というのは「也」が含まれる文の中で、「類同」している要素が全て明示されている場合を指すことである。一方、「類同」している要素が明示されていない場合を「虚用用法」とすると指摘している。また、「连…也」形式について次のように説明している。

「连…也」格式属于「也」的虚用用法。「连」字后面,「也」字前面那个成分总是该格式的重音所在,它所举出的总是说话者认为最有可能(或最不可能)这样的事例」

（「连…也」という形式における「也」は「類同」を表す「也」的虚用用法である。「连」の後,「也」の前の要素は常にストレスが置かれる部分である。話し手の最も可能(或いは不可能)であると思われる事柄を挙げている)と指摘している。

図1 「也」の用法



上記、陸・马(1999)の説によれば、「連…也」という形式における「也」は「也」の基本義である「類同」を表している。一方、呂叔湘(2003)では、副詞「也」の意味を4種類に分類し、「連…也」の「也」は「甚至」(はなはだしい)の意味とし、「也」の基本義である「類同」と区別し、以下のように4つに分けて説明している：

①2つの事柄が同じであることを表す。

(1-1) 我要去杭州。他也要去杭州。

私は杭州へ行く。彼も杭州へ行く。

上記用例(1-1)では、「也」は「類似追加」の意味を表し、「也」によって取り立てられる要素は主語、述語、目的語及び文全体のいずれかが可能であるため、「類似追加」の「也」は取り立ての機能を有すると考えられる。

②仮定が成り立つかどうかにかかわらず結果が同じことを表す。

(1-2) 即使下大雨，足球赛也要按时举行。

大雨が降っても、サッカーの試合は時間通りに行う。

この用法は「也」の基本的な用法から派生したもので、接続的な機能と考えられる。「也」と意味的に繋がりのある成分(自者)が明示されていないため、「暗示的な自者」とする。

③程度の甚だしいことを表す。語気を強め、前に「连」(…でさえ)の意味を暗に含む。

否定文に用いることが多い。

(1-3) 他一心扑在工作上，有时候饭也忘了吃。

彼は一心に仕事に打ち込み、時には食事をとることさえ忘れてしまう。

呂叔湘 (2010) p. 432

上に挙げた例(1-3)では、「他一心扑在工作上」(彼は一心に仕事に打ち込む)ということ

を強調するために、「飯也忘了吃」（食事を取ることさえ忘れた）という極端な例を挙げ、彼の忙しさを表している。「也」は意味的に繋がりのある成分「飯」と共起し、「也」が文中に現れないと、上の例文は非文になってしまうため、「極端な場合の例示」は取り立ての機能を有すると考える。

④婉曲の語気を表す。

(1-4) 也难怪她不高兴，你也太不客气了嘛！

彼女が不機嫌になるのも無理はないよ、君も無遠慮すぎたんだ。

上記例文では、「他者」と「含み」はないため、語気を表す「也」は取り立て機能を有していないと考える。以上をまとめると、上記の4つの用法の中、①、②、③の用法は取り立て機能を有していると考えられる。

II 「又」の意味と用法

呂叔湘(2003)では、「又」の用法はほぼ3つに分かれ、次のように記述している：

① 時間的な継続関係を表す。

(1-5) 他去年犯过这种病，今年又犯了。

彼は去年この病気が再発したが、今年もまた繰り返した。

② 累積を表す。時間には無関係。

(1-6) 吕老师是县里的模范教师，又是人民代表。

呂先生は県の模範教師で、人民代表でもある。

上記例文(1-5)から分かるように、「又」は「他者」と「含み」を必ずもつ、という点で「取り立て副詞」であると言える。①では、「自者」が「今年」で、「含み」は（この文脈では先行文脈で明示されている）「(去年)犯过」で、被修飾部である。一般的に、被修飾部の全部または一部が「他者」に関する「含み」である、というのがこの副詞の特徴である。ところが②では、修飾されている部分（述部）が「自者」になっている場合も見られる。

③ 話し手の気持ちを表す。

(1-7) 他又不会吃人，你怕什么。

彼は人をとって食うというわけでなし、何がこわいのだ。

上記の例文(1-7)における「又」は否定を強調する役割を果たす。語気を表す「也」と同様に、「自者」、「他者」、「含み」は上記の例文から見出さないため、「又」の否定を強調する機能は取り立て機能ではないと考える。以上から、上記が示した①と②の「又」の用法は取り立ての機能であるということが分かる。

Ⅲ 「再」の意味と用法

呂叔湘(2003)では、「再」には、次の①～⑤のような、5つの意味があるとした。

①動作(あるいは状態)の繰り返しまたは継続を表す。まだ実現していない動作あるいは経常的な動作に多く用いる。

(1-8) 你敢再赛一场吗?

君、まだ勝負する気があるかい。

この場合は「再」自身が焦点を働かすため、取り立ての機能ではないと考える。

②ある動作が、近い将来ある状況の下で発生することを表す。

(1-9) 今天来不及了, 明天再回答大家的问题吧。

今日はもう時間がないので、明日みなさんの質問に答えることにしましょう。

上の例文(1-9)では、「自者」が「明天」、「他者」が「今天」で、「含み」は「不回答大家的问题」である。②の用法の「再」は取り立ての機能を持っている。

③形容詞の前に用い、程度の増加を示す。

(1-10) 难道没有比这个再合适一点儿的吗?

これよりもっと適当なものがないわけではあるまいに。

上記例文(1-10)では、X(比Y)再A一点儿という構造の場合、Xは「自者」、Yは「他者」、Aは「含み」である。

④「再」を否定詞と共に用いる。

(1-11) 唱了一个, 不再唱了。

1曲歌ったからもう歌わない。

上記例文(1-11)では、「含み」は「唱了」、「自者」と「他者」がともに「暗示」になっているが、それぞれ「今後」と「以前」のような副詞であることが了解されている。

⑤ほかに、もう1度。

(1-12) 我国政府就此事再一次发表声明。

わが国政府はこの件について再度声明を発表した。

上記例(1-12)は「再一次」全体が取り立て副詞となっている。

以上をまとめると、①、②、③、④の「再」は取り立ての機能を有すると考える。

Ⅳ 「就」の意味と用法

「就」の用法は複雑で、呂叔湘(2003)では、「就」を次の①～⑦が示すように、7つに分けている。

①短時間で発生することを表す。

(1-13) 天很快就亮了。

夜はまもなく明ける。

上記例文(1-13)では、「就」の前に時間を表す語がない場合も見られる。この場合、「就」という副詞自身が短時間で発生する意味を表し、取り立て副詞ではない。「就」の前に時間副詞がある場合、それは「自者」にあてる。この文では、「他者」が明示されていない。「含み」は短時間で発生する、速いということである。

②ずいぶん前にすでに起こった事を強調する。

(1-14) 他十五岁就参加了工作。

彼は15歳で就職した。

上記例文(1-14)では、「十五岁」が「自者」で、それより遅い時期が「他者」であるため、この用法は取り立ての用法と言える。

③2つの事柄が相接して発生することを表す。

(1-15) 送他上了火车，我就回来了。

彼が汽車に乗るのを見送ったあと、私はすぐ帰った。

上記例文(1-15)では、「就」は接続詞で、本稿では、取り立て副詞の機能を持たないと考ええる。

④認定・判断を強める。

(1-16) 这个花色就好。

この色や柄がとてもよい。

上記例文(1-16)の「就」は語気を表す用法で、取り立て副詞の機能を持たない考える。

⑤範囲を確定する。

(1-17) 我就要这个。

私はこれだけが欲しい：ほかのはいらない。

上記例文(1-17)では、「自者」が「这个」、「他者」が明示されていないが、「ほかの」と推測される。含みが「不要其他的」(ほかのはいらない)と考えられる。この用法は取り立ての機能である。

⑥数の多い少ないを強調する。

(1-18) 去的人不多，我们班就去了两个。

行った人は多くない。我々のクラスからは2人だけだ。

上の例文では、「自者」が「两个」、「他者」が「それ以上」で、含みは「2人以上の人は

行かなかった」ということである。

⑦前文を受け、結論を下したことを表す。

(1-19) 如果他去，我就不去了。

もし彼が行くなら、私は行かない。

上記例文(1-19)では、「就」は接続詞で、本稿では、取り立て副詞の機能を持たないと考える。

①、②、⑤、⑥の用法は取り立ての機能を有する。

V 「才」の意味と用法

呂叔湘(2003)では、「才」が次の①～⑤が示すように、7つに分けられている。

①今さっき：事が今しがた発生したことを表す。

(1-20) 我才从上海回来不久。

私は上海から戻ったばかりです。

上記例文(1-20)では、「自者」が暗示的な「現在」、「他者」が「それ以前」、含みは「上海から戻ったばかり」ということである。

②事態の発生、または終結のしかたが遅いことを表す。

(1-21) 跳了三次才跳过横竿。

3回跳んでやっとバーを飛び越えた。

上の例文(1-21)では、「自者」が「三次」(3回)、「他者」が「第二次或第二次之前」(2回目以前)である。

③「数量が少ない」「程度が低い」ことを表す：ただ・・・だけ。

(1-22) 一共才十个，不够分配的。

合わせてたったの10個だ、分けるには足りないよ。

上記例文(1-22)では、「自者」が「10个」(10個)、「他者」が「十个以上」(それ以上)である。

④ある条件あるいは原因・目的の下でのみ、どうなるかを表す。

(1-23) 只有熟悉情况才能做好工作。

状況を熟知してこそ仕事を成し遂げることができる。

上記例文(1-23)では、「才」は接続詞で、本稿では、取り立て副詞の機能を持たないと考える。

⑤断定の気持ちを強調する。

(1-24) 昨天那场球才精彩呢。

昨日のあの試合はすばらしかったよ。

上記例文(1-24)の「才」は語気を表す用法で、取り立て副詞の機能を持たないとする。

①、②、③、④の「才」は取り立ての機能を有する。

VI 「只」の意味と用法

①「只」の用法は比較的単一で、呂叔湘(2003)によれば、「只」は「これ以外に別のものがない」という意味を表す。

(1-25) 这本书我只翻了翻，还没详细看。

この本はざっと見ただけで、まだ詳しく読んでいない。

①の「只」は取り立て機能を担っているため、前述した取り立て副詞「也」、「又」、「再」、「就」、「才」と同様の特徴を有している。つまり、上記用例(1-25)が示すように、「只」は主語と述語の間にしか位置できないという厳しい制限を受けるのである。

②直接名詞の前に置き、事物の数量を制限する。「只」と名詞の間に1つの動詞(「有」、「是」、「要」など)が隠れていると考えてよい。

(1-26) 屋子里只有老王一个人。

部屋には王さん1人だ。

①と②の用法は取り立て機能を有する。

VII 「都」の意味と用法

呂叔湘(2003)では、「都」の用法はほぼ3つに分かれ、次のように記述している：

①すべてを総括することを示す。

(1-27) 一天工夫把这些事都办完了。

1日でこれらの事をすっかりかたづけた。

上記例文(1-27)では、「自者」が「这些事」、「全部」(これらの事)、(全部)で、「他者」は暗示的な「その個々の成分」である。

②はなはだしいことを表す。

(1-28) 把他都吵醒了。

さわいで彼まで起こしてしまった。

上記例文(1-28)では、「自者」が「把他吵醒了」で、「他者と含み」は暗示的である。

③すでに：文末にはふつう「了」を用いる。

(1-29) 都十二点了, 还不睡。

もう 12 時なのに、まだ寝ないのか。

上記例文(1-29)の「都」は語気を表す用法で、取り立て副詞の機能を持たないとする。

①と②の用法は取り立ての機能を有する。

中国語の単音節の副詞は、普通動詞を修飾する機能の他に、接続的な機能も持っている。本稿は接続的な機能を取り立て機能と認めない。また、語気を表す機能も本稿の研究対象から外す。

1.3 取り立てスコープの種類

中国語の取り立て副詞は全部取り立てスコープを持っている。取り立てスコープの種類について、日本語の取り立て副詞「も」の取り立てスコープを例に挙げながら、見ていくことにする。以下の例文は沼田(1986)が取り上げたものである。(以下では、取り立てスコープを「」に入れて示す。

(1-30) 「太郎」も学校に行く。

(1-31) 花子は「泣き」もする。

(1-32) あの歯医者「腕もいい」が、「料金も高い」。

日本語の取り立て副詞「も」は主語、述語、目的語等といった成分に後接することができる。上記の例文(1-30)と例文(1-31)における「も」の取り立てスコープはそれぞれ「も」の直前にある名詞句と動詞句である。沼田(1986)はこのような場合を「直前スコープ」と呼び、「直前スコープ」は最も一般的な取り立てスコープであると指摘している。「前方スコープ」は前節であげた「自者」(暗示的な「他者」と対比される部分)に対応し、「含み」は「主張」として明示されている部分に当たっている。

日本語では、「自者」を示す取り立てスコープが「も」の後に来ることは許されない。しかし、中国語では、「自者」を示す取り立てスコープが「取り立て副詞」の修飾部に現れる場合がある。例えば：

(1-33)a. 我想他们是从心底喜欢你, 因为你美丽, 也「出众」。

*b. 我想他们是从心底喜欢你, 因为你美丽, 出众也。

彼らは心底からあなたのことが好きだと思ふ。何故かという、あなたは美人でもあり、目立つからでもある。 范熙 (2007)

上記例文(1-33)における「也」の取り立てスコープはその後の動詞である。中国語の副詞は連用修飾語として使われる時、動詞の前にしか置かれないという制限が課せられている。「也」の他、「又」、「再」、「就」、「才」、「只」もその後の要素を取り立てることができる。

取り立て副詞との相対位置から、取り立てスコープを「前方スコープ」、「後方スコープ」の2つのパターンに分類し、それぞれの取り立て副詞の特徴や相互関係を明らかにすることを旨とする。以下の例文を参照されたい。

(1-34) 风也很大⁹。

a 雨很大。「风」也很大。 「前方スコープ」

雨は強かった。風も強かった。

b 风很冷，风也「很大」。 「後方スコープ」

風が冷たくて、強くもあった。

上記の例文 (1-34) は特に音声上のストレスを置かない限り、「也」の取り立てスコープは主語の「风」、述語の「很大」、「也」を含む文である「风也很大」の3つの解釈が可能である。即ち、「也」の取り立てスコープが主語の「风」にかかれば、例 a が示すように、「很大」(強かった)という点において、「风」(風)の他の何か、例えば「雨」(雨)は「风」と同じである、或いは類似しているという含意が見られる。本稿では、取り立て副詞を先行する取り立てスコープを「前方スコープ」と呼ぶ。一方、「也」は述語の「很大」を取り立てることもできる。この場合、b が示すように、「也」の取り立てスコープは「很大」であり、「風は強くもあった」という意味解釈になる。取り立て副詞の後にくる取り立てスコープを「後方スコープ」と呼ぶ。

I 「前方スコープ」

「只」以外の取り立て副詞は全部「前方スコープ」を有している。

(1-35) 哥哥猜错了，「弟弟」又猜错了。

兄も当たらず、弟も当たらなかった。 呂叔湘 (2003) p. 461

(1-36) 这次失败了，「下次」再来。

今回失敗したらまたやるさ。 呂叔湘 (2003) p. 468

(1-37) 你们一个小组有 50 个人，我们「一个小组」就 10 个人。

君達のグループは 50 人もいるのに、私達のグループはたった 10 人しかいなかった。

(1-38) 9 点上课，他「8 点 50 分」才来。

9 時に授業が始まるのに、彼は 8 時 50 分にやっと来た。

(1-39) 「我们」都会唱邓丽君的歌。

私達はみんなテレサ・テンさんの歌が歌える。

総括の「都」は「前方スコープ」を持っている。副詞「都」は後述するようにすべてを総括することを示す。「也」と異なり、総括される対象は必ず「都」の前に置く。(疑問文を除く) その後の要素を取り立てることができない。「都」の後の目的語「邓丽君的歌」は「都」の取り立てスコープにならず、「都」は「前方スコープ」しか容認できない。

(1-40) 一天工夫把「这些事」都办完了。

1 日でこれらの事をすっかりかたづけた。 呂叔湘 (2003) p. 103

一般的に言えば、「都」の直前にある要素は「都」の取り立てスコープになりやすい。

(1-41) 邓丽君的歌「我们」都会唱。

テレサ・テンさんの歌は私達全員が歌える。

「都」は本来の語順から言えば、「都」の後方にある要素も取り立てることが可能だが、その場合は、当該要素を「都」の前に移動させる必要がある。

(1-42) 我们「邓丽君的歌」都会唱。

私達はテレサ・テンさんの歌を全部歌える。

ただし、疑問文では総括される対象（疑問代詞）が「都」のあとへ置かれる。

(1-43) 你都去过「哪儿」？

君はどこへ行ったことがあるの？

このように、「都」は他の取り立て副詞と異なり、取り立てスコープが疑問代詞の場合に限って、「後方スコープ」が許される。「都」は一般的にその前の要素を取り立てる傾向である。しかし、「只」は「前方スコープ」が容認できない。

(1-44) 这本书我只「翻了翻」，还没详细看。

この本はざっと見ただけで、まだ詳しく読んでいない。

上記例文が示すように、「只」は前述した取り立て副詞と違い、その前の要素を取り立てられない。従って、「只」は述語の前にある主語類を取り立てる場合は、「只」を取り立てスコープの前に移動しなければならない。

(1-45) 这本书只「我」翻了翻，其他人还没看过。

この本は私がざっと見ただけで、他の人はまだ読んでいない。

「只」が主語「我」の前に移動して、取り立てスコープ「我」は「只」に後に来る。しかし、この場合、「只」と名詞の間に1つの動詞（「有」、「是」、「要」など）が隠れていると呂(2003)が指摘している。実際、上記用例(1-45)よりも例(1-46)の方が落ち着きがいいように思われる。

(1-46) 这本书只有「我」翻了翻，其他人还没看过。

この本は私がざっと見ただけで、他の人はまだ読んでいない。

II 「後方スコープ」

「都」以外の取り立て副詞は全部「後方スコープ」を有している。

(1-47) 他低着头走过来又「走过去」。

「後方スコープ」

彼はうつむいて行ったり来たりしている。

呂叔湘 (2003) p. 461

2つの動作（状態）が相継いで発生するか、反復交替することを表す。

(1-48) 你跳了一支舞，再「唱一首歌吧」。

1曲踊ったから、1曲も歌ってよ。

(1-49) 我就有「一本」，你別拿走。

私は1冊しか持っていないから、持って行かないでくれ。

呂叔湘 (2003) p. 212

(1-50) 两个人才喝光「一瓶酒」。

2人は1本のお酒しか飲まなかった。 徐以中・楊亦鳴 (2010)

(1-51) 你只看到事情的「一个方面」就下结论，太片面了。

君が物事の1つの面だけを見て結論を下したのは非常にかたよっている。

ここでは、「就」は接続詞で、「一个方面」は「就」の「前方スコープ」ではなく、「只」の「後方スコープ」である。

1.4 取り立て副詞の特徴

現代中国語の取り立て副詞には以下のような特徴が見られる。

I 取り立て副詞は主語の後、述語の前にしか置けない。

日本語の取り立て副詞は名詞、目的語、格助詞を伴う成分、副詞句、述語等といった成分に後接することができるのに対して、現代中国語の取り立て副詞は主語の後、述語の前に置かなければいけないという制限が課せられているため、取り立て副詞の文中での位置が固定されている。それでは、取り立て副詞によって導かれる対象は主語、述語、目的語、連用修飾語である場合、取り立て副詞の文中での位置について考察を試みる。まず、「類似追加」の対象は述語である場合を見てみよう。一般的に言えば、中国語では形容詞と動詞がよく述語になる。形容詞と動詞が述語になる時、取り立て副詞をそれらの前に置くことができる。例えば、

(1-52) 然而，且看主人涂抹的颜色，既不黄，也不黑。

しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない。 于雷 (2002)

(1-53) 他是个聪明人，又肯努力，所以不到半个月就都学会了。

彼は頭がいい、それに努力家だし、だから半月もたたずにすぐ身に付けた。

上記の例文(1-52)、例(1-53)における「也」、「又」によって導かれる「類似追加」の対象は形容詞の「不黒」(黒くない)、動詞の「肯努力」(努力する)であり、それらの前に位置することができる。それぞれは「黒くもない」、「努力もする」という意味に解釈される。例(1-53)の「就」は少量を強調する意味を表す場合、「就」は述語の前という位置に固定されているため、取り立てスコープ「半个月」は「就」の前に置かれる。

主語が取り立てスコープにもなり得る。取り立て副詞が主語の前に行くことはできない。以下の例文を参照されたい。

(1-54)a. 你去北京参观访问，我们也去北京参观访问。

*b. 你去北京参观访问，也我们去北京参观访问。

あなたは北京へ参観訪問されますが、私たちも北京参観のため訪問します。

呂叔湘 (2003) p. 432

(1-55)a. 这次失败了，下次再来。

今回失敗したらまたやるさ。

*b. 这次失败了，再下次来。

呂叔湘 (2003) p. 468

上記の例文(1-54)と例文(1-55)における人称代詞の「我们」と「下次」は文の主語であり、取り立てスコープである。しかし、例文(1-54)では、取り立て副詞は述語の前しか置けないという制限があるため、「類似追加」の対象は主語であっても、「也」は主語の前に置けない。同様に、目的語、連用修飾語などの成分は取り立てスコープの場合、取り立て副詞はそれらの前ではなく、述語の前しか置けない。例えば、

(1-56)a. 他只会讲汉语，不会讲英语。

* b. 他会讲只汉语，不会讲英语。

彼は中国語が話せるだけで英語が話せない。 呂叔湘 (2003) p. 496

上記の例文(1-56)における「只」による制限される対象は目的語の「汉语」である。しかし、例文(1-56b)が示すように、「只」はそれらの前に置かれると文は成立できなくなる。

以上で分かるように、現代中国語の取り立て副詞は述語の前に置かなければいけないという制限が存在する。一般的には副詞は名詞を修飾することはできない。しかし、「就」は範囲を限定するという意味を表す場合、主語の前にくることができる。例えば：

(1-57)a. 星期一就「小李」去游泳。

李さんだけが月曜日に水泳に行く。

(1-58)a. 小李就「星期一」去游泳。

李さんは月曜日だけ水泳に行く。

*b. 就小李星期一去游泳。

「範囲限定」の「就」は取り立て副詞「也」と異なり、「就」の後の要素しか取り立てられない。取り立てスコープが主語の場合、「就」の直後に取り立てスコープがくる。この場合、「就」と取り立てスコープの間に取り立てスコープでない単語が入らない。上記の例(1-57)では、主語「小李」は「就」の取り立てスコープで、時間副詞「星期一」は取り立てスコープではないため、「就」の直後に来ることはできない。

*c. 就星期一小李去游泳。

取り立てスコープが主語、目的語、連用修飾語である場合は、取り立て副詞(範囲を限定する「就」、「只」を除く)はそれらの前ではなく、述語の前に置かれなければいけないという統語論的特徴が見られる。

II 取り立て副詞は、必ず後続の「被修飾句」を必要とする。

日本語の「も」は被修飾語となる句(ここで「被修飾句」と呼ぶことにする)が後続しなくても文の成立には何らの支障もないが、中国語の取り立て副詞は「被修飾句」が後続していなければならない。例えば、佐治(1991)では、以下のような例文を挙げている。

(1-59)A : 佐藤さんが亡くなりました。

B : 田中さんも。

佐治(1991)の説明によれば、「も」は前文に描き出した事態を前提として、同類の事態が存在することを付け加えて言う文中に用いられる。この B 文中の「田中さんも」の後に

は「無事でした」とはとても言えないし、「亡くなりませんでした」とも言えない。やはり「亡くなりました」といったような、同類の事態の叙述が必要である」と指摘し、「も」の後には被修飾語となる句が後続しなくても文の成立や文の意味に何らの支障もないということは理解される。しかし、現代中国語の副詞は必ず後続の「被修飾句」を必要とする。「被修飾句」とは動詞を中心とするフレーズである。以下の例文を見られたい：

(1-60)a. 他昨天去看牙了，我昨天也去看牙了。

彼は昨日歯医者に行った。私も昨日歯医者に行った。

*b. 他昨天去看牙了，我昨天也。

彼は昨日歯医者に行った。私も。

侯学超 (1998) p. 616

「也」の他、「又」、「再」も同様で、後続の「被修飾句」が必要とする。例えば：

(1-61) 这个人昨天来过，今天又来了。

この人は昨日も来たが、今日もまた来た。

(1-62) 去过了还可以再去。

行ったことはあるが、もう1度行ってもいい。

また、1つの文に2つの動詞が存在する場合、あるいは、「把」、「给」、「比」等のような動詞に類似する役割を果たす介詞がある場合、取り立て副詞は先行する動詞の直前に移動する。そのため取り立てスコープは文脈により直後であったり、さらに後方であったりする。以下の例を参照されたい。

(1-63)a. 我就去北京开会，不去上海。

私は北京の会議にだけ参加して、上海に行かない。

b. 我就去北京开会，不是去旅游的。

私は会議に参加するためだけに北京に行く。旅行に行くわけではない。

III 取り立てスコープは構文上で決められない。

中国語の取り立て副詞が文中で置ける位置はほぼ動詞の直前などに固定されている。しかし、これらの副詞は動詞の前に現れる場合、その動詞及び動詞の補語、目的語などがいずれも副詞の取り立てスコープとして取り立てられる可能性がある。従って、取り立て副詞が文中のどの要素を取り立てるのが、構文的に決められず、文脈や音韻的な要素が決めてとなる。

コンテキストが不明な場合は、書き言葉では、取り立て副詞の取り立てる文の要素がどれなのかを確定することができない。「就」を例に挙げよう。以下のような「就」が含まれる文はいくつかの意味に解釈できる。

(1-64)a. 我就「参加过」这个比赛。(不是这个比赛的裁判)

私はこの試合に参加ただけで、(この試合の審判員ではない。)

b. 我就参加过「这个」比赛。(不是昨天的那个比赛。)

私はこの試合だけに参加したことがある。(昨日のあの試合ではなかった。)

c. 我就「参加过这个比赛」。(其他比赛的事情都不知道。)

私はこの試合に参加しただけで、(他の試合の事は全く分からない。)

上記用例(1-64)の下線部で示したように、「就」を用いた文が書き言葉であり、コンテキストが不明な場合、書面上、いくつかの意味に解釈される。「就」が文中のどの箇所を取り立てているかは、統語的には明らかではないが、「就」はその後の動詞、目的語、「動詞+目的語」のいずれかを取り立てることができる。「就」は「前方スコープ」と「後方スコープ」の両方が可能である。「前方スコープ」の場合、「就」の取り立てスコープはその直前の要素とは限らない。

(1-65)a. 我们两个人用三个小时才完成这项工作。

「他一个人」用三个小时就完成了这项工作。 「前方スコープ」

私達は2人で3時間も掛けてこの仕事を完成させたが、彼は1人だけで3時間をかけてこの仕事を完成させた。

b. 我用十个小时才完成这项工作。

他「用三个小时」就完成了这项工作。 「前方スコープ」

私は10時間も掛けてこの仕事を完成させたが、彼は3時間だけでこの仕事を完成させた。

上記用例(1-65a)では、「就」の取り立てスコープは主語「他一个人」で、「就」の直前の要素ではない。例(1-65b)では、取り立てスコープ「用三个小时」は「就」の直前の位置でもよいが、「就」を「用三个小时」に先行させることもでき、文の意味に変わりがない。

「少量強調」の「就」はその後の要素を取り立てる場合、目的語の後に続くものがない限り、「就」は動詞の前に置かれる。例えば：

(1-66)a. 老赵就学过「一门外语」。

趙さんは1つの外国語しか学んだことがない。

*b. 老赵学过一门外语就。

c. 老赵学过一门外语就不学了。

趙さんは1つの外国語を学んだだけでやめた。

上記用例(1-66a)では、「就」は動詞の後の目的語を取り立てているが、例(1-66b)が示すように、目的語の後に続くものがない限り、「就」が目的語の後に来ることはできない。

上記用例で分かるように、語順だけでは、取り立て副詞がどの要素を取り立てているのかを確定することはできない。実際の会話の中で、重音の置き方等の音韻的要素がこのような文の同音の意味解釈に重要な役割を果たしている。音韻的要素がどのように取り立て副詞の意味に関与しているのかについては次節に譲る。

第二章 取り立て副詞の意味決定における重音の役割

話し言葉の生成の背後には文法があり、文法には意味が関連をもち、それらには音声の韻律が深くかかわっている。中国語の取り立て副詞も例外ではなく、「重音」が取り立て副詞の意味解釈に密接に関わっている。本章では中国語の「重音」に関する先行研究を網羅する形で取り立て副詞と「重音」の関係をまとめる。

2.1 重音の分類および先行研究

アクセント(中国語の「重音」)は学者の捉え方により、全く違うものを指す場合がある。端木三(1999)が「普通话里的轻声字都没有重音, 其他字都有重音」(「標準語の轻声字にはアクセントが置けない。それ以外の字には全部アクセントがある。」¹⁾)という場合の「アクセント」は中国語の「词重音」(語アクセント)のことである。語アクセントは語によって決定され、フレーズが文中での位置に関係ない。複数の音節(2音節或いは、それより多い音節数)を持つ語では、轻声以外の音節にはすべて語アクセントがある。

趙元任(1968)によれば、語アクセントは3つのレベルに分けるのが一番理想的で、一般的には、最後の音節が一番強く、最初の音節が二番目に強く、真ん中の音節が最も軽い。一番強い音節の前に3をつけて、二番目に強い音節の前に2を入れる。最も軽く発音される音節の前に1をつけて示すと：

2注3意 2山1海3关 2东1西1南3北

語アクセントとは異なるプロミネンスのことは中国語学界では「语句重音」(文アクセント)と呼ばれている。¹⁰『中国语言文字学大辞典』(2007)によると、文アクセントに文法的なものや情報構造上のものがあり、それぞれ「語法重音」(文法アクセント)と「邏輯重音」(論理アクセント)と呼び、さらに、感情を強める文アクセントもあり、「感情重音」(感情アクセント)と呼ぶ、としている。次章では、この3つの重音のそれぞれの特徴と区別を述べる。

2.1.1 「語法重音」

前述したように、中国語学界では、文アクセントはさらに「語法重音」、「邏輯重音」、「感情重音」の3つに分けられている。以下では、例文を挙げながらそれぞれの特徴を述べる。

I 「語法重音」に関する先行研究

「語法重音」(文法アクセント)は「普通重音」、「正常重音」(normal stress)、「核心重音」(nuclear stress)、「無値重音」(default stress)とも呼ばれている。¹¹ 中国語の「語法重音」に関する先行研究を概観する。

¹⁾ 日本語の訳文は筆者によるものである。

1) 趙元任(1968)では、「把句子的消息重点放到较显著的地方，即文法谓语的位置。」(文の焦点をより目立つところ、即ち、文法述語の位置に移動する。)を指摘し、以下の例文を挙げている：本稿では「語法重音」が付加される要素の下に二重線を引いて示す。

(2-1)a 我的名字是约翰。

私の名前はジョンです。

b 我叫做约翰，(不叫詹姆士)。

私はジョンと言います。ジェムスではありません。

(2-2)a 约翰是我的名字。

ジョンは私の名前です。

b 约翰是我的名字，(而不是头衔或小名)。

ジョンは私の名前で、肩書きやあだ名ではありません。 趙元任 (1968) p. 44

上記用例(2-1)、(2-2)は「邏輯重音」が置かれていない文である。上記の例文について、趙元任が「述語は主語より強く読まれる。」と指摘し、「最后的最强」(一番最後のほうが一番強い)という原則を初めて指摘している。

2) 湯廷池(1989)は趙氏「最后的最强」(「一番最後のほうが一番強い」)を「从轻到重的原则」(「軽から重への原則」)へと発展し、動詞と補語が長ければ、強いところが文末の位置に出現する可能性が大きいと示している。¹²

3) 楊立明(1992)は「語法重音」の音韻特徴を探り、持続時間の延長により実現されると指摘している。「中立句では、主語、間接目的語と直接目的語の重音の型は「軽、中、重」で、持続時間の長さの分布比率は1.0 : 1.2 : 1.5である。」と指摘している。

4) 馮勝利(1997)は「語法重音」の存在は語順からだけではなく、詩の韻律からも証明できると指摘している。馮氏は次の例を挙げている：

(2-3) 离离#原上草，

一岁#一枯荣。

野火#烧不尽，

春风#吹又生。

白居易《赋得古原草送别》

馮勝利 (1997) p. 81

馮氏によれば：中国語の標準的な「音歩」(フット)は二音節なもので、三音節は標準的なフットを発展したもので、「超音歩」としている。

[XX/XXX] ○

[XXX/XX] ×

[XX/XX/X] ×

[XX/X/XX] ×

[X/X X/X X] ×

五言詩は「2+3」の形をとって現れるのは「語法重音」が文の最後に来るからだと言っている(3音節は2音節より重音が来やすい)。

4) 端木三(2007) が Compound Stress Rule(「複合詞重音規則」)と Nuclear Stress Rule(「主重音規則」)の2つをまとめ、「情報-重音原則」「情報-重音規則」(the Information-Stress Principle)を提案している。

「**情報-重音原則**」「情報-重音規則」(the Information-Stress Principle)

「**情報量大的词要比其他词读得重**」(情報量が多い語は他の語より強く読まれる)

情報量はこの位置で出現する語の可能性の比率で決まるものである。現れる可能性が低いほど情報量が多いという。以下の例文が挙げられている：

(2-4) 张三买了两条鱼。

張三は2匹の魚を買った。

端木三(2007) p. 3

上記の例文(2-4)においては、「条」という位置では、用いられる語は少ない。それに対して、「魚」という位置では、使用できる語はずいぶん多い。従い、この位置で「魚」が現れる比率が低いいため、情報量が多く、「語法重音」が置かれやすいという。

II 「語法重音」の位置

前述したように、「語法重音」の位置は統語構造によって自動的に決まるものである。以下では「語法重音」の位置について見てみよう。

① 「主語+述語」のような構造では、述語部の中心動詞に「語法重音」が置かれる。

(2-5) 新学期开始了。

新学期が始まった。

② 「述語+目的語」構造では、目的語の方に「語法重音」が置かれる。

(2-6) 他参加了H S K 考试。

彼はH S K検定試験に参加した。

③ 「定語」(名詞の修飾成分)と中心名詞の間では、定語の方に文強勢が置かれる。

(2-7) 工业发展的速度。

工業発展の速度。

④ 「状語」(動詞の修飾成分)と動詞の間では、状語の方に文強勢が置かれる。

(2-8) 你慢慢地说。

ゆっくり話してください。

- ⑤ 結果及び程度を表す「補語」(動詞の修飾成分で、動詞の後位に現れるもの)と動詞の間では、補語の方に文強勢が置かれる。

(2-9) 来得早不如来得巧。

早く来るより、タイミングよく来るほうがよい。 呂叔湘 (2003) p. 92

- ⑥ 疑問詞や指示代名詞は他の語より強い。

(2-10) 你们当中谁见过陨石?

君たちの中で隕石を見たことがあるのは誰か。 呂叔湘 (2003) p. 363

馮(2007)は構文成分構造の中の後部成分に相当する「述語」、「目的語」に「語法重音」が置かれやすい理由について、このように述べている:「1つの文が1つの情報単位に相当する場合、旧情報は文の前方に生じるのが自然で、逆に、新情報を表す表現は文の後の方に生じるのが情報伝達の原則に則っている。」と述べている。さらに、楊立明(2002)は「中立発話の場合、文法アクセントの「優先順位」と「強さレベル」は文法構造によって決まる。主語、間接目的語、直接目的語の順で、「優先順位」と「強さレベル」はあがっていく。」と詳しく分析している。

以上では、「語法重音」に関する先行研究をまとめた上で、「語法重音」の位置を考察した。「語法重音」の位置は文のフォーカスに関係なく、統語構造によって決定される。一般的には、文の後に位置する目的語に「語法重音」が付加されやすい。

2.1.2 「邏輯重音」

話し手は自分の表現意図によって、文脈に応じたフォーカスに置かれる重音は「邏輯重音」(論理アクセント)と呼ばれる。「邏輯重音」はさらに「強調重音」(「強調重音」)と「対比重音」(「対比重音」)に分かれる。(『中国语言学大辞典』2007)

「邏輯重音」

「対比重音」

(2-11)a. 田中不会说中文。

b. 不是山田，是田中不会说中文。

田中さんは中国語が話せない。

山田さんではなく、中国語が話せないのが田中さんである。

(2-12) 田中不会说中文。

(2-13)a. 田中不会说中文。

b. 田中会写中文，不会说中文。

田中さんは中国語を話せない。

田中さんは中国語を書けるが、話せない。

(2-14)a. 田中不会说中文。

b. 田中不会说的不是英文，是中文。

田中さんは中国語を話せない。

田中さんが話せないのが英語ではなく、中国語だ。

(2-15)a. 田中不会说中文。

b. 田中会画画，不会说中文。

田中さんは中国語を話せない。

田中さんは画を描けるが、中国語を話せない。

対比というのは2つのものを並べ合わせて、違いやそれぞれの特性を比べることである。上記の用例から分かるように、対比重音は違う性質、違った量を持つ2つのものがセットで出現し、そこに重音が付加され、強調される。強調重音は必ずしも対比重音ではない。また、「邏輯重音」は典型的には対比フォーカスの位置に現れる重音であるが、本稿で扱うアクセントは取り立て副詞の取り立てスコープの位置によって決定されるものであるため、論理アクセントに属すと考えられる。特別な説明がない限り、以下では、「邏輯重音」のことを重音とする。

2.1.3 「感情重音」

「感情重音」は文法アクセント、論理アクセントと違い、文全体に関わることが多い。朗読の時、話し手は喜・怒・哀・楽の感情を強く表現したい場合、「感情重音」が文全体に加わることが多く、イントネーションに緊密に関わっている。本稿は取り立て副詞に関する「邏輯重音」に重点を置きたいため、「感情重音」についてここでは詳しく説明しないことにする。

以上をまとめると、「語法重音」は統語構造によって常に定められた位置に出現するアクセントで、単語単位で定義されるものである。それに対して、「邏輯重音」はいわゆるフォーカスが生む強調アクセントで、単語単位、場合によって、単語の一部に掛かるものであることが分かる。軽声に「邏輯重音」は来ない。また、「語法重音」は文法構造によってアクセントのレベルが異なるが、「邏輯重音」は「語法重音」で予想されるよりも強くて、長い重音である。「感情重音」は文全体に関わるアクセントで、文のイントネーションに関係している。

語アクセント、声調、「語法重音」に関する先行研究は数多くあるが、「邏輯重音」に関する研究は少ないのが現状である。この点については、平井勝利が「現代中国語のストレスアクセントに関する考察」という論文で、以下のように指摘している：

中国の国語である民族共通語「普通话」は、音声面においては北京語をそのベースとしている。従来、現代中国語の *stress accent* については、七大方言と称されているすべての言語が *pitch accent* を主とする *Tone language* であるために、*stress accent* が着目されることは少なく、従って、また、*stress accent* について論じた先行研究は極めて少ない。

本章では、取り立て副詞の意味解釈と「邏輯重音」の関係を明らかにし、また、「語法重音」との関係についても考察する。さらに、「感情重音」が文に付加されることにより、取り立て副詞の意味が変化する場合も見られる。これについても、以下で分析し、取り立て副詞の意味と以上に述べた3つの「重音」との関係を明らかにする。

2.2 取り立て副詞の意味解釈と重音の関係

前述したように、取り立て副詞が焦点の働きを実現する手段は以下の2つに分けられる。

- I 副詞自体が単独で焦点として働くわけではなく、取り立てスコープとともに焦点の働きをする。
- II 副詞自体が焦点として働く。単独で焦点の役割を担う機能を持つ副詞には「又」、「再」、「就」と「才」が数えられる。

まず、取り立てスコープと重音との関係を考察する。

2.2.1 取り立てスコープと重音との関係

取り立てスコープは文の焦点になりやすいため、一般的には、取り立てスコープに重音が置かれる。Jackendoff(1972)では、英語の文の焦点にストレスがいつも付加されると述べている。中国語においても、取り立てスコープに重音を置くのが通常である。「後方スコープ」の場合、取り立て副詞と取り立てスコープの両方に重音を置くという先行研究がある。陳雅(2003)では以下の例を挙げ、「就」と取り立てスコープの両方に重音が置かれると指摘している：

(2-16) 我就_{次重音}去他_{重音}那儿。

私は(他の所に行かず)、彼の所だけに行く。

陳氏が「範囲を限定する意味を表す「就」は単独で焦点を表すのではなく、文の他の要素とセットになって焦点を示す。」と指摘し、「就」に置かれる重音は取り立てスコープの「他」に置かれる重音よりレベルが弱く感じられると主張し、これを「次重音」(次アクセント)と呼んでいる。本稿は、「後方スコープ」の場合、「就」に重音が付加されるのではなく、取り立てスコープのみに重音が付加されると主張する。「就」の発音が強く感じるのは「就」に重音が付加されるのではなく、取り立て副詞はフレーズの始まりの位置であるからと提案したい。「就」に重音が付加され場合は「就」が焦点を働く場合のみである。他の取り立て副詞についても同様なことが言える。

前述したように、取り立てスコープには「前方スコープ」と「後方スコープ」の2つが存在する。それぞれの取り立て副詞と重音の関係を考察する。

I 「前方スコープ」

結論から言うと、取り立て副詞はその直前にある要素を取り立てる傾向が見られる。一般的に、取り立てスコープに重音が置かれる。次に、各成分が取り立て副詞の前に現れる場合、取り立て副詞はどの成分を取り立てるのかについて、以下の考察を展開する。

- i 時間副詞と主語が取り立て副詞の前に現れる場合。

(2-17) 李明さんは昨日も来た。

a. 李明「昨天」_{重音句}又来了。

*b. 昨天李明又来了。

(2-18) 昨日李明さんも来た。

a. 昨天「李明」**重音句**又来了。

*b. 李明昨天又来了。

上記の例(2-17a)と例(2-18a)は異なる語順を有する2つの文である。「又」はこのように異なる環境で異なる解釈を受けている。「昨天」が「又」の直前に位置すれば、「又」の取り立て取り立てスコープは「昨天」となり、例(2-17a)は「李明さんは昨日も来た」という意味解釈になる。それに対し、「又」の直前の要素が主語の「李明」であれば、例(2-18a)が示すように、「昨日李明さんも来た」という意味解釈が優先される。一方、例(2-17b)と例(2-18b)が示すように、取り立てスコープになり得る要素は取り立て副詞に近い位置で置かざるを得ない。このように、時間副詞と主語が「又」の前に現れる場合、どちらかが「又」の直前に位置すれば、それが「又」の取り立てる取り立てスコープになりやすいという特徴が見られる。

「又」と同様に、「也」を含む文においても、取り立て副詞の直前の位置に重音が来やすい。例えば：

(2-19)A： 他去体育馆。

彼は体育馆に行きます。

B： a. 今天「你」**重音**也去体育馆吗？

今日あなたも体育馆に行きますか？

*b. 你今天也去体育馆吗？

楊名時・瀬戸口律子(1989) p. 25

例(2-19)においては、「他也去体育馆」(彼は体育馆に行きます)という文脈から、「也」の「類似追加」の対象は「你」(あなた)であると容易に推測できる。時間副詞の「今天」(今日)を言うとするれば、例(2-19a)のように、主語の「你」の前に置くと適格な文である。それに対し、例(2-19b)のように、時間副詞の「今天」が「也」の直前の位置に置かれれば、「あなたは今日も体育馆に行きますか。」という意味解釈になり、文脈と矛盾するため、例(2-19b)は不自然な文になる。

紙幅のため、すべての副詞について述べられないが、「又」、「也」以外の副詞もこのような特徴を持っている。以上の用例からまとめてみると、時間副詞と主語が取り立て副詞の前に現れる場合、取り立て副詞がその直前にある成分を取り立てスコープ化し、そこに重音が置かれやすいという特徴が観察される。

ii 「在」、「对」、「给」、「把」などの介詞によって導かれる介詞連語と主語が取り立て副詞の前に現れる場合。

(2-20)a. 我「在北京」**重音句**也学过中文。

私は北京でも中国語を勉強したことがある。

b. 在北京「我」**重音**也学过中文。

北京で私も中国語を勉強したことがある。

(2-21)a. 写完了让我看看好吗？ 我「对这个题目」**重音句**也很感兴趣。

書き終えたら、ちょっと私に見せて！私はこのテーマに対してもとても興味を持っている。

b. 写完了让我看看好吗？ 对这个题目「我」**重音**也很感兴趣。

書き終えたら、ちょっと私に見せて！私もこのテーマに対してもとても興味を持っている。

笥春生・新谷秀明（1998） p. 281

上記の例(2-20)においては、「在北京」（「北京で」）は主語の「我」を先行しても良い、主語の「我」に後続しても良い。例(2-20a)では、介詞「在」によって導かれる介詞連語「在北京」は場所を表す語句で、「也」の直前に現れる場合、「也」の取り立てスコープになり、重音が付加される場所である。一方、「在北京」は主語を先行すれば、「也」は「也」の直前に位置する主語を取り立てるという意味解釈が優先される。この場合、主語に重音が置かれる。「在」と同様に、前置詞「对」によって導かれる介詞構造は主語を先行することもできる。例文(2-21a)が示すように、「对这个题目」は主語の「我」に後続する場合、主語の「我」より「对这个题目」が「也」に近いと、「也」の取り立てスコープになりやすい。そこに重音が置かれる。一方、例(2-21b)が示すように、「对这个题目」は主語の「我」を先行する場合、「对这个题目」より主語の「我」が「也」に近いと、「也」の取り立てスコープの主語に重音が付加される。

「给」、「把」などの介詞によって導かれる介詞連語は主語を先行することができない。把構文や給構文の場合、副詞は「把」、「给」の直前、もしくは動詞の直前の位置に来ることはできる。例えば：

(2-22)a. 我给「李明」**重音句**又打了个电话。

私は李明さんにも電話した。

b. 「我」**重音**又给李明打了个电话。

*c. 给李明「我」**重音**又打了个电话。

私も李明さんに電話した。

(2-23) 他把「那本书」**重音句**都看完了。

彼はあの本さえも読み終えた。

上記用例(2-22a)では、「李明」は動作の対象を表すもので、「又」の直前に位置することができる。「又」の前に主語の「我」、時間副詞などの要素は来ることができるが、それらの要素より「给李明」が「又」の直前に位置するため、それが「又」の取り立てスコープだと理解される。「在」、「对」が導く介詞連語と異なり、「给」によって導かれる介詞連語は主語を先行することはできない。例(2-22b)が示すように、主語を取り立てる場合は、「给李明」を「又」に後続させる必要がある。この場合、重音を取り立て副詞の前の主語に置かれる。「把」構文も同様に言える。中国語の一般的語順は「主語+述語+目的語」である。しかし、介詞「把」を用いて目的語を動詞の前に持ってくることはできる。このような構

文は「把」構文という。例(2-23)で分かるように、「把」によって導かれる介詞連語「把那本书」は主語の「他」を先行することはできない。「都」の前に主語「他」と介詞連語「把那本书」の2つの要素は存在するが、「都」に一番近い要素である介詞構造「把那本书」のみが「都」の取り立てスコープになり得る。重音が「那本书」に置かれる。

このように、「前方スコープ」が容認できる取り立て副詞はその直前の位置にある要素を取り立てスコープ化しやすく、そこに重音が置かれるのが通常である。しかし、「前方スコープ」が許されない取り立て副詞もある。例えば：

(2-24)a. 我只「在北京」**重音句**学过中文。

私は北京でだけ中国語を習ったことがある。

b. 我在北京只学过「中文」**重音句**。

私は北京で中国語しか習っていない。

上記用例(2-24)における「只」は「後方スコープ」しか容認できないため、「在」、「对」、「给」、「把」などの介詞によって導かれる介詞連語は取り立てスコープになる場合、「只」の後にしか置けない。例(2-24b)が示すように、「在北京」は「只」の直前の位置にあるが、重音が付加される場所ではない。このように、必ずしも取り立て副詞の直前の要素に重音が置かれるとは限らない。

以上をまとめると、主語、時間副詞、「在」、「对」、「给」、「把」などの介詞によって導かれる介詞連語などの成分が取り立て副詞の前に位置することができる。取り立て副詞の前にいくつかの要素が現れる場合、その直前に位置する要素は取り立てスコープになり、そこに重音が置かれやすいという特徴が観察される。「只」のようなその後の要素しか取り立てることができない取り立て副詞を除く。本稿はこのような取り立てスコープを「前方スコープ」と呼ぶこととする。

以上の例では、取り立て副詞の直前に「前方スコープ」があり、重音が置かれる例について述べた。しかし、実際の話し言葉では、「前方スコープ」の場合、必ずしも取り立て副詞の直前でない場合でも、重音の位置により取り立てスコープの位置を確定することができる。以下の例文(2-25)を参照されたい。

(2-25)a. 「这几天」**重音句**，我们都忙着筹备会计人员培训班。

この何日か、我々は会計士の養成講座を開く準備で忙しい。

b. 「我们」**重音句**这几天都忙着筹备会计人员培训班。

この何日か、我々みんなは会計士の養成講座を開く準備で忙しい。

(2-26)a. 「在日本」**重音句**，书法也非常普及。

日本でも書道はとてもポピュラーです。

b. 「书法」**重音句**，在日本也非常普及。

日本では、書道もとてもポピュラーです。

上記用例(2-25)について、呂叔湘(2003)は「都」の総括の対象は1種類に限らない。また、特にその中の1種類のみを総括の対象とすることもありますが、そのときはそれを強く

発音して区別する。」と指摘している。書面では、音声の情報が不明な場合、語順が取り立てスコープの確定に重要な役割を果たしている。しかし、話し言葉では、重音が付加される要素が取り立てスコープになりやすい。取り立て副詞の直前の位置に置かれなくても、重音が付加されれば、それは取り立てスコープになる。

取り立てスコープの前の要素だけではなく、その後に来る要素が取り立てる対象になることもある。以下では「後方スコープ」と重音との関係を考察する。

II 「後方スコープ」

前述したように、「前方スコープ」を持つ取り立て副詞はその直前にある要素を取り立てる傾向が見られる。実際の話し言葉では、語順と関係なく、重音の位置により取り立てスコープの位置を確定することができると言える。「後方スコープ」の場合も、コンテキストが不明な場合、取り立て副詞の後のどの要素が取り立てスコープに解釈されるのかは語順だけでは示すことができない。話し言葉では、重音が多義文の意味決定に重要な役割を果たしている。以下の例を参照されたい：

目的語の後に続くものがない限り、取り立て副詞は動詞の前に置かれる。まず、「就」について考察する。例えば：

(2-27)a. 老赵就学过「一门」**重音句**外语。

趙さんは1つの外国語しか学んだことがない。

*b. 老赵学过一门外语就。

c. 老赵学过「一门」**重音句**外语就不学了。

趙さんは1つの外国語を学んだだけでやめた。

上記用例(2-27)では、「就」は動詞の後の目的語を取り立てているが、例(2-27b)が示すように、目的語の後に続くものがない限り、「就」が目的語の後に来ることはできない。

前述したように、「都」以外の取り立て副詞がその後位置する述語および目的語を取り立てることができる。一般的に、重音が付加される要素は取り立てスコープになる。以下の例文を参照されたい：

(2-28) 李老师也给他改作业。

a. 李老师给我们改作业。 李老师也给「他」**重音**改作业。

李先生は私達に宿題をチェックしてくれる。李先生は彼にも宿題をチェックしてあげる。

b. 李老师给他上课。 李老师也给他「改作业」¹³**重音句**。

李先生は彼に授業してあげるし、宿題もチェックしてあげる。

c. 李老师给他布置作业。 李老师也给他「改」**重音**作业。

李先生は彼に宿題を出してあげるし、チェックもする。

例文(2-28a)では、重音が「他」に置かれれば、「彼も」という意味解釈になり、重音が「改作业」に付加されれば、「李先生は授業をする他に、宿題もチェックする」という意味

合いに取れる。さらに、重音が動詞「改」に置かれることもできる。その他、「把」構文や連動文等においても、コンテキストが不明な場合、取り立て副詞の後のどの要素が取り立てスコープに解釈されるのかは語順だけでは示すことができないが、重音を付加することで、文の意味をはっきりさせることができる。

Ⅲ 話題化前方移動による取り立てスコープの変化

前述したように、取り立て副詞はその前の要素だけではなく、その後に位置する目的語も取り立てられる。中国語では、一般的には、目的語が動詞の後に位置するが、取り立て副詞のある文では、目的語に取り立てスコープがある場合か、目的語が話題化されている場合に、目的語を動詞の前に持ってくることもできる。目的語を前置させる場合、目的語は主語の前、もしくは主語の後の2つの位置に来ることができる。目的語と主語の相対位置により、重音の置き方も違って来る。以下の例(2-29)は、取り立てスコープである目的語が話題化されている場合、例(2-30)は、取り立てスコープではないが話題化されている場合、例(2-31)は、話題ではないが取り立てスコープとして前置されている場合である。「話題化」されている目的語は主語を先行する。

(2-29) 小李会很多乐器。比如，二胡，小李会拉。「钢琴」重音句，小李也会弹。

李さんは沢山の楽器ができる。例えば、李さんは二胡も弾けるし、ピアノも弾ける。

(2-30)A：钢琴受到很多人的欢迎。

ピアノは多くの人に受け入れられている。

B：是啊，钢琴，「小李」重音句也会弹。

そうだね。ピアノと言ったら、李さんも弾けるよ。

(2-31)a. 小李（二胡会拉，）「钢琴」重音句也会弹。

李さんはピアノも弾けるよ。

* b. 小王钢琴会弹，「小李」重音句钢琴也会弹。

王さんはピアノを弾ける。李さんもピアノを弾ける。

上記用例(2-29)と例文(2-30)が示すように、目的語「钢琴」が前置させられ、主語を先行する場合、目的語と主語は両方とも「也」の取り立てスコープになれる。重音の位置は取り立てスコープの位置によって決定される。例(2-29)では、「李さんは沢山の楽器ができる」ことを説明するために、具体的な例として目的語の「二胡」と「钢琴」が文頭の「話題」として挙げられている。この場合、目的語「二胡」と「钢琴」を主語の前に前置させ、前置させられた目的語は取り立て副詞の取り立てスコープであり、そこに重音が付加される。一方、例(2-30)が示す2人の会話では、目的語「钢琴」が話題になり、「ピアノといえば」という意味に解釈される。重音を取り立て副詞の取り立てスコープである主語「小李」に置くことができる。

しかし、例文(2-31)においては、目的語「钢琴」を動詞の前、主語の後という位置に持

ってくる場合、例文(2-31b)が示すように、主語「小李」に重音を置くことはできない。目的語「钢琴」を動詞の前、主語の後の「強調の位置」に移動したため、目的語「钢琴」が「也」の取り立てスコープになる。「小李钢琴也会弹」のような語順では、目的語に焦点(話し手が最も強調したい所)を当てることになり、「也」の取り立てスコープはその直前に位置する目的語に限り、主語「小李」に重音を付加することができない。これに関して、副詞「都」からも検証できる。以下の例を参照されたい。

- * (2-32) 「他们」重音句邓丽君的歌都会唱。
彼らは皆、テレサ・テンさんの歌を歌える。

例(2-32)が示すように、目的語「邓丽君的歌」を動詞の前、主語の後という「強調の位置」に持ってくる場合、目的語が「也」の取り立てスコープになる。この場合、主語「他们」に重音を付加し、それを「也」の取り立てスコープにすることはできない。

IV 取り立てスコープ以外の要素に重音を置くこともできる

I と II で述べたように、取り立て副詞を含む多義文では、取り立てスコープに重音を置くのが通常である。取り立てスコープ以外の要素に重音を置くのも容認できる。例えば：

- (2-33) a. 三天重音句就看完了「两本重音句」书。 「後方スコープ」
3 日間に本を 2 冊しか読んでいない。
b. 「三天重音句」就看完了两本书。 「前方スコープ」
3 日間だけで本を 2 冊読んだ。

上記例(2-33a)が示すように、「两本」は「就」の取り立てスコープで、そこに重音が置かれる。一方、「三天」に重音を置くこともでき、「三日も掛かった！」という意味を表し、強調している。この重音は取り立ての機能によるものではないため、取り立てスコープ以外の要素に置く。このように、いつも取り立てスコープに付加される重音は取り立ての機能による重音のことを指している。取り立てスコープに重音が付加されると同時に、取り立てスコープ以外の部分にも重音を置くことができる。

2.2.2 副詞自身に重音が置かれる

2.2.1 では、取り立て副詞自身が焦点を働かず、取り立てスコープと一緒に焦点を担う場合の重音の位置を考察した。副詞自体が焦点として働く場合もある。この場合、副詞に重音が付加される。単独で焦点の役割を担う機能を持つ副詞には「又」、「再」、「就」と「才」が数えられる。例えば：

- (2-34) a. 他又重音去图书馆了。
彼はもう一回図書館に行った。
b. 他重音又去图书馆了。
彼もまた図書館に行った。
c. 他又去图书馆重音了。

彼は図書館にも行った。

上記用例(2-34a)では、重音を副詞「又」自体に付加することはできる。この場合、「又」は「重複」の機能を働き、例文(2-34a)は「彼は図書館に行った」という状況が再び起こったという意味に解釈される。一方、(2-34b)と(2-34c)では、重音を取り立てスコープに付加される。「前方スコープ」の場合、重音が「他」に置かれ、「又」は「類似事態の追加」という意味を表す。例(2-34b)は「他の誰かが図書館に行った、彼もまた図書館に行った」という意味に解釈される。一方、「後方スコープ」の場合、重音を「図書館」に付加すると、「彼は図書館以外のところに行った。また図書館にも行った」という意味に解釈される。

「就」と「才」は時間副詞と共に起する場合、重音が時間副詞に置かれるが、時間副詞が現れない場合、副詞自身に重音を置く。例えば：

(2-35)a. 他又重音吃了饺子。

彼は(さっき餃子を食べたが、)また食べた。

b. 他昨天重音句又吃了饺子。

彼は昨日もまた餃子を食べた。

(2-36)a. 他再重音读一遍。

彼はもう1度読む。

b. 他明天重音句再读，今天不读了。

彼は今日は読まず、明日読むことにした。

(2-37)a. 他才重音走。

彼はやっと帰った。

b. 他 12点重音句才走。

彼は12時にやっと帰った。

(2-38)a. 他就重音回来。

彼はすぐ戻ってくる。

b. 他马上重音句就回来。

彼はすぐに戻ってくる。

上記用例(2-35a)では、「又」は「重複」の意味を表し、「又」自身に重音が付加される。この場合、例(2-35a)は「餃子を食べることがもう1度繰り返した」という意味合いになる。しかし、「又」は「類似追加」の意味もあり、「又」の前に「前方スコープ」になりうる要素、例えば主語、時間副詞などが現れる場合、重音が「又」の前の取り立てスコープ置かれることもできる。例(2-35b)の「又」は「昨日も」という意味に解釈される。同様に、(2-36)では、「再」の前に時間副詞があるかどうかによって、文の意味が変わり、重音の置かれる場所も異なる。また、「就」と「才」は単独で焦点を表すことができ、副詞自身に重音が置かれる。しかし、時間副詞、数量詞が現れる場合、それらの要素が取り立てスコープとなり、重音が副詞から取り立てスコープに移動される。この場合、副詞自身に重音を置くことはできない。

以上から、取り立て副詞自身にも重音を付加することができるということが分かる。単独で焦点の役割を担う機能を持つ副詞には「又」、「再」、「就」と「才」がある。「再」と「才」は時間副詞と共起する場合が多い。時間副詞が明示されれば、時間副詞が取り立てスコープになり、そこに重音が置かれる。一方、時間副詞が明示されない場合は、副詞自身が焦点を働き、副詞に重音が置かれ、文の意味も変わる。同様に、「又」と「就」に関しては、時間副詞だけではなく、他の要素、例えば、主語も「前方スコープ」にも可能性がある。この場合は重音が取り立てスコープと副詞自身のどちらかに置かれる。

2.3 重音による音節強勢

2.3.1 中国語 2 音節語の重音分析

取り立てスコープに重音が付加される場合、取り立てスコープのすべての音節に強勢が付加されるわけではない。以下の用例が示すように、軽声に読まれる音節には音節強勢が来ない。以下では、強く読まれる音節を太字にして示す。以下の例を参照されたい：

(2-39) 你是中国人，却连「**饺子**」重音句都没吃过。

君は中国人であるくせに、餃子さえ食べたことがないなんて。

(2-40) 他连「**葡萄酒**」重音句也没喝过。

彼は赤ワインさえも飲んだことはない。

上記の例(2-39)と例(2-40)が示すように、「饺子」の「子」、「葡萄酒」の「萄」は軽声であるため、重音が置かれない。

また、前述したように、中国語では、各音節に声調(tone)の他に、語アクセントも存在している。2音節語は「前重型重音」と「後重型重音」の2種類に分けられる。2音節の名詞の中、第一音節に重音が付加されるものもあれば、第二音節に重音を付加するものもある。前者は「前重型重音」¹⁴、後者は「後重型重音」と呼ばれている。以下の例を参照されたい：

(2-41)a. 「**酒楼**」重音句也没去过。

居酒屋も行ったことはなかった。

b. 「**九楼**」重音句也没去过。

9階も行ったことはなかった。

上記用例(2-41)における「酒楼」は後ろの音節「楼」に語重音が掛かっており、「後重型重音」の語に属す。「酒楼」に重音を付加する場合、すべての音節「酒」と「楼」に重音が付加されるが、「後重型重音」の形は維持される。同様に、一方、(2-41b)では、8階ではなく、9階の9に焦点を当てるため、語重音が数字「九」にあるのが一般的である。以上から、重音が語アクセントに加わる場合、語アクセントの形が維持されるのが通常であるということが分かる。

2音節より音節数が多い語、もしくはフレーズに重音が付加される場合、どの音節に強勢

がくるのが複雑な問題で、また、話者の発話習慣、方言の影響などといった「非義務的な条件」にも左右されているかもしれない。これについては今後の課題として詳しく考察する必要がある。

2.3.2 取り立てスコープと語法重音

また、取り立てスコープに重音が付加される場合、取り立てスコープの中のすべての部分に強勢を置くとは限らない。結論から言うと、取り立て副詞を含む文では、「語法重音」の位置に重音が重なるのが一般的である。以下の用例を参照されたい：

(2-42) 「工業发展的速度」重音句也很快。

工業発展の速度も早い。

(2-43) 「一个小时」重音句就写好了。

わずか1時間で書き終えた。

上記用例(2-42)では、取り立てスコープは意味的な単位で、「工業发展的速度」である。しかし、「定語」(名詞の修飾成分)の「工業」に「語法重音」が置かれ、そこに重音も来やすい。実際の会話の中では、取り立てスコープの「工業发展的速度」のすべての音節が強く発音されるわけではない。「語法重音」のある「工業」が強く読まれる。同様に、例(2-43)では、取り立てスコープは「一个小时」であるが、「小时」は強く読まれない。また、「一个」の「个」は軽声であるため、語アクセントを持っておらず、強く読まれない。「語法重音」に重音が付加されやすい理由としては、「語法重音」が置かれる要素は新情報、また話し手が強調したい情報であるため、そこは取り立て副詞による重音も置かれやすい場所であると考えられる。

以上から、取り立てスコープに重音が付加される場合、取り立てスコープのすべての音節に強勢が付加されるわけではない。取り立てスコープの中のどの要素が強く読まれるのかは語のアクセントパターン(「前重型重音」の語と「後重型重音」の語)に関係している。

2.4 重音のレベル

2.2で述べたように、重音の位置が取り立て副詞を含む同音異義文の意味解釈に重要な役割を果たしていることが分かる。重音の位置も重要だが、重音にはいくつかのレベルのものがあり、その違いも取り立て副詞を含む文の意味に緊密に関わっている。

「就」は典型的な例として、「就」の意味と音韻的要素との関係、特に重音のレベルとの関係について詳細に述べている論文には徐以中・楊亦鳴(2010)、陳雅(2003)等が見られる。陳雅(2003)は初めて「就」に関わる「邏輯重音」にはいくつかのレベルのものがあると指摘している。すなわち、陳雅(2003)では、「就」的读音并不仅仅简单地分为重读或轻读，而是根据「就」在句子中的地位分为四个梯度等级。分别是主重音、次重音、弱重音和轻音。」(「就」の発音はアクセントと「軽読」(軽く読まれる)の2つに簡単に分けてはいけない。「就」の文中での役割によって四つのレベルのものに分類すべきである。それぞれは主ア

クセント、副アクセント、弱アクセントと「軽音」²である。)と指摘している。しかし、陳雅(2003)では、「主重音」(主アクセント)、「次重音」(副アクセント)、「弱重音」(弱アクセント)の分類法の根拠について言及しておらず、「就」以外の副詞についても議論していない。

本稿では、重音にはいくつのレベルのものがあ、重音のレベルも取り立て副詞を含む文の意味解釈に重要であると述べる。

(2-44) 太郎重音句也喜欢花子。

a. 太郎さんも花子のことが好きだ。

b. 太郎さんさえも花子のことが好きだ。

上記用例(2-44)では、a が示すように、「也」は「類似追加」の意味解釈もあれば、b が示すように、「極端な場合の例示」という意味にも解釈される。重音が置かれる位置は同じだが、レベルが異なる。「極端な場合の例示」の場合の重音は「類似追加」の場合の重音よりもっと強く発音される。「也」は後者の意味を表す場合の重音は「前者」の意味を表す重音にさらに「感情重音を加えたものであると考える。両者の具体的な音声特徴については、本稿の第5章(p. 64)で詳しく考察する。

第2章では、重音に関する先行研究を概覧し、取り立て副詞が含まれる同音異義文において、重音の種類、位置、レベルが文の意味決定にどう関係しているかの解釈を試みた。また、取り立てスコープの中のどの部分に重音が来やすいのか、どの要素に強勢が置かれるかについて考察した。考察した結果は以下のようなものである。2.1で「語法重音」、「邏輯重音」と「感情重音」のそれぞれの特徴を明らかにした。「語法重音」は統語構造によって常に定められた位置に出現するアクセントで、単語単位で定義されるものである。それに対して、「邏輯重音」はいわゆるフォーカスが生む強調アクセントで、単語単位、場合によって、単語の一部に掛かるものである。軽声に論理アクセントは来ない。「感情重音」は文法アクセント、論理アクセントと違い、文全体に関わることが多い。

2.2では、取り立て副詞の意味解釈と重音との関係を明らかにした。

I 副詞自体が単独で焦点として働くわけではなく、取り立てスコープとともに焦点の働きをする場合、取り立てスコープに重音が置かれる。

「前方スコープ」の場合、取り立て副詞はその直前にある要素を取り立てる傾向が見られる。実際の話し言葉では、語順と関係なく、重音の位置によって、取り立てスコープの位置を確定することができる。「前方スコープ」しか容認できない「都」は動詞の後の目的語を取り立てる場合は、目的語を「都」の前、主語の後の「強調の位置」に移動させる必要がある。「後方スコープ」の場合は取り立て副詞は必ずしもその直後にある要素を取り立てるとは限らない。

² ここの陳氏が言う「軽音」は本稿の取り立て副詞の「弱化」のことである。

Ⅱ 副詞自身が焦点として働く。単独で焦点の役割を担う機能を持つ副詞には「又」、「再」、「就」と「才」が数えられる。この場合、取り立て副詞自身に重音が付加されることが分かった。「再」と「才」は時間副詞と共起する場合が多い。時間副詞が明示されれば、時間副詞が取り立てスコープになり、そこに重音が置かれる。一方、時間副詞が明示されない場合は、副詞自身が焦点を働き、副詞に重音が置かれ、文の意味も変わる。同様に、「又」と「就」に関しては、時間副詞だけではなく、他の要素、例えば、主語も「前方スコープ」にも可能性がある。この場合は重音を取り立てスコープと副詞自身のどちらかに置かれる。

さらに、2.3では、2音節の語に重音が付加される場合、どのような音韻的特徴が現れるのかを分析した。取り立てスコープに重音が付加される場合、取り立てスコープのすべての音節に強勢が付加されるわけではない。軽声に読まれる音節には音節強勢が来ない。2音節の語に重音が付加される場合、すべての音節に重音が付加されるが、「前重型重音」、「後重型重音」の形は維持される。

2.4では、取り立て副詞の意味解釈に関わる重音には2種類のものがあり、「也」は「極端な場合の例示」の意味を表す場合の重音は普通の重音にさらに「感情重音」を加えたものであると考える。

第三章 取り立て副詞の意味決定における「弱化」の役割

第2章から、重音は取り立て副詞の意味解釈と緊密な関係を有していることが分かる。しかし、重音だけでは取り立て副詞を含む文の意味を完全に表せない場合も存在する。本章では、どの部分が弱いか、ということも取り立て副詞を含む文の意味に重要な役割を果たしていると主張する。その際、「弱化」という概念を導入し、重音の役割が不十分な場合として「弱化」による区別を取り上げる。

3.1 「弱化」の定義

まず、取り立て副詞「就」に注目する。第2章で述べたように、重音が「就」を含む文の意味解釈に重要な役割を果たしていることが分かっている。例を掲げる。

(3-1)a. (我们十个人搬了八箱货,)

(我々10人は荷物を8箱運んだが、)

他们五个人重音句就搬了十箱货。

彼らは5人だけで荷物を10箱も運んだ。 (荷物を運んだ人の人数が少ない)

b. 他们五个人就搬了十箱货重音句。

彼らは5人で10箱の荷物しか運ばなかった。 (運んだ荷物の数が少ない)

呂叔湘(2003)、郭春貴(2001)によれば、「就」は数量詞と共起する場合、数量が「話者の期待より多い」と「話者の期待より少ない」の両方の意味を表すことができる。「就」の前の語句「五个人」(5人)に重音を付加すれば(例 3-1a)、「5人だけで」という意味になり、話し手が荷物を運んだ人の人数が少ないと思っていることを表す。一方、例(3-1b)のように、「十箱」(10箱)に重音を置けば、話し手が運んだ荷物の数が少ないと思っていることを表す。このように、重音が「就」を含む文の意味解釈に重要な役割を果たしていることが分かる。

しかし、取り立てスコープ以外の要素にも重音を付加することができ、1つの文に2つの重音が存在することとなる。この場合、「就」の取り立ての機能による重音はどちらかを確定できず、文の意味を決定できない。以下の例文(3-1')においては、重音だけでは「就」を含む同音多義文の意味を決定できない。

(3-1') a. 他们五个人重音句就搬了十箱货重音句。

「前方スコープ」 取り立てスコープではない
(人数が少ない) (荷物の数が多い)

彼らは5人だけで荷物を10箱も運んだ。

(3-1') b. 他们五个人重音句就搬了十箱货重音句。

取り立てスコープではない 「後方スコープ」
(人数が多い) (荷物の数が少ない)

彼は5人もいるのに、10箱の荷物しか運ばなかった。

上記用例(3-1' a)と例(3-1' b)を比べてみれば:「五个人」と「十箱货」に重音を付加する場合、荷物を運んだ人の数が「少ない」と「多い」の両方の意味解釈ができ、重音だけでは、「就」を含む同音多義文の意味を決定できない。例(3-1' a)の「就」は軽く読まなければならないのに対して、例(3-1' a)の「就」は軽く読まれない。このように、「就」が軽く読まれるかどうかは例(3-1')のような「就」を含む同音多義文の意味決定に重要であると言える。例(3-1' a)の「就」は軽く読まなければならない理由は例(3-1' a)の「五个人」に付加される重音は「就」の取り立て機能による重音で、「就」と取り立てスコープ「五个人」の間にポーズを入れることはできないからだ。一方、例(3-1' b)の「五个人」は「就」の取り立てスコープではないため、そこに付加される重音は取り立ての機能による重音ではない。この場合、「就」の取り立てスコープはその後の「十箱」で、「就」は軽く読まれない。そこで、本稿は、「就」の意味を決定する手段について言えば、重音だけではなく、「就」が軽く読まれるかどうかということも「就」を含む同音異義文の意味決定に重要であると主張する。「就」のみならず、他の取り立て副詞を含む同音異義文においても、どの部分が弱いということも文の意味決定に重要である。他の副詞についての議論は本章の3.4で詳しく分析する。

本稿では、取り立て副詞を含む文では、重音を含む重音句の後ろの部分は正常の発音より短くかつ弱く発音されることを「弱化」と呼ぶ。³弱化は中国語の声調の「轻声」とは異なり、本来の声調の弁別は維持される。次の例(3-2)を挙げ、「弱化」の概念を説明する。(「弱化」する要素を「弱化句」と呼び、下に波線を引く。)

(3-2) a. 我们一个小组有十个人語法重音。

僕達の1つのグループには10人がいる。

b. 我们一个小组重音句就有十个人弱化句。

僕達のグループは1つだけで10人がいる。

上記用例(3-2a)は取り立て副詞を含まない文で、取り立ての機能による重音がない。この文において、重音がない場合、「十个人」は轻声字以外の字に語アクセントがあり、さらに、目的語としての「語法重音」が置かれている。一方、例(3-2b)では、「就」が加わり、先行部分に取り立てスコープとしての重音が付加されることにより、語アクセントと「語法重音」がなくなるため、通常発音より短くかつ弱く発音される。つまり、「就有十个人」は弱化する。このように、取り立て副詞を含む文においては、重音が付加されていない部分に弱化現象が起こり、取り立て副詞を含む文の意味解釈に重要な役割を果たしている。

3.2 「弱化」に関する先行研究

1) 趙元任は中国語の語調(イントネーション)は「調頭」(Head)と「調干」(Body)に大きく分けられ、さらに「調頭」は「弱起」(Anacrusis)と「主調頭」(Main Head)、「調干」は「調核」(Nucleus)と「調尾」(Tail)を含むと指摘している。(趙元任, 1933a)¹⁵(葉軍, 2007 p. 227 より引用)

2) この「語調」の具体的な考察としては、深炯(1994)がある。深炯は、声調連続を文の語調の構成要素として重視し「字調聚合体」とする呉宗済の理論の発展として、韻律的なまとまりを「節奏単元」(リズムのまとまり)と呼んだ。(深炯, 1994 p. 221~228)「節奏単元大体上就是一个语音词或结合紧密的词组」(リズムのまとまりは1つの韻律詞あるいは緊密に結合したフレーズ)と定義している。その上、中国語の語調の特徴を以下のようにまと

³ 「弱化」は「軽音」と呼ばれることもある。葉軍(2001)では、軽音は(語調パターンの中で)重音に後続する部分をいう概念であると以下のように指摘している。「普通话词或句子中读得短而弱的音节,一般都叫做轻音…轻音可以在声学上把它描述成一种“弱化”。(中国の標準語では、単語あるいは文の中で短く弱く発音される音節を「軽音」と呼ぶ。音声学では、「弱化」と呼ぶこともできる。)「軽音」と声調の「轻声」は紛らわしい呼び方で、本稿では「弱化」と呼ぶ。葉軍は「軽音」による具体的な文の意味弁別の記述に関しては言及していない。

めている：

- ① 調頭と調核にはより強い重音が置かれ、調尾には一般的に強い重音が置かれない。
- ② 調核の後の声調の音域の上限は急に下がり、明らかな落差になっている。
- ③ 調核の後の音節は明らかに軽くなる。

3) この理論をもとに、葉軍はさらに林茂灿が行った音声実験のデータを参照し、以下の語調パターンのモデル図を提案している。(葉軍, 2001 p. 237)

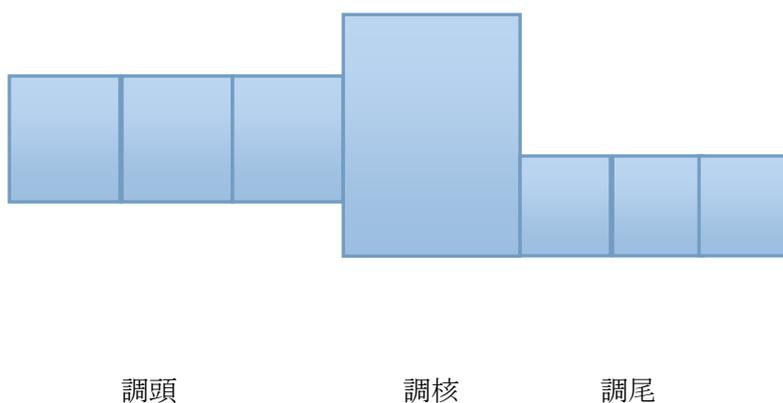


図 2 葉軍による語調パターンのモデル図

(葉軍 『汉语语句韵律的语法功能』 2001 p. 237 図 5 から引用)

本稿で提案している弱化は上の図 2 が示すように、語調パターンのモデルの調尾にあたる部分である。取り立て副詞を含む文には必ず重音句があるが、この重音句の後の要素はどのような韻律的特徴をもつのかを明らかにする。

中国語の副詞の意味と音韻との関係に関する研究には主に重音の役割を考察する研究が主流で、重音句以外の部分の音韻特徴や、趙元任の「語調」に着目した先行研究は筆者の観察では、未だにない。本章では、重音句以外の要素の音韻特徴も取り立て副詞の意味解釈に重要な役割を果たしていることを主張し、それが取り立て副詞の意味解釈にどのような役割を果たすかを考察する。

3.3 「弱化」の4つの特徴

結論から言うと、弱化が起きる位置は重音の位置、ポーズの位置に緊密に関わっている。その他、弱化は取り立て副詞より右側の要素が新情報であるかどうかにも関係している。それをまとめると、弱化は以下のような4つの特徴を持っている。

I 弱化現象が重音を含む重音句の後ろの部分に起きる。

(3-3) a. 他昨天去了教室看书。又去了图书馆重音句看书弱化句。

彼は昨日教室でも本を読んだし、図書館でも本を読んだ。

- b. 他去图书馆找资料。再去图书馆看书重音句。

彼は図書館に資料を探しに行ってから、本を読む。

- c. 他去了图书馆借书。也去了图书馆看重音书弱化。

彼は図書館で本を借りただけではなく、読書もした。

例(3-3a)では、「图书馆」(図書館)に重音が付加され、その後の繰り返しの要素「看书」(本を読む)には弱化が置かれる。一方、例(3-3b)が示すように、重音の前に出現する要素「去图书馆」(図書館に行く)は繰り返された要素であっても、そこに弱化重音が置かれない。同様に、例(3-3c)では、動詞の「看」に重音が付加され、その前の要素「去了图书馆」は弱化しないが、「看」の後の繰り返された要素「书」には弱化が置かれる。このように、弱化は重音の位置に関わっていると言える。重音より左側の要素は弱化しないが、重音より右側の要素は弱化する。弱化は重音の位置によって決められるが、重音のレベルに関係しない。例えば、「也」は「類似追加」と「極端な場合の例示」の意味を表す場合、それぞれの意味で用いられる文に置かれる重音のレベルは異なるが、その後の要素は同じく弱化する。

- (3-4) a. 他忘了吃药，饭重音也忘了吃弱化句。

彼は薬もご飯も忘れた。

- b. 他一心扑在工作上，有时候饭重音也忘了吃弱化句。

彼は一心に仕事に打ち込み、時には食事をとることさえ忘れてしまう。

(3-4b)の用例出典：呂叔湘 (2003) p. 432

上記用例(3-4)の a, b においては、「也」はそれぞれ「類似追加」と「極端な場合の例示」の意味を表し、取り立てスコープの「饭」に置かれる重音のレベルは異なるが、その後の要素は両方とも弱化する。

また、重音は取り立ての機能による重音とそうではない重音に関係せず、その後の要素は弱化する。

- (3-5) 他重音就讲了弱化句 || 两个小时重音句那么长的时间弱化句，别人都没时间谈了。

彼だけ2時間も話したので、他の人は話す時間がなくなってしまった。

上記用例(3-5)では、1つ目の重音は「就」の取り立ての機能による重音で、その直後の要素「就讲了」は弱化する。2つ目の重音は「2時間も」という意味を表し、時間が長いということを強調するための重音で、この2つの重音は種類が異なるが、両方ともその後の要素は弱化する。

また、ここでいう重音は「邏輯重音」のことであり、「語法重音」は統語構造によるものであり、「感情重音」は文全体に関わるため、弱化には直接な関係が見られない。

II 重音句の後にポーズがあれば、ポーズより右側の要素は弱化しない。

重音句の後の要素は弱化すると I で述べたが、それは重音句の後にポーズがないことが

約束されることを前提としている。重音句の後の要素は必ず弱化するとは限らない。下記の例(3-6)のように、重音句の後にポーズを入れる場合は弱化しない。

(3-6) 曲折的情节重音句也弱化 || 非常感人。

複雑に絡み合うストーリーも感動的です。

上記用例(3-6)では、「曲折的情节」(複雑に絡み合うストーリー)に重音が付加され、「也」は弱化する。「也」の後にポーズがある場合、ポーズより右側の要素「非常感人」(感動的である)は弱化しない。取り立て副詞より右側の要素は弱化するかどうか、どこまで弱化するかはポーズの有無と位置による。重音句の後にポーズを入れる場合はさまざまである。

(3-7) 太郎さんも中国のテレビドラマや映画を見るのが好きだ。

- a. 太郎重音句 || 也喜欢看中国的电视剧和电影。
- b. 太郎重音句也喜欢弱化句 || 看中国的电视剧和电影。
- c. 太郎重音句也喜欢看弱化句 || 中国的电视剧和电影。
- d. 太郎重音句也喜欢看中国的弱化句 || 电视剧和电影。
- e. 太郎重音句也喜欢看中国的电视剧弱化句 || 和电影。
- f. 太郎重音句也喜欢看中国的电视剧和电影弱化句。

上記用例(3-7)の a~d では、ポーズの入る場所の移動により、弱化が影響する部分もそれに応じた変化が見られる。a では、重音句の直後にポーズがあり、弱化するところは存在しない。b では、助動詞と動詞との間にポーズがあり、副詞「也」が述語部の助動詞と一緒に弱化するが、その後にポーズがあるため、ポーズより右側の要素「看中国的电视剧和电影」は弱化しない。また、動詞の後にポーズを入れることもでき、d が示すように、重音句の後、ポーズの前の「喜欢看」は弱化するが、ポーズより右側の要素「中国的电视剧和电影」は弱化しない。また、e と f では、ポーズはそれぞれ「电视剧和电影」、「和电影」の前にあるため、弱化する部分もポーズの前までとなる。さらに、重音句の後にポーズがない場合も存在しており、この場合は文の最後まで弱化する。

重音句の右側に 2 つまたはそれ以上のポーズがある場合、重音から 1 つ目のポーズより左側にある要素は弱化する。例えば：

(3-8) 老周重音句就讲了弱化句 || 两个小时， || 别人都没时间谈了。

周さんだけで 2 時間話したので、他の人は話す時間がなくなってしまった。

上記用例(3-8)では、「两个小时」、「别人都没有时间谈了」の前にポーズが置かれるため、弱化は重音句の後から重音句より右側の 1 つ目のポーズの前の「两个小时」までとなる。

以上から、重音より右側にあり、かつ重音から 1 つ目のポーズより左側にある要素は弱化すると言える。重音句の後はポーズを置くことが可能な位置まで弱化する。

III 旧情報は弱化するが、新情報は必ずしも弱化するとは限らない。

一般的に言えば、旧情報は話し手は聞き手が既に得ている情報だと判断し、重要な情報ではないため、正常の発音より弱く発音され、弱化する。例えば：

(3-9) 你去北京参观访问。

我们重音句也去北京参观访问弱化句。

あなたは北京へ参観訪問されますが、私たちも北京参観のため訪問します。

呂叔湘 (2003) p. 432

(3-10) 哥哥猜错了, 弟弟重音句又猜错了弱化句。

兄も当たらず、弟も見たらなかった。

呂叔湘 (2003) p. 461

上記用例はそれぞれ取り立て副詞「也」、「又」の「前方スコープ」の場合である。「前方スコープ」の場合、重音句の後は繰り返された旧情報であり、弱化するのが通常である。一方、重音より右側の部分は新情報の場合、弱化が付加される可能性もある。

(3-11) a. 雨很冷。 风重音也很大弱化句。

b. 雨很冷。 风重音 || 也很大。

雨は冷たくて、風も強い。

上記の例(3-11a)では、主語も述語も異なるが、「雨」に対する「冷たかった」という事柄の持つ意味と、「風」に対する「強かった」という事柄の持つ意味が、一般常識から「天気が悪い」という広い意味での類似性を満たしていると判断されるため、「類似追加」を表す「也」が用いられる。「也」の後の「很大」は繰り返された要素ではないが、意味的には話し手と聞き手にとって、情報量が少ない、もしくは重要度が低いと判断する場合、新情報であっても弱化する。新情報は弱化しないのが普通だが、話し手にとって、この新情報の重要度が低いと判断する場合、そこに弱化が置かれる場合もあり得る。

一方、「也」は必ず弱化するとは限らない。取り立てスコープと「也」との間にポーズがある場合、「也」より右側の要素は弱化しない。上記用例(3-11b)においては、「很大」は新情報で、通常は弱化しないため、「也」の前にポーズを入れることもできる。以上では取り立て副詞「也」、「又」について分析したが、他の取り立て副詞については同様なことが言えるため、ここでは述べないことにする。

IV 重音句の前に前置させられた要素は旧情報であっても、弱化しない。

目的語を前置させる場合、前置させられた要素が旧情報であっても、弱化現象が見られない。例えば：

(3-12) a. 他知道那个人。 我重音也认识那个人弱化句。

彼はあの人を知っているし、私もあの人を知っている。

b. 那个人, 我重音也认识弱化句。

あの人私も知っている。

上記の例文(3-12a)で示すように、後節の「那个人」に弱化現象が見られるが、主語先行する目的語「那个人」に弱化現象が見られない。「那个人」が前置させられているため、旧情報だが、話題化していると思われる。つまり、中国語では、話題化されていない旧情報

に限る。

以上では、弱化現象が起きる必要な 4 つの条件を考察した。弱化は重音、ポーズの位置等といった音韻的要素だけではなく、旧情報、新情報であるかどうかにも緊密に関わっていると言える。

3.4 取り立てスコープと「弱化」の関係

第 2 章で述べたように、取り立てスコープには 2 種類があり、それぞれは「前方スコープ」、「後方スコープ」である。取り立てスコープの種類、重音の位置によって、弱化の有無、出現する位置、影響する範囲が決まる。主に以下のようなパターンが見られる：

I 「前方スコープ」

「前方スコープ」が容認できる取り立て副詞は「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「都」である。「前方スコープ」の場合、結論から言うと、取り立てスコープに重音が付加され、取り立て副詞は弱化するかどうかはポーズの位置によって決まり、「取り立て副詞が弱化する」と「取り立て副詞が弱化しない」の 2 種類に大別される。

i 「取り立て副詞が弱化する」

(3-13) a. 这本书是英文的，那本书重音句也是英文的弱化句。

この本は英語ので、その本も英語のです。

劉月華など (1988) p. 206

b. 他头重音句也不抬弱化句，专心学习。

彼は頭も上げず勉強に夢中だ。

呂叔湘 (2003) p. 433

(3-14) 这张试卷张老师看了一遍，李老师重音句又看了一遍弱化句。

この答案は張先生が一遍見て、李先生がもう一遍見た。

劉月華など (1988) p. 202

(3-15) 你有什么困难明天重音句再来弱化句。

なにか困ったことがあったら明日またいらっしやい。

劉月華など (1988) p. 205

(3-16) a. 演出七点半开始，他七点钟重音句就到剧场了弱化句。

b. 演出七点半开始，他七点钟重音句就到弱化句剧场了。

プログラムは 7 時半に始まるが、彼は 7 時にはもう劇場に着いた。

劉月華など (1988) p. 209

(3-17) a. 演出七点半开始，他七点二十五分重音句才到剧场弱化句。

b. 演出七点半开始，他七点二十五分重音句才到弱化句剧场。

プログラムは 7 時半に始まるが、彼は 7 時 25 分になってやっと劇場に着いた。

劉月華など (1988) p. 209

(3-18) a. 爷爷，我重音都不怕那个家伙弱化句，您还怕他。

b. 爷爷, 我重音都不怕弱化解那个家伙, 您还怕他。

おじいさん, 僕だってあんな奴怖くもないのに, なんでおじいさんが怖がるの。

劉月華など (1988) p. 190

上記用例(3-13)～(3-18)はそれぞれ「前方スコープ」が容認できる「也」、「又」、「再」「就」、「才」、「都」が弱化する場合である。例(3-13)のaとbでは、「也」がそれぞれ「類似追加」と「極端な場合の例示」の意味を表し、「也」の前の取り立てスコープに重音が置かれ、「也」の後にポーズがなければ、文末まで弱化する。他の副詞は同様に、例(3-14)、例(3-15)が示すように、重音句の後の「又看了一遍」、「再来」は弱化する。また、取り立て副詞が弱化すれば、その後の述語も一緒に弱化しなければならない。例(3-16)では、取り立て副詞「就」だけ弱化し、後ろの動詞が弱化しないタイプはない。「就」が動詞と一緒に弱化するのが通常である。目的語は必ず弱化するとは限らない。例(3-17)では、弱化する場合は「才到」、「才到剧场」の両方とも可能である。「極端の場合の例示」を表す「都」は弱化しなければならないため、「都」を含む「都不怕」、もしくは「都不怕那个家伙」が弱化する。

ii 「取り立て副詞が弱化しない」

「前方スコープ」の場合、取り立て副詞が弱化しないタイプも存在する。例えば：

(3-19) 将来我重音 || 也去边疆工作。

将来ぼくも国境地帯に仕事をしに行くつもりだ。

呂叔湘 (2003) p. 432

(3-20) 他去年犯过这种病, 今年重音句 || 又犯了。

彼は去年この病気が再発したが、今年もまたぶり返した。

呂叔湘 (2003) p. 461

(3-21) 今天来不及了, 明天重音句 || 再回答大家的问题吧。

今日はもう時間がないので、明日みなさんの質問に答えることにしましょう。

呂叔湘 (2003) p. 468

(3-22) a. 这课书他念了三遍重音句 || 就会背了。

この課は彼は3回読んだだけで暗誦できるようになった。

b. 这课书他念了三遍重音句 || 才会背。

この課は彼は3回読んでやっと暗誦できるようになった。

劉月華など (1988) p. 209

(3-23) 所有重音句 || 产品出厂前全都要经过质量检查。

出荷の前に製品はすべて品質検査をしなければならない。

劉月華など (1988) p. 103

上記用例(3-19)では、「也」の前に重音句はあるが、「也」は弱化しない発音パターンも見られる。実際の会話の中で、「也」の前のポーズは短くても、「也去边疆工作」は弱化しない。他の副詞についても、同様なことが言える。例(3-20)～(3-23)においては、「又犯了」、

「再回答大家的问题吧」、「就会背了」、「才会背」、「都要经过质量检查」は弱化しない。ただ、「前方スコープ」と「後方スコープ」の両方の可能性がある文においては、取り立て副詞が弱化しないという音声パターンは見られない。例えば：

(3-24) a. 孩子们弱化句又跳了一个舞弱化句。

*b. 孩子们弱化句 || 又跳了一个舞。

子供達も踊りを1つ踊ってくれた。

(3-25) a. 咱俩才抬一百斤，人家一个人重音句就挑一百二十斤弱化句。

*b. 咱俩抬一百斤，人家一个人重音句 || 就挑一百二十斤。

我々2人でやっと100斤をかついで運べるだけなのに、あの人は1人で120斤もかついで運ぶ。

呂叔湘 (2003) p. 213

例(3-24)では、「又」がその後の「跳了一个舞」を取り立てることも可能である。この場合、「踊りも1つ踊った」という意味に解釈される。このような「前方スコープ」と「後方スコープ」の両方の可能性がある文においては、「又」が「前方スコープ」の場合は弱化しなければならない。同様に、例(3-25)では、「就」の前後ともに数量詞がある場合は、「就」が「前方スコープ」に解釈されることもあれば、「後方スコープ」に解釈される可能性もある。「就」が弱化することによって、「前方スコープ」であると確定できる。この場合、「就」の前にポーズを入れないのが通常である。ただし、複文において、「就」の前にポーズがある場合も見られる。以下の例文を参照されたい：

(3-26) a. 只要有两个人重音句， || 就能挑一百二十斤。

*b. 只要有两个人重音句， 就弱化 || 能挑一百二十斤。

2人さえいれば、120斤もかついで運べる。

(3-27) a. 跳了三次重音句 || 才跳过横竿。

*b. 跳了三次重音句， 才弱化 || 跳过横竿。

3回跳んでやっとバーを飛び越えた。

呂叔湘 (2003) p. 48

上記用例(3-26)、(3-27)のような複文では、「就」、「才」の前にポーズを入れるのが通常である。それは「就」と「才」は接続詞で、取り立て副詞ではないからと考える。

以上では、取り立て副詞は弱化するかどうかはその文は「後方スコープ」にも解釈される可能性があるかどうかによると述べたが、その他に、取り立て副詞より右側の要素は旧情報であるかどうか、音節数が多いかどうかにも関わっている。これについては、次章の4.3.1で詳しく分析する。

II 「後方スコープ」

「後方スコープ」を持つ取り立て副詞は「都」を除き、5つがある。それぞれは「也」、「又」、「就」、「才」、「只」である。「後方スコープ」では、目的語が取り立てスコ

ープの場合と述語が取り立てスコープである場合の 2 つに分けられる。以下では、それぞれの特徴を分析する。

i 述語が取り立てスコープの場合

「述語」が取り立てスコープの場合、述語に重音を付加し、その後の目的語は弱化する。

(3-28) a. 辅导员批评了我们，也表扬重音句了我们弱化句。

*b. 辅导员批评了我们，也重音表扬了我们。

私達は指導員の人にしかられもし、ほめられもしました。

劉月華など (1988) p. 207

(3-29) a. 他就碰重音了你弱化句一下儿弱化句，哪至于疼得那个样子。

*b. 他就重音碰了你一下儿，哪至于疼得那个样子。

彼とちょっとぶつかっただけでそんなに痛がることはないだろう。

劉月華など (1988) p. 211

上記用例(3-28)、例(3-29)はそれぞれ述語が取り立てスコープの場合で、述語の「表扬」、「碰」にそれぞれ重音が付加され、取り立て副詞に重音が置けない。その後に目的語があれば、弱化するが、目的語が省略される場合もある。

ii 目的語が取り立てスコープである場合

(3-30) a. 中国是社会主义国家，也是发展中国家重音句。

*b. 中国是社会主义国家，也弱化是发展中国家重音句。

中国は社会主義国であり、且つ発展途上国でもある。

劉月華など (1988) p. 207

(3-31) a. 刚洗完衣服，他又去忙别的重音句。

*b. 刚洗完衣服，他又弱化去忙别的重音句。

服を洗い終わると、彼はすぐほかのことをやりだした。

呂叔湘 (2003) p. 462

(3-32) a. 老周就讲了半个小时重音句，下边就讨论了。

*b. 老周就弱化讲了半个小时重音句，下边就讨论了。

周さんが30分話ただけで、あとは討論した。

呂叔湘 (2003) p. 212

(3-33) a. 我才看了一遍重音句，还要再看一遍。

*b. 我才弱化看了一遍重音句，还要再看一遍。

私は1度見ただけなので、もう1回見たい。

呂叔湘 (2003) p. 48

(3-34) a. 我只到过天津重音句。

*b. 我只弱化到过天津重音句。

僕は天津にだけ行ったことがある。

呂叔湘 (2003) p. 495

上記用例(3-30)～(3-34)はそれぞれ目的語に重音が置かれる「也」、「又」、「就」、「才」、「只」の「後方スコープ」の例である。「再」と「都」は「後方スコープ」が容認できない。「前方スコープ」の場合は取り立て副詞は弱化することがあるが、「後方スコープ」の場合、取り立て副詞は弱化してはいけない。上記用例(3-30b)～(3-34b)は非文である。

Ⅲ 動詞自身が焦点を働く場合

副詞自身が焦点を働く場合もある。このような副詞は「又」、「再」、「就」、「才」がある。例えば：

(3-35) 我找过一遍，他又重音找了一遍弱化句，还是没找着。

私が1度探し、彼がもう1度探したが、やはり見つからなかった。

呂叔湘(2003) p. 461

(3-36) 我还不懂，请老师再重音讲一遍弱化句。

まだよく分かりません。先生もう一遍説明して下さい。

劉月華など(1988) p. 205

(3-37) 我就重音走弱化，你別催了。

今行くからせかさなで。

劉月華など(1988) p. 210

(3-38) 他才重音走弱化。

彼は出かけたばかりだ。

呂叔湘(2003) p. 48

取り立て副詞自身が焦点を働く場合は、重音が副詞に置かれる。上記用例(3-35)～例(3-38)では、それぞれの副詞に重音が置かれ、重音の後、ポーズの前の要素は弱化する。

以上をまとめると、弱化は取り立てスコープと緊密に関わり、取り立て副詞の意味解釈に重要な役割を果たしている。「前方スコープ」の場合、取り立て副詞は弱化するかどうかはその文が「後方スコープ」になる可能性があるかどうかにかかっている。「後方スコープ」に解釈される可能性がなければ、取り立て副詞は弱化しても、しなくてもよい。その場合、弱化は旧情報であるかどうか、音節数が多いかどうかに関係している。取り立て副詞は弱化する場合は副詞だけが弱化するのではなく、副詞がその後の述語と一緒に弱化するのが通常である。「後方スコープ」にも解釈される場合、取り立て副詞は弱化しなければならない。一方、「後方スコープ」の場合、取り立て副詞は弱化してはいけないということが重要である。述語、目的語がそれぞれ取り立てスコープである場合、重音が述語、目的語に置かれる。述語に重音が付加される場合、その後の目的語が弱化する。また、取り立て副詞自身が焦点を働く場合、副詞自身に重音が置かれ、その後にポーズがなければ、その後の要素はすべて弱化する。

第四章 取り立て副詞の意味解釈に関わる「語調重音フレーズ」

趙元任(1968)が「軽重音の型」の他に、ポーズも多義句の意味識別に有効であると以下のように指摘している：

在国语里头，有时候可以用轻重音跟调型来划分词，
但是比较有用的方法还是看中间有没有可能的停顿。

中国語では、「軽重音の型」と声調のパターンで詞を区別することはできるが、それより有効な手段はやはりその間にポーズを入れるかどうかによるものである。

趙元任，1968(『中国話的文法』丁邦新訳 1980) p. 79

ポーズは第3章で述べた弱化とも密接に関わっている。重音に続いて弱化が起こる場合は、間にポーズが置かれてはならない。ポーズが置かれると、その後では弱化しない。ただし、ポーズを置くことができる位置にポーズが置かれない場合には、重音に続く位置であっても弱化は起きない。したがって、実際にポーズが現れるかどうかよりも、ポーズを置くことができるかどうかのほうが取り立て副詞の意味の区別にとって重要であると言える。

第2章、第3章では取り立て副詞の意味解釈と重音、弱化との関係を分析したが、この章では、ポーズと弱化の関係を統合して説明するために「語調重音フレーズ」という概念を導入し、さらに、取り立て副詞の意味が「語調重音フレーズ」によって説明できることを示す。

4.1 取り立て副詞の意味とポーズとの関係

4.1.1 ポーズに関する先行研究

1) 今までの中国語の音声研究、文法研究においては、ポーズに関する研究は辞書や語学教科書で少し触れる程度で、ポーズを1つの研究課題として取り上げた研究は極めて少ない。ポーズに関する研究には主に葉軍(2001)、呉為善(1990)等がある。また、副詞の意味とポーズとの関係に関する先行研究は少なからずあるが、例えば、(钟华 2009, p. 46)、(陈立民 2005, p. 16) がある。それらの研究は個別の副詞に関するものが多く、より一般的な副詞とポーズの関係に関する記述は少ない。また、研究者の意見も多岐にわたり、統一した意見が見られない。

2) ポーズの位置について、趙元任(1968)では、以下のように指摘している：

主谓语句间停顿（或可能停顿）的重要性，可从中文的标点习惯上看出来。…

标点都是标在三、四个音节长的主语之后，有时甚至在一两个音节的主体后也加标点。

主語と述語の間のポーズの重要性は中国語の区切り符号から分かる。

3、4 音節数を持つ主語の後にポーズを入れる。時には1、2 音節語の主語の後にポーズを入れることさえある。

『中国語の文法』(1968) p. 39

3) 曹劍芬 (2001) がポーズの位置について、詳細な分析を行った。曹氏はポーズを 4 つのレベルに分類し、1 級は最も大きい、4 級はもっとも小さい。1 級ポーズが出現する位置には以下のような 4 つがあると説明している：

- ① 主語と述語の間
- ② 前置された述語修飾語と主語の間
- ③ 複文における各文の間
- ④ 複雑修飾語の間

4) ポーズは生理上の制約のため生じるものであるが、ポーズの可能な位置は、統語構造、意味等の制約を受けることがある。

葉軍 (2001) では、「大部分的停顿尤其是句内停顿不是为了换气，而是为了划分成可为人所感知的有意义的片段。」(ほとんどのポーズ、特に単文内のポーズは「息を入れる」ためのものではなく、聞き手が理解しやすいように意味段落を分けるものである。) (葉軍, 2001 p. 209) と指摘している。葉氏はさらに、ポーズは文の構造を理解する手がかりで、焦点を表す 1 つの手段と述べている。

ただし、葉氏はポーズと副詞の意味の関係に言及していない。また、ポーズを重音とも結び付けてはいない。本稿では、取り立て副詞「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「都」、「只」の意味解釈に関わるポーズの役割をより一般的に説明することを試みる。また、重音、「弱化」とポーズの総合関係を捉える。

4.1.2 取り立て副詞の意味解釈に関わるポーズの役割

第 3 章では、重音だけでは取り立て副詞を含む文の意味を決定できない場合、弱化に着目すれば音声的な区別があることが分かった。重音と弱化はポーズにも緊密に関わっている。ポーズを置いてもよい場所に(||)を入れて示す。

(4-1) a. 他们五个人重音句就搬了十箱货重音句。 → 「前方スコープ」

彼らは 5 人だけで荷物を 10 箱を運んだ。

b. 他们五个人重音句就搬了十箱货重音句。 → 「後方スコープ」

彼らは 5 人で 10 箱の荷物しか運ばなかった。

例(4-1)にポーズを入れてみると、以下ようになる：

(4-2) a. 他们(||)五个人重音句就搬了(||)十箱货重音句。

彼らは 5 人だけで荷物を 10 箱を運んだ。 (人数が少ない)

b. 他们(||)五个人重音句(||)就搬了十箱货重音句。

彼らは 5 人で 10 箱の荷物しか運ばなかった。 (荷物の数が少ない)

上記例(4-2a)では、「五个人」は「就」の取り立てスコープで、そこに重音が置かれる。この文では、「就」の後に数量詞があり、「後方スコープ」にも解釈されうるため、「就」は

必ず弱化する。「五个人」と「就」との間にポーズを入れることができない。即ち、「就」は取り立てスコープとポーズで中断されない韻律上のまとまりの中にあることが「就」の意味決定に重要な役割を果たしている。

重音句の内部にポーズを入れることはできないが、例(4-2a)が示すように、重音が置かれる「五个人」の前にポーズを入れることができる。同様に、「十箱货」の前にもポーズを入れても良い。一方、「後方スコープ」の場合、例(4-2b)では、「就搬了」は弱化しないため、その前にポーズを入れても良い。重音が付加される「五个人」と「十箱货」の前にポーズを入れることもできる。

以上をまとめると、「前方スコープ」では、重音を取り立て副詞の前の取り立てスコープに置かれ、取り立てスコープと「就」の間にポーズの存在が容認できない。一方、「後方スコープ」の場合、重音が後の取り立てスコープに移り、述語或いは目的語に付加される。「就」と取り立てスコープとの間にポーズを置かないのが通常だが、「就」の前のポーズは任意である。他の取り立て副詞に関しても、重音と弱化だけでなく、ポーズも取り立て副詞を含む文の意味決定に重要な役割を果たしていると言える。

4.2 「語調重音フレーズ」の定義及び特徴

4.2.1 「韻律詞」、「フレーズ」に関する先行研究

中国語の形態素、単語、フレーズ、文という概念について説明する。

語とは一定の意味と音形をもち、独立して用いられる最小の言語単位で、語より小さい単位で、有意味最小単位を形態素と定義する。単語は必ずいくつかの形態素より成るが、形態素は必ずしも単語ではない。¹⁶

「韻律詞」(「韻律語」) Prosodic Word は韻律学の面から「独立して用いられる最小の言語単位である」と定義されている概念である。(馮勝利 1997 p.2) 「韻律詞」は少なくとも1つのフットからなる。中国語では、二音節フットが最も一般的で、単音節フットと三音節フットも存在するが、極少ない。標準的な「韻律語」は2音節語である。

4.2.2 「語調重音フレーズ」の定義

前節で取り立て副詞の意味決定にポーズの役割を考察し、重音、弱化とポーズの関係を考察した。実際の会話の中で、ポーズには非常に短いと長いものがあり、中国語の学習者にとって、非常に聞き取りやすいといえない。さらに、ポーズを入れてもよい場合もあれば、入れてはいけない場合もある。本稿は「語調重音フレーズ」という概念を提案し、重音、弱化とポーズとの関係を総合的にまとめることができると主張する。

前述したように、弱化される副詞とその前の重音句との間にポーズを入れない。葉軍(2001)では、「副詞轻读以后，它不同于轻声那样于前面音节有附着性，轻读的副词总是和后续成分组合在一起，停顿不可能出现在副词之后。」(副詞が軽く読まれる場合、軽声のように、前の音節の後に付着することはできない。軽く読まれる副詞はいつも後続成分と一緒に

に現れ、ポーズは副詞の後に入れることができない。)と指摘している。葉氏が以下の例を挙げている：

(4-3) a. 他三十五岁重音句才结婚弱化解。

*b. 他三十五岁重音句 || 才弱化解结婚。

c. 他 {三十五岁重音句才结婚弱化解}。

彼は 35 歳でやっと入籍した。

葉軍 2001 p. 83

上記用例(4-3)では、取り立て副詞「才」は弱化し、その前の重音句「三十五岁」との間にポーズを入れることはできない。「三十五岁」と前の要素「他」との間にポーズが容認できるかどうかについて葉軍(2001)では言及していないが、「他」の後にはポーズを入れてもよい場所である。本稿では、「三十五岁」は「也结婚」はそれぞれ重音句と弱化解で、この 2 つは 1 つの韻律上のまとまりで、そのまとまりの中にポーズを入れることはできないが、その前後にポーズを入れてもよい。このような韻律上のまとまりを「語調重音フレーズ」と呼び、「語調重音フレーズ」の境界区域を{ }で示す。「語調重音フレーズ」を以下のように定義する：

「語調重音フレーズ」：必ず重音を含み、内部にポーズを入れることができない韻律フレーズの一つである。ポーズの有無に関係なく、韻律フレーズの後は弱化しない。「語調重音フレーズ」の境界では任意にポーズを入れることができる。

弱化は、重音を含む重音句の後ろの部分に、単語を単位として加えられる。重音句とこれに続く弱化解が構成する単位は内部にはポーズを置くことはできず、「語調重音フレーズ」をなしていると考えられる。韻律音韻論では、対比焦点に伴うフレーズを「焦点フレーズ」(focus phase)と呼ぶ研究もある。例：Hayes and Lahiri (1991)

ここでは、取り立て副詞の重音のみを考察しており、焦点一般への適応は検討していないため、「語調重音フレーズ」と呼ぶ。

4.3 「語調重音フレーズ」のパターン

「語調重音フレーズ」を用い、取り立て副詞を含む同音異義文の意味を確定することができる。重音句の置かれる位置により、「語調重音フレーズ」は 3 つに大きく分けられる。それぞれは「前方スコープ」、「後方スコープ」と副詞が焦点の場合の 3 つである。また、「前方スコープ」の場合、取り立て副詞が弱化するかどうかによって、「語調重音フレーズ」がさらに①と②の 2 種類に分けられる。「後方スコープ」の場合、取り立て副詞と取り立てスコープの間にポーズがあるかどうかによって、③と④に分類される。

「後方スコープ」では、述語が取り立てスコープである場合も考えられるため、述語を () の中に入れ、この位置で現れない可能性もあるということを意味する。同様に、後続成分が省略される場合もあり、() の中に入れて示す。

- ① {取り立てスコープ重音句+取り立て副詞+述語+(後続成分)弱化句}

「前方スコープ」

- ② {取り立てスコープ重音句}+ 取り立て副詞

「後方スコープ」: ③ {取り立て副詞+(述語)+取り立てスコープ重音句+(後続成分)弱化句}

- ④ 取り立て副詞+(述語)+{取り立てスコープ重音句+(後続成分)弱化句}

副詞が焦点: ⑤ {副詞重音句+後続成分弱化句}

それぞれの「語調重音フレーズ」を用い、どのように取り立て副詞の意味を確定するのかを具体的な例文を挙げ、分析を行う。

4.3.1 「前方スコープ」のパターン

「前方スコープ」を持つ取り立て副詞は「只」を除き、6 個がある。それぞれは「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「都」である。「前方スコープ」では、取り立て副詞が弱化するかどうかによって、「語調重音パターン」は 2 種類に分けられ、以下のように示す:

- ① {取り立てスコープ重音句+取り立て副詞+述語+(後続成分)弱化句}

「前方スコープ」

- ② {取り立てスコープ重音句}+ 取り立て副詞

①については、取り立て副詞の前の要素に重音が付加され、取り立て副詞とその後の述語と一緒に弱化し、「語調重音フレーズ」の中に含まれる。述語は省略されないが、述語に後続する成分、例えば: 目的語、動詞の補語などは省略されてもよい。後続成分が弱化する場合は必ず「語調重音フレーズ」の中に含まれる。また、取り立て副詞が弱化しないパターンも見られる。次では、取り立て副詞、述語の後続部分がそれぞれ弱化する条件、文のどの成分が取り立てスコープまたは後続部分に該当するかを、それぞれの取り立て副詞を含む例文を挙げ、考察する。

I 取り立て副詞が弱化するかどうかによって、「語調重音フレーズ」の種類が決まる。

取り立て副詞が弱化するかどうかはその文は「後方スコープ」にも解釈される可能性があるかどうか、取り立て副詞より右側の要素は旧情報であるかどうか、音節数が多いかどうかに関わっている。それぞれの場合について、例を挙げながら考察する。

(4-4) a. {我们班重音句就去了两个弱化句}。

*b. {我们班重音句}就去了两个。

我々のクラスだけで2人行った。

(4-5) a. 演出七点半开始, 他{七点二十五分重音句才到剧场弱化句}。

b. 演出七点半开始, 他{七点二十五分重音句}才到剧场。

プログラムは7時半に始まるが、彼は7時25分になってやっと劇場に着いた。

劉月華など (1988) p. 209

上記用例(4-4)では、「就」は弱化しなければ、「後方スコープ」にも解釈されることができ、この文は「2人だけ行った」という意味になるため、②のパターンは容認できない。一方、例(4-5)では、「才」に重音を置かない限り、bは「後方スコープ」に解釈されないため、②のパターンも存在する。

(4-6) a. 他的表演非常感人, 而且{曲折的情节重音句也非常感人弱化句}。

彼の演技は感動的で、複雑に絡み合うストーリーも感動的です。

b. 非常有意思, 而且{曲折的情节重音句}也非常感人。

とても興味深い作品で複雑に絡み合うストーリーも感動的です。

bの出典：『聞く中国語』2012. 4 p. 29

(4-7) a. 昨天{小王重音句也去香山了弱化句}?

昨日王さんも香山に行ったの。

昨日王さんさえも香山に行ったの。

b. 昨天{小王重音句}也去了那个秋天的红叶非常漂亮的香山吗?

昨日王さんもあの秋の紅葉が非常に綺麗な香山に行ったの。

上記用例(4-7a)では、後続成分が目的語の「香山」である。「香山」は2音節語で、「語調重音フレーズ」の中に含まれる。一方、例(4-7b)では、目的語の「那个秋天的红叶非常漂亮的香山」は音節数が多く、動詞と目的語との間に、ポーズを置くのが通常である。この場合、目的語は「語調重音フレーズ」の中に含まれない。また、「也」は「極端な場合の例示」の意味を表す場合、「也」は必ず弱化しなければならないため、②のパターンは容認できない。

II 取り立てスコープは主語だけではなく、動詞を修飾する時間副詞、前置させられた目的語の場合も考えられる。

(4-8) a. 去的人不多, {我们班重音句就去了两个弱化句}。

主語

b. 去的人不多, {我们班重音句就去了弱化句}两个。

行った人は多くない。我々のクラスからは2人だけだ。

呂叔湘 (2003) p. 212

(4-9) a. 演出七点半开始, 他{七点二十五分重音句才到剧场弱化句}。

時間副詞

b. 演出七点半开始, 他{七点二十五分重音句才到弱化句}剧场。

プログラムは7時半に始まるが、彼は7時25分になってやっと劇場に着い

た。

劉月華など (1988) p. 209

(4-10) 妹妹比哥哥活泼多了, {话重音也多弱化句}。

目的語

妹の方が兄よりもずっと活発で、口も達者だ。

劉月華など (1988) p. 207

上記用例(4-8)～(4-9)では、取り立てスコープはそれぞれ主語の「我们班」、時間副詞の「七点二十五分」で、そこに重音が付加される。また、一般的には、目的語が動詞の後に置かれるが、取り立て副詞の前に移動させられる場合もある。上記用例(4-10)では、前置させられた目的語の「话」が取り立てスコープで、「語調重音フレーズ」は「前方スコープ」のパターン①となる。

III 後続成分が目的語だけではなく、動詞の補語、動目フレーズの可能性もある。

(4-11) a. 先把问题调查清楚, {然后重音句再研究解决的办法弱化句}。

目的語

b. 先把问题调查清楚, {然后重音句再研究弱化句} 解决的办法。

まず問題をはっきりさせてから、解決方法を考える。

呂叔湘 (2003) p. 468

(4-12) a. 我找过一遍, {他重音又找了一遍弱化句}。

動詞の補語

b. {他重音又找了弱化句} 一遍。

私が1度探し、彼がもう1度探したが、やはり見つからなかった。

呂叔湘 (2003) p. 461

(4-13) a. 他胆子太小了, 甚至 {树叶重音句落下来都怕砸了脑袋弱化句}。 動目フレーズ

b. 他胆子太小了, 甚至 {树叶重音句落下来都怕弱化句} 砸了脑袋。

彼は非常に臆病で、木の葉が落ちてきても頭がつぶされるのではと心配する。

劉月華など (1988) p. 209

上記用例(4-11)～(4-12)の後続成分はそれぞれ目的語の「解决的办法」、動詞の補語「一遍」である。また、(4-13)では、後続成分は動目フレーズの「砸了脑袋」である。

IV 後続成分が「語調重音フレーズ」の中に必ず含まれるとは限らない。

後続成分が「語調重音フレーズ」の中に含まれるかどうかは情報の重要度と音節数に関わる。取り立て副詞と述語は必ず「語調重音フレーズ」の中に存在するが、後続成分は必ずしも「語調重音フレーズ」の中にあるとは限らない。以下のような場合、後続成分は「語調重音フレーズ」の中に含まれない。

(4-14) a. 去年是个丰收年。 {今年重音句又是个丰收年弱化句}。

去年は豊作で、今年もまた豊作だ。

b. {今年重音句又是个弱化句} 丰收年。

今年もまた豊作だ。

b の出典：呂叔湘 (2003) p. 461

上記用例(4-14)では、後続成分の「丰收年」は繰り返された要素で、弱化するのが一般的なので、「語調重音フレーズ」の中に含まれる。一方、bでは、後続成分の「丰收年」は新情報で、弱化しないため、「語調重音フレーズ」の中の含まれない。また、前述したように、後続成分の音節数が多い場合は「語調重音フレーズ」の中の含まれない。

4.3.2 「後方スコープ」のパターン

「都」、「再」は「後方スコープ」が容認できないため、「後方スコープ」を持つ取り立て副詞には「也」、「又」、「就」、「才」、「只」である。「後方スコープ」は取り立てスコープに重音を置き、取り立て副詞と取り立てスコープとの間にポーズが容認できるかどうかによって、2種類に分けられる。

③ {取り立て副詞+(述語)+取り立てスコープ重音句+(後続成分) 弱化句}

④ 取り立て副詞+(述語)+{取り立てスコープ重音句+(後続成分) 弱化句}

一般的に言えば、取り立て副詞と取り立てスコープとの間にポーズをいれず、③のように発音する。しかし、取り立てスコープの音節数が多い場合、その前にポーズを入れることもできる。この場合、ポーズの位置は述語の後となる。ただ、述語が取り立てスコープの場合、取り立て副詞は述語とポーズなしで発音されるため、③のパターンしか容認できない。以下では、それぞれの場合の例を挙げ、分析を行う。

I 一般的に言えば、取り立て副詞と取り立てスコープとの間にポーズをいれず、③のように発音する。しかし、取り立てスコープの音節数が多い場合、その前にポーズを入れることもできる。この場合は④のパターンとなる。

(4-15) a. 中国是社会主义国家, {也是发展中国家重音句}。

b. 中国是社会主义国家, 也是{发展中国家重音句}

中国は社会主義国であり、且つ発展途上国でもある。

劉月華など (1988) p. 207

(4-16) a. 信里他 {只写了这么几行字重音句}。

b. 信里他只写了{这么几行字重音句}。

手紙では彼はたったこの数行しか書いていない。

劉月華など (1988) p. 191

上記用例(4-15)では、目的語の「发展中国家」が取り立てスコープとなり、そこに重音が置かれる。aのように、取り立て副詞と取り立てスコープとの間にポーズをいれないのが通常である。しかし、目的語の「发展中国家」は音節数が多いため、bが示すように、述語「是」の後にポーズを入れることもできる。ポーズを入れる場所は一般的には、述語の後に決められている。上記用例(4-16)では、「这么」の後ではなく、「只写了」の後にポーズを入れる。

II 述語が取り立てスコープである場合、もしくは取り立てスコープの音節数が少ない場合は③パターンとなる。

目的語が取り立てスコープとなる場合が多いが、述語が取り立てスコープとなる場合も見られる。例えば：

- (4-17) 这本书我{就翻了翻重音句}，还没有仔细看。 述語
この本はちょっとめくってみただけで、まだじっくり読んでない。
劉月華など (1988) p. 211

- (4-18) 刚洗完衣服，他{又去忙别的重音句}。 述語+目的語
服を洗い終わると、彼はすぐほかのことをやりだした。
呂叔湘 (2003) p. 462

- (4-19) 这件事{就你和我重音句}知道，不要告诉别人。 主語
この話は君と僕しか知らないんだけど他の人に言っちゃだめだよ。
劉月華など (1988) p. 210

上記用例(4-17)では、述語の「翻了翻」が取り立てスコープで、そこに重音を置く。取り立て副詞はその後の述語とポーズなしで発音されることが多いため、述語が取り立てスコープになる場合、③のパターンしか容認できない。また、「述語+目的語」が取り立てスコープになる場合もある。この場合も同様に、取り立て副詞の後にポーズを入れないため、③のパターンしか存在しない。また、一般的には、副詞が主語の前に来ることはないが、「就」、「只」は範囲を限定する意味を表す場合、主語の前に置かれることができる。この場合は「前方スコープ」のパターンではなく、「後方スコープ」のパターン④となる。

また、取り立てスコープの音節数が少ない場合は③の語調重音パターンが一般的である。以下の例を参照されたい：

- (4-20) 谢力{就学汉语重音句}，不学日语。 目的語
シェリーは中国語を勉強しているんで、日本語は勉強していません。
劉月華など (1988) p. 210

- (4-21) 我{才看了一遍重音句}，还要再看一遍。 補語
私は1度見ただけなので、もう1回見たい。
呂叔湘 (2003) p. 48

上記用例(4-20)と例(4-21)では、取り立てスコープがそれぞれ目的語の「汉语」と補語の「一遍」である。両方とも音節数が少ないため、その前にポーズを入れることが少ない。いずれも③のパターンとなる。

III 目的語だけではなく、目的語+補語なども後続成分になる場合が見られる。また、後続成分が省略されることもできる。

(4-22) 辅导员批评了我们, {也表扬了重音句我们弱化句}。 目的語が後続成分
私達は指導員の人にしかられもし、ほめられもしました。
劉月華など (1988) p. 207

(4-23) a. 他 {就碰了重音句你一下儿弱化句}, 哪至于疼得那个样子。 目的語+補語が後続成分
彼とちょっとぶつかっただけでそんなに痛がることはないだろう。
b. 他 {就碰了你一下儿重音句}, 哪至于疼得那个样子。
彼とちょっとだけぶつかったが、そんなに痛がることはないだろう。
劉月華など (1988) p. 211

(4-24) 一共 {才十个重音句}, 不够分配的。 後続成分が省略される
合わせてたったの 10 個だ。分けるには足りないよ。
呂叔湘 (2003) p. 48

(4-25) 他懂一点儿汉语, 可是 {只会说重音}, 不会写。 後続成分が省略される
彼は中国語が少しわかるが、しゃべれるだけで書けない。
劉月華など (1988) p. 209

上記用例(4-22)では、目的語「我们」は弱化し、「語調重音フレーズ」の中には重音句に後続する弱化句が存在する。例(4-23)では、「你」が目的語で、「一下儿」が動詞の補語である。重音句に後続する「一下儿」が弱化するが、そこに重音を置くこともできる。この場合文の意味が変わり、「一下儿」が焦点となる。また、後続成分が省略される場合もある。上記用例(4-24)と(4-25)は後続成分が「語調重音フレーズ」の中に存在しない。

4.3.3 取り立て副詞が焦点

副詞「又」、「再」、「就」、「才」自身が焦点を働く場合もある。この場合の音韻パターンは以下のように示す:

⑤ {副詞重音句+後続成分弱化句}

(4-26) 我找过一遍, 他 {又重音找了一遍弱化句}, 还是没找着。
私が 1 度探し、彼がもう 1 度探したが、やはり見つからなかった。
呂叔湘 (2003) p. 461

(4-27) 我还不不懂, 请老师 {再重音讲一遍弱化句}。
まだよく分かりません。先生もう一遍説明して下さい。
劉月華など (1988) p. 205

(4-28) 我 {就重音走弱化}, 你別催了。
今行くからせかさないで。
劉月華など (1988) p. 210

(4-29) 他 {才重音走弱化}。

彼は出かけたばかりだ。

呂叔湘 (2003) p. 48

取り立て副詞自身が焦点を働く場合は、重音が副詞に置かれる。上記用例(4-27)～例(4-29)では、重音がそれぞれ取り立て副詞「又」、「再」、「就」、「才」に置かれ、その後の要素は弱化する。

以上では、各取り立て副詞の「語調重音フレーズ」のパターンを考察した。「語調重音フレーズ」は重音句の位置に関わっている。重音句は「前方スコープ」の場合、取り立て副詞の前に置かれ、「後方スコープ」の場合は取り立て副詞の後に置かれる。副詞自身が焦点を働く場合は副詞に重音が置かれる。取り立て副詞が弱化するかどうかによってさらに①と②に分けられる。取り立て副詞が弱化するかどうかはその文は「後方スコープ」にも解釈される可能性、情報の重要度、音節数に関わっている。また、「極端な場合の例示」の「也」と「都」は弱化しない。

上記に示した①と②については、取り立てスコープに重音が置かれ、取り立て副詞と述語は弱化する。目的語は弱化すれば、「語調重音フレーズ」の中にあるが、弱化しない場合は「語調重音フレーズ」の中に置かれられない。目的語は弱化するかどうかは音節数、取り立て副詞より右側の要素は旧情報であるかどうかに関わっている。目的語と同様に、取り立て副詞も弱化しない場合が存在する。この場合、「語調重音フレーズ」の右側の境界は取り立て副詞の前となり、取り立て副詞より右側の要素は弱化しない。

一方、「後方スコープ」の場合は取り立て副詞と取り立てスコープとの間にポーズがあるかどうかによって、③と④に分類される。述語が取り立てスコープである場合、もしくは取り立てスコープの音節数が少ない場合は③パターンとなる。また、どの成分が取り立てスコープ、後続成分になりうるかについても考察した。

「前方スコープ」の場合、主語だけではなく、動詞を修飾する時間副詞、前置させられた目的語の場合も考えられる。「後方スコープ」の場合、述語、目的語、述語+目的語、補語などが取り立てスコープになることができる。また、「就」と「只」が「範囲を限定する」という意味を表す場合は、主語が取り立て副詞の後に来ることができ、この場合、主語が取り立てスコープとなる。後続成分については、「前方スコープ」の場合、目的語だけではなく、目的語+補語なども後続成分になる場合が見られる。また、後続成分が省略されることもできる。述語が取り立てスコープの場合、目的語、補語などの後続成分は省略されることが多い。

第五章 Praat ソフトによる音声分析

中国語の初歩文法書では、重音とは音を強くするというふうに教えられている。しかし、音の強さだけではなく、例えば、ピッチパターン、持続時間の長さ等も重音の特徴である。

重音と弱化の音声的特徴について、趙元任(1968)は以下のように指摘している。

所谓叫特别加重，并不是说得响一点儿，声音大一点儿，用劲一点儿，而是说时间长一点儿，音程大一点儿，就是低的更低，高的更高……虽然强度固然略微加强，可是这个是在其次，跟别国所谓重音以加强为主的不同一点儿。一句话里如果有特别加重的时候，大概其余的部分就稍为跟着缩小一点儿。就是时间短一点儿，音程窄一点儿。

重音というのは音量を大きくする、力をもっと入れるということではなく、持続時間を長くする、音域を大きくするということである。つまり、低い音をもっと低くし、高い音をもっと高くするという意味である。やや強くなるが、やはり強さは副次的なものだ。重音は主に「音を強くする」を意味する他の言語とは異なり、中国語では、1つの文の中のある所に重音が存在すれば、他の部分は持続時間が短くなり、音域が小さくなる。

さらに、声調と重音との関係について、以下のように述べている：

中国話的轻重音，主要是音高幅度的扩大跟时间持续的延长，响度只是次要的。例如，上声字加重音时，音就降得更低。去声字加重音时，就起得更高些，降得低些。（『中国話的文法』 p. 20）

中国語の「軽重音」は主に音域の拡大と持続時間の延長ということで、強さは副次的なものだ。例えば、第3声に重音が付加されると、正常の3声より音はさらに低く抑える。第4声に重音が置かれると、正常の4声よりもっと高いところから、もっと低いところまで下がる。

その他に、重音の音声的特徴について、楊立明(2003)等がある。本稿では、取り立て副詞に関わる重音、弱化の音声特徴を音響音声学分析ソフト Praat (version 5.3.55)で音響分析する。取り立て副詞の意味と重音、弱化との関係を明らかにし、「語調重音フレーズ」の音声的実現を考察する。

5.1 重音の音声特徴

目的：

1 音節語である各取り立て副詞に重音が付加される場合、2 音節語のアクセントパターン（「軽声」を含む語、「前重型重音」の語と「後重型重音」の語）による重音の、それぞれの声調に応じた音声特徴の変化の有無を考察することを目的とする。

調査方法：

具体的には条件を統制した文を中国語母語話者が音読し、その音声を音響音声学分析ソフト Praat (version 5.3.55)で音響分析する。

研究対象:

第1声、第2声、第3声、第4声の取り立て副詞「都」、「才」、「也」、「就」を研究対象とする。

5.1.1 取り立て副詞の重音の音声特徴

まず、1音節語が各声調に応じて、重音の有無によりどのように音声特徴が異なるかを分析する。本稿で取り扱う取り立て副詞はすべて1音節語であるので、第1～4声の例として、取り立て副詞「都」、「才」、「也」、「就」を例に分析する。

(5-1) a. 中国的大城市都去过。 「都」に重音が付加されていない
中国の大都市に全部行ったことがある。

b. 中国的大城市都重音去过。 「都」に重音が付加されている
中国の大都市に全部行ったことがある。

(5-2) a. 只有我去，他才去。 「才」に重音が付加されていない
私が行かなければ、彼も行かない。

b. 他才重音去。 「才」に重音が付加されている
彼はやっと思った。

(5-3) a. 他也爱书法。 「也」に重音が付加されていない
彼は書道も好きだ。

b. 他也重音爱书法。¹⁷ 「也」に重音が付加されている
彼は書道も好きだ。

(5-4) a. 如果我不去，他就去。 「就」に重音が付加されていない
もし私が行かなければ、彼は行く。

b. 他就重音去。 「就」に重音が付加されている
彼はもうすぐ行く。

以下に示す図 5-1～図 5-4a、b はそれぞれ例文(5-1)～(5-4) a、b の周波数と波形図である。以下の図は同じ発話者が同じ文を3回繰り返して読む発音を重ねたものである。持続時間の長さを比較するため、副詞を中心にして全体としては同じ長さ(0.8秒)になる。副詞の前後の1つの音節の波形をすべて表示されていない場合、その音節を()に入れて示す。

図 5-1a 「都」に重音が付加されていない

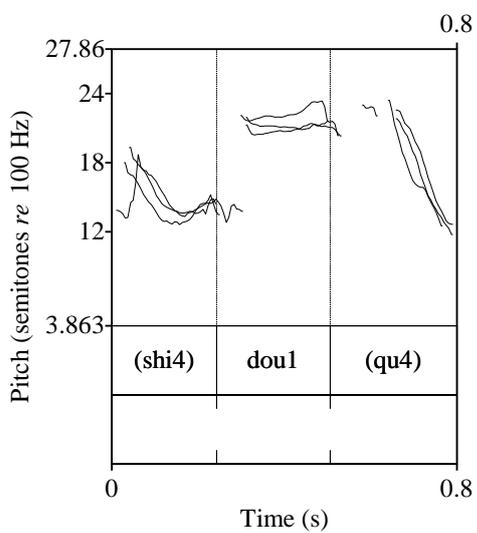


図 5-1b 「都」に重音が付加されている

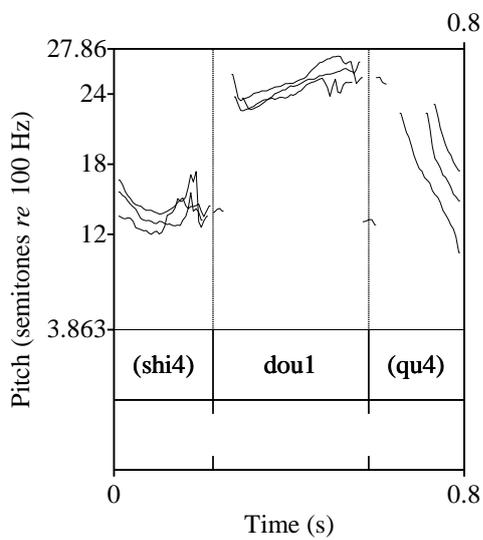


図 5-2a 「才」に重音が付加されていない

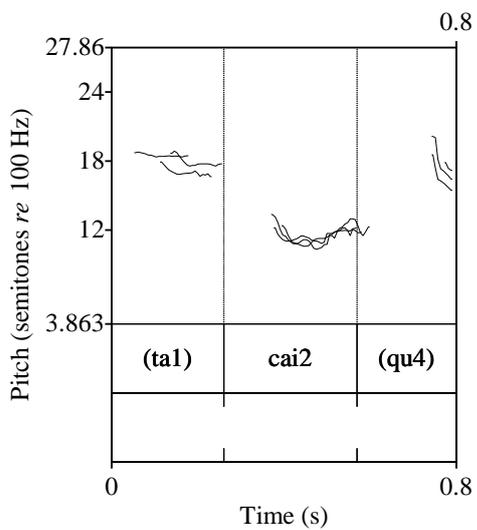


図 5-2b 「才」に重音が付加されている

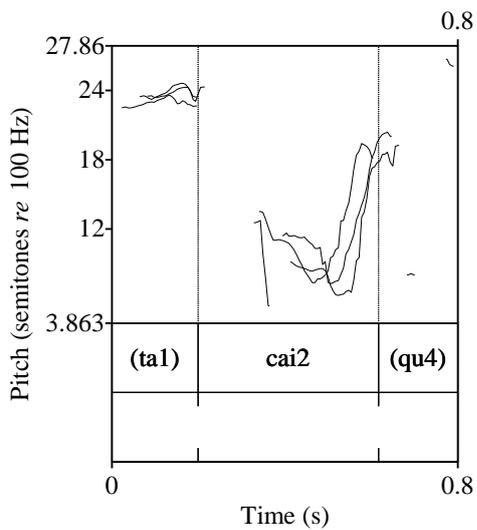


図 5-3a 「也」に重音が付加されていない 図 5-3b 「也」に重音が付加されている

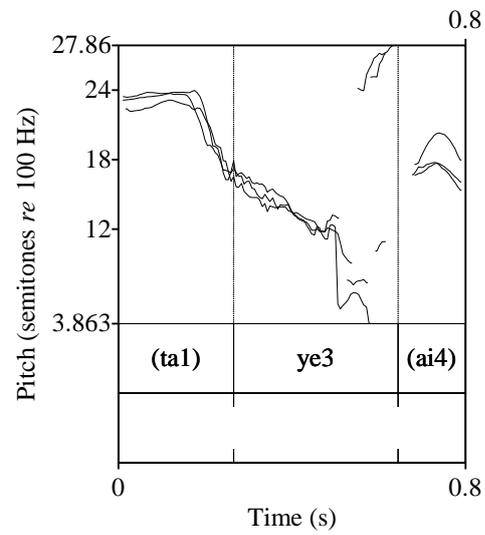
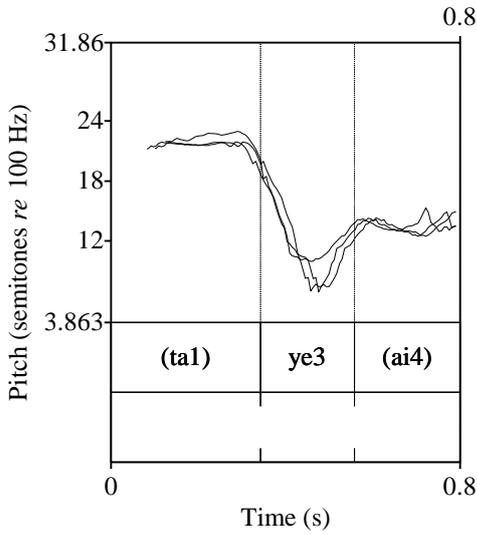
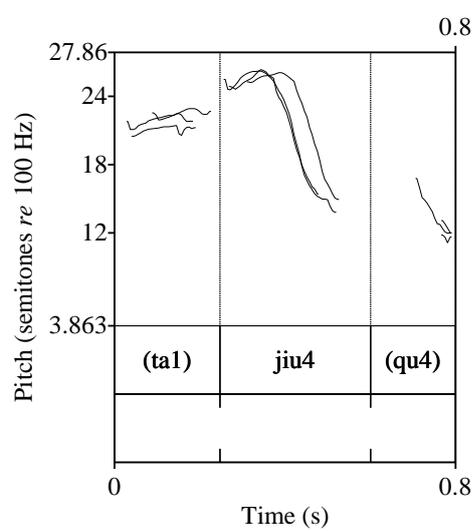
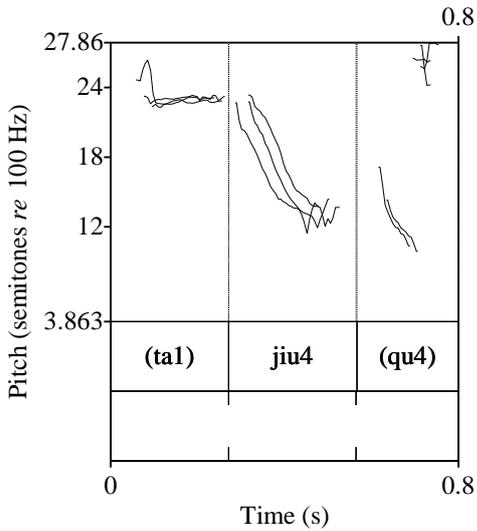


図 5-4a 「就」に重音が付加されていない

図 5-4b 「就」に重音が付加されている



上の図から次のことを見出すことができる：

① F0 値の変化(第 3 声の場合は下降)

図 5-1a の「都」には重音が付加されていないため、F0 値が 24 に達していない。それに対して、図 5-1b の「都」は重音が置かれていたため、F0 値が図 5-1a の「都」より高く、24 を超えている。第 1 声の「都」と同様に、第 2 声の「才」と第 4 声の「就」に重音が置かれる場合、F0 値が上昇する。図 5-2a と図 5-2b、図 5-4a と図 5-4b を比較してみると、重音が置かれている「才」の F0 値が 18 を超えているのに対して、重音が置かれていない「才」

の F0 値が 12 前後で、b の「才」の F0 値との差が大きい。同様に、図 5-4b が示すように、「就」に重音を付加すると、ピッチが激しく上がり、最高点は 27.86 の近くにも達した。一方、第 3 声の場合は、重音が付加されると F0 値が上昇するのではなく、下降する傾向にある。図 5-3b の「也」は重音が置かれていない図 5-3a より低く、一番低いところまで下がっている。

② ピッチパターンの変化

第 1 声の「都」は波形が横に伸びる直線型だが、重音が付加される場合は線全体が上昇するだけでなく、やや右肩上がりの型となる。同様に、第 2 声の「才」、第 3 声の「也」と第 4 声の「就」の波形も変化する。第 2 声の特徴は低い所から上昇するというので、重音が付加される場合は著しく上がり、斜面がよりシャープになっている。第 3 声の「也」は低い所からさらに低くなり、また上昇するという「谷」型の波形をしている。重音が付加される場合、もっと大きな「谷」になる。第 4 声の「就」は一旦上がってから急に下がるというパターンで、重音が付加される場合、上がりも下がりも激しくなる。

③ 持続時間の変化

重音が置かれていない a と重音が置かれている b における 4 つの取り立て副詞の持続時間を統計し、考察した。以下の表 1 を参照されたい。

表 1 「都」、「才」、「也」、「就」の持続時間

	(5-1) 「都」		(5-2) 「才」		(5-3) 「也」		(5-4) 「就」	
	a	b	a	b	a	b	a	b
1	0.187	0.273	0.356	0.424	0.218	0.493	0.222	0.351
2	0.154	0.278	0.368	0.360	0.255	0.458	0.191	0.309
3	0.153	0.265	0.315	0.413	0.227	0.512	0.223	0.367
平均値	0.165	0.272	0.346	0.399	0.233	0.488	0.212	0.342

上記の表 1 で示すように、以上の音長統計データは以下のことを示している：

重音が置かれている「都」は 0.272 で、重音が置かれていない時の 0.165 より 0.107 秒長くなった。他の声調も同様である。「才」、「也」、「就」はそれぞれ重音が付加されていない時より持続時間が長くなる傾向にある。その中、特に第 3 声の「也」は 0.255 秒も増加した。

以上をまとめると、取り立て副詞に重音が付加されると、持続時間が延長し、ピッチパターンがよりはっきりとした波形となる。第 1 声、第 2 声、第 4 声の F0 値が高くなるが、第 3 声は低くなる。

5.1.2 語アクセントパターンによる2音節語の重音の音声特徴

2音節語のアクセントパターン（「轻声」を含む語、「前重型重音」の語と「後重型重音」の語）による重音の、それぞれの声調に応じた音声特徴の変化の有無を考察する。取り立て副詞「就」は「前方スコープ」と「後方スコープ」を両方もつ副詞で、以下では、「就」を例として挙げる。前述したように、中国語の重音は、ピッチの高さと音の長さによって表現され、音の強さは明らかな要素ではない。以下では、重音が付加される部分のピッチと持続時間に注目する。

I 轻声を含む2音節語に置かれる重音の音声特徴

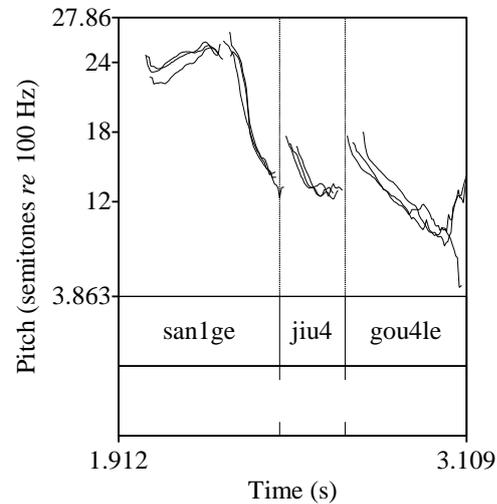
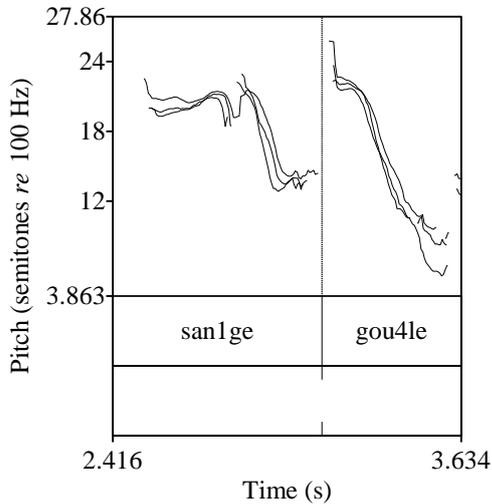
「前方スコープ」の場合、「就」の前の要素に重音が置かれる。以下の例(5-5)～(5-8)では、比較される対象はそれぞれ「1声+轻声」、「2声+轻声」、「3声+轻声」、「4声+轻声」の2音節語である。

- (5-5) a. 三个够了。
3つで十分だ。
b. {三个重音句就够了_{弱化句}}。
3つだけで十分だ。
- (5-6) a. 一个够了。
1つで十分だ。
b. {一个重音句就够了_{弱化句}}。
1つだけで十分だ。
- (5-7) a. 两个够了。
2つで十分だ。
b. {两个重音句就够了_{弱化句}}。
2つだけで十分だ。
- (5-8) a. 四个够了。
4つで十分だ。
b. {四个重音句就够了_{弱化句}}。
4つだけで十分だ。

以下に示す図 5-5a、b は例文(5-5) a、b の周波数と波形図である。

図 5-5a 「三个」に重音が付加されない

図 5-5b 「三个」に重音が付加される



上記の図 5-5a で分かるように、「三个」に重音を置く場合、「三」の F0 値は上昇したが、軽声の「个」の F0 値の変化はそれほどではない。このように、軽声に重音を加えることができない。2 音節語に重音が付加される場合、軽声ではない音節に重音が置かれる。他の声調についても同じことが言えるため、ここでは図で表示しない。

II 「前強型の 2 音節語」に置かれる重音の音声特徴

「前強型 2 音節語」に重音を置く場合、以下の例を参照されたい：

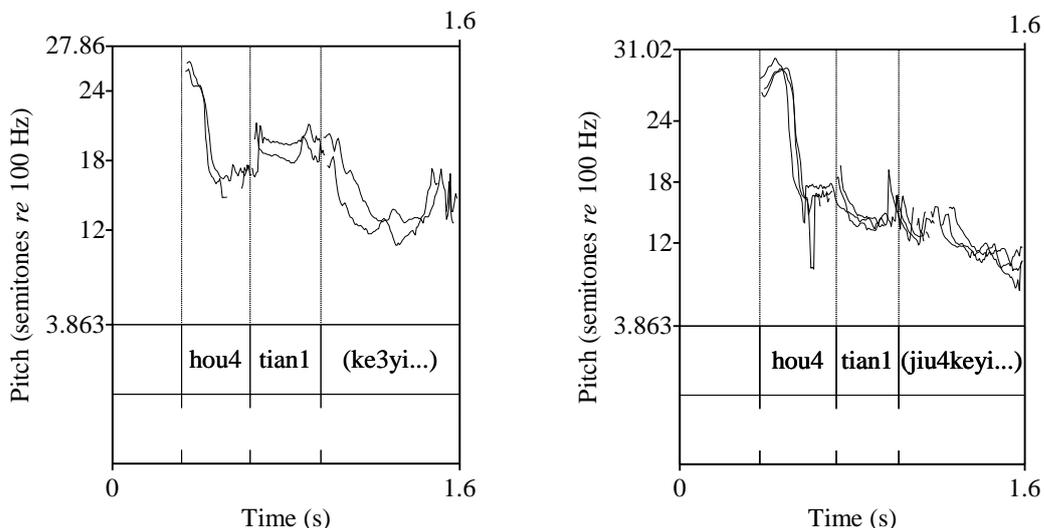
- (5-9) a. 今天可以完成。 前強型 2 音節語
 今日に完成できる。
- b. {今天重音句就弱化}可以完成。
 早くにも今日に完成できる。
- (5-10) a. 明天可以完成。 前強型 2 音節語
 明日に完成できる。
- b. {明天重音句就弱化}可以完成。
 早くにも明日に完成できる。
- (5-11) a. 五天可以完成。 前強型 2 音節語
 5 日間に完成できる。
- b. {五天重音句就弱化}可以完成。
 早くにも 5 日間に完成できる。
- (5-12) a. 后天可以完成。 前強型 2 音節語
 明後日に完成できる。

b. {后天重音句就弱化}可以完成。

早くにも明後日に完成できる。

以下に示す図 5-12a、b は例文 (5-12)a、b の周波数と波形図である。

図 5-12a 「后天」に重音が置かれない 図 5-12b 「后天」に重音が置かれる



上記の図(5-12)a、b から分かるように、「前強型 2 音節語」に重音が置かれる場合、前の音節の F0 値が上昇し、b が示すように、27.86 を超えている。持続時間も延びていることが図から分かる。しかし、後の音節「天」の F0 値が上昇するどころか、a と比較すれば、18 に達しておらず、下がっている。このように、「前強型 2 音節語」に重音が置かれる場合、前の音節は 1 声、2 声、4 声の場合、ピッチの上限が上昇し、持続時間が長くなる。後の音節はピッチの上限が下がる。一方、前の音節は 3 声の場合、重音が付加されれば、ピッチの下限が下がり、持続時間が長くなる。

III 「後強型の 2 音節語」に置かれる重音の音声特徴

(5-13)a. 小芳拿了三张票。

後強型 2 音節語

芳ちゃんが 3 枚の切符を取った。

b. {小芳重音句就弱化}拿了三张票。

芳ちゃんだけで 3 枚の切符を取った。

(5-14)a. 小明拿了三张票。

後強型 2 音節語

明ちゃんが 3 枚の切符を取った。

b. {小明重音句就弱化}拿了三张票。

明ちゃんだけで 3 枚の切符を取った。

(5-15)a. 小舞拿了三张票。

後強型 2 音節語

舞ちゃんが 3 枚の切符を取った。

b. {小舞重音句就弱化}拿了三张票。

舞ちゃんだけで3枚の切符を取った。

(5-16) a. 小丽拿了三张票。

後強型2音節語

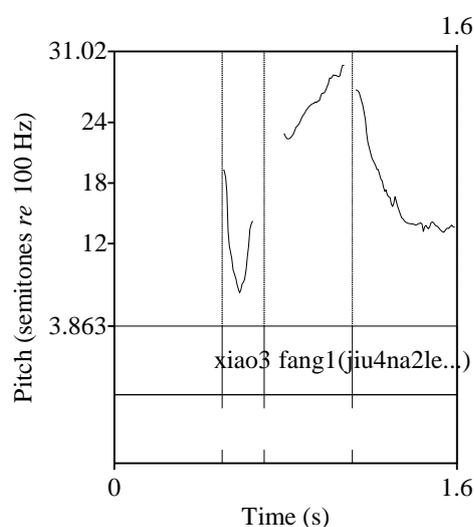
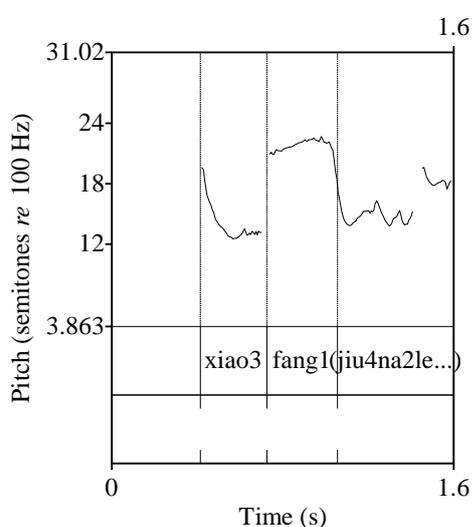
麗ちゃんが3枚の切符を取った。

b. {小丽重音句就弱化句}拿了三张票。

麗ちゃんだけで3枚の切符を取った。

以下に示す図5-13a、bは例文(5-13)a、bの周波数と波形図である。以下の図はいくつかの音声の中から最も標準的な音声を選び、音声を重ねずに作図した。

図5-13a 「小芳」に重音が置かれない 図5-13b 「小芳」に重音が置かれる



上記の図5-13aから分かるように、「後強型2音節語」に重音が置かれる場合、後の音節は1声、2声、4声の場合、ピッチの上限が上昇し、持続時間が長くなる。前の音節も同じように、ピッチの上限は上昇するが、変化幅は後ほど大きくない。持続時間については、あまり変化が見られない。一方、語アクセントのある3声に重音が置かれ、ピッチの下限が下がり、持続時間が長くなる。

以上から、中国語の重音は、ピッチの高さと音の長さによって表現されることが分かった。重音が置かれる要素にピッチパターンの変化が見られる。第1声、第2声、第4声の場合、ピッチの上限が上昇し、音声の高さ(F0)の変化幅の拡大が起こる傾向が見られる。一方、第3声はピッチの上限と関係なく、ピッチの下限が下がるというのが特徴的である。ピッチレンジが広く、大きな「谷」が現れる。

ピッチ上限の上昇、ピッチレンジの拡大及び後続語との「ピッチ落差」が重音の音声的特徴である。重音が掛っているところはピッチ上限が上昇し、ピッチレンジが拡大する。その右側はピッチ上限が下がり、ピッチレンジの縮小が見られる。しかし、この影響は左側には及ばない。

重音が置かれる音節は持続時間が延び、その右側は短縮する。発音速度が速くなる。しかし、ピッチの変化と同じように、左側に影響しない。重音があるか否かはピッチ上限が上昇したかどうか、その右側との「ピッチ落差」があるかどうかによって判断できる。

5.1.3 「感情重音」の音声特徴

「感情重音」が「邏輯重音」と同じ位置に現れ、本稿では「邏輯重音」の強い変種であると見なす。以上は重音の音声特徴を考察したが、文全体に「感情重音」が加わる場合、重音はどのような音声特徴を持つのかを明らかにしたい。以下では、重音が付加される場所はそれぞれ「第1声+軽声」、「第2声+軽声」、「第3声+軽声」、「第4声+軽声」の例を挙げる。

(5-17) a. 妈妈会说英语。

お母さんは英語が話せる。

b. 妈妈重音句也会说英语。

お母さんも英語が話せる。

c. 妈妈重音句也会说英语。

お母さんさえも英語が話せる。

感情重音

(5-18) a. 爷爷会说英语。

お爺さんは英語が話せる。

b. 爷爷重音句也会说英语。

お爺さんも英語が話せる。

c. 爷爷重音句也会说英语。

お爺さんさえも英語が話せる。

感情重音

(5-19) a. 奶奶会说英语。

お婆さんは英語が話せる。

b. 奶奶重音句也会说英语。

お婆さんも英語が話せる。

c. 奶奶重音句也会说英语。

お婆さんさえも英語が話せる。

感情重音

(5-20) a. 爸爸会说英语。

お父さんは英語が話せる。

b. 爸爸重音句也会说英语。

お父さんも英語が話せる。

c. 爸爸重音句也会说英语。

お父さんさえも英語が話せる。

感情重音

以下に示す図 5-18a、b、c はそれぞれ例文(5-18)a、b、c の周波数と波形図である。

図 5-18a 「爷爷」に重音が置かれない

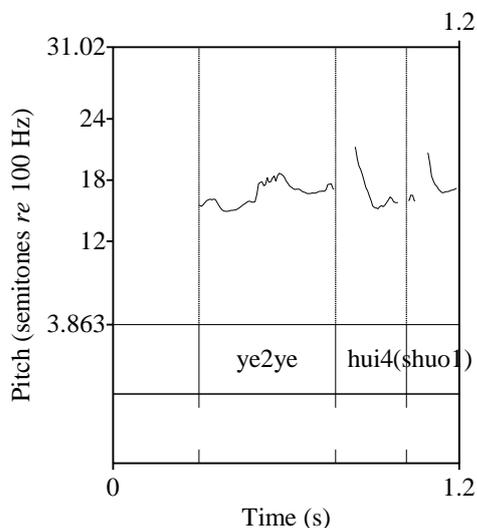
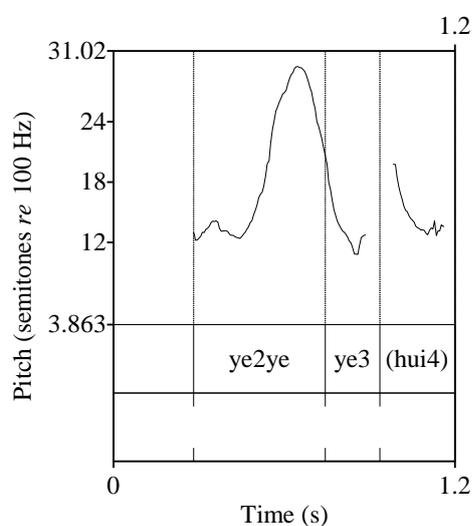
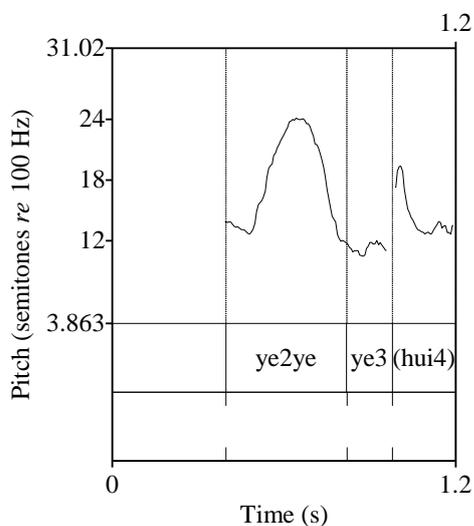


図 5-18b 「爷爷」に「邏輯重音」が置かれる 図 5-18c 「爷爷」に「感情重音」が置かれる



上の図 5-18c から、文全体に「感情重音」が加わる場合、図 5-18b と比べ、「爷爷」の F0 値がさらに上昇し、持続時間も延びると分かる。図 5-18b の「爷爷」の F0 値は 24 を超えていないが、図 5-18c の「爷爷」の F0 値は 24 を遥かに超えており、最も高い 31.02 に達している。持続時間も増加していることが横の幅から確認できる。このように、「感情重音」は「邏輯重音」(通常の論理アクセント)の特徴がさらに強められている(より長い、より高い、より低い)と言える。

5.2 弱化の音声特徴

重音を含む重音句の後ろの部分は正常の発音より短くかつ弱く発音される。本章は取り立て副詞を含む文では、弱化の音声がどのように実現されるのかについて考察する。

5.2.1 取り立て副詞の弱化の音声特徴

目的:

重音に後続する位置での弱化について、1音節語である各取り立て副詞が弱化する場合、アクセントパターンが異なる2音節語（「轻声」を含む語、「前重型重音」の語と「後重型重音」の語）が弱化する場合の、それぞれの声調に応じた音声特徴の変化の有無を考察することを目的とする。

調査方法:

具体的には条件を統制した文を中国語母語話者が音読し、その音声を音響音声学分析ソフト Praat (version 5.3.55)で音響分析する。1音節語の場合として弱化した4つの取り立て副詞の例を挙げる。

- (5-21) a. 他们 || 都不知道。
彼らは全員知らない。
b. {他们重音句 都不知道弱化句}。
彼らさえも知らない。
- (5-22) a. 他们没去。
彼らは行かなかった。
b. {他们重音句 也没去弱化句}。
彼らも行かなかった。
- (5-23) a. 他们 || 也不知道。
彼らも知らない。
b. {他们重音句 也不知道弱化句}。
彼らさえも知らない。
- (5-24) a. 有三个的话, 就够了。
3つがあれば、十分だ。
b. {三个重音句 就够了弱化句}。
3つだけで十分だ。

以下に示す図 5-21～図 5-24a、b はそれぞれ例文(5-21)～(5-24)a、b の周波数と波形図である。

図 5-21a 「都」が弱化しない

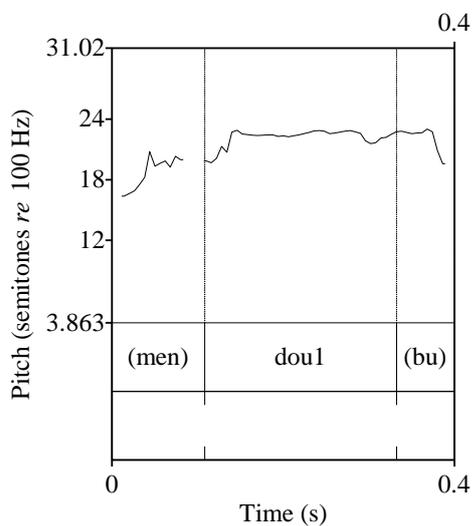


図 5-21b 「都」が弱化する

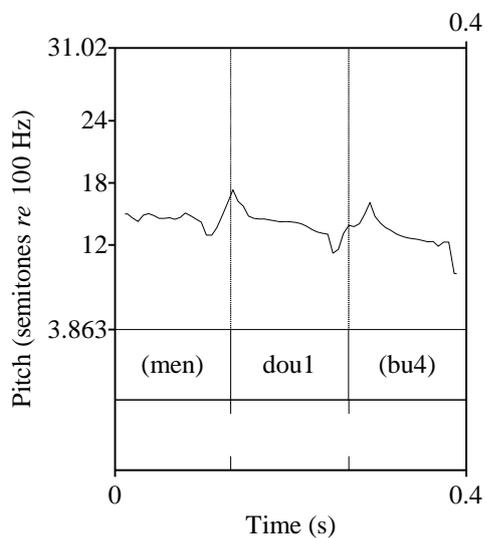


図 5-22a 「没」が弱化しない

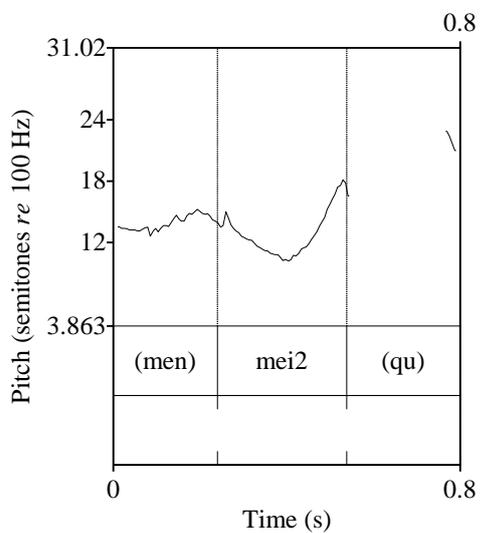


図 5-22b 「没」が弱化する

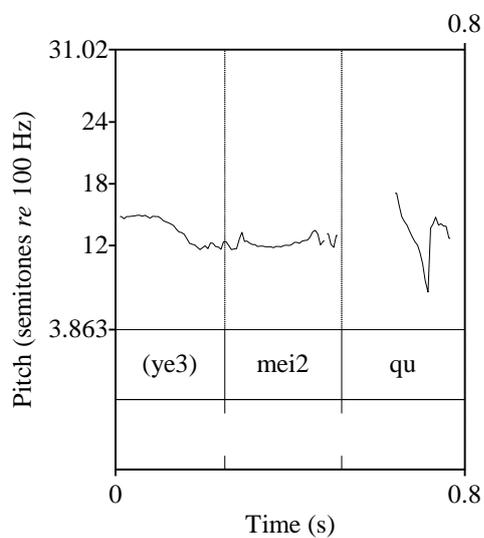


図 5-23a 「也」が弱化しない

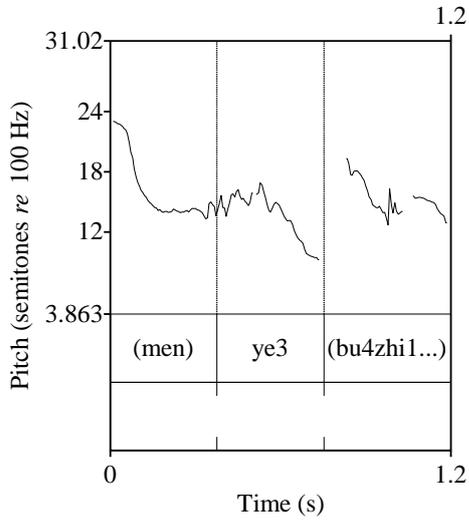


図 5-21b 「也」が弱化する

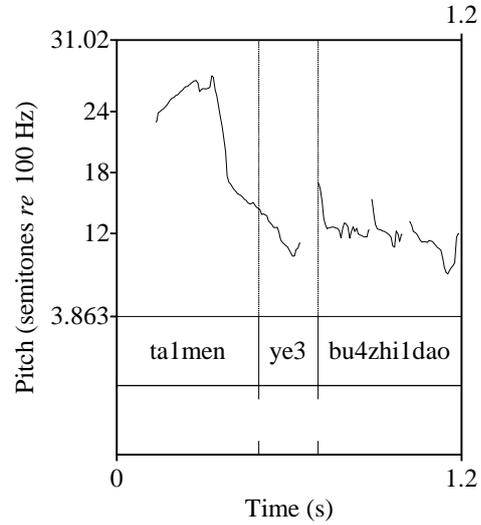


図 5-24a 「就」が弱化しない

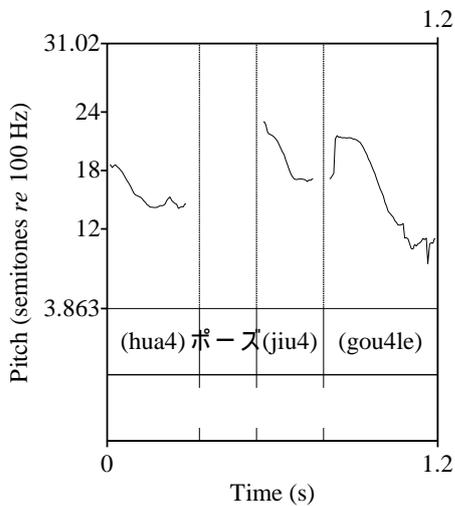
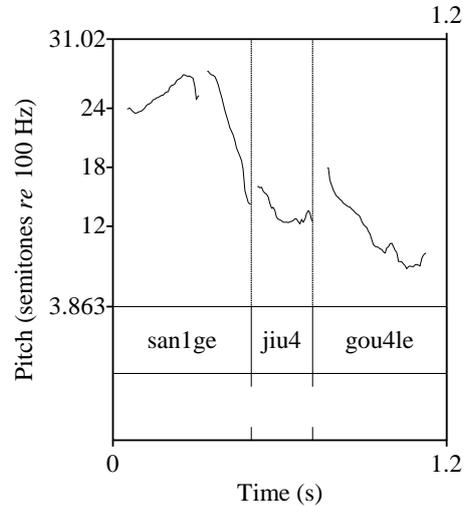


図 5-24b 「就」が弱化する



上の図から次のことを見出すことができる：

① F0 値が下がる

図 5-21b の「都」は弱化し、弱化しない場合と比べ、図 5-21a が示すように、F0 値が 18 を下回り、下がっている。第 1 声と同様に、第 2 声、第 4 声も弱化する場合、ピッチの上限が下がる。一方、第 3 声は弱化する場合、F0 値が下がるのではなく、ピッチの一番低い所が上昇する傾向が観察される。

② ピッチパターンの変化

第1声の「都」は波形が横に伸びる直線型だが、弱化する場合は線全体がさがる。形の変化が見られない。一方、第2声の「才」、第3声の「也」と第4声の「就」の波形は変化する。第2声が弱化する場合、上がり具合がやや緩やかになる。重音が付加される場合は急激に上昇するが、弱化は重音と逆な音声特徴を持っているといえる。第3声に重音が付加される場合、もっと大きな「谷」になるが、弱化する場合は「大きな谷」が観察されず、ピッチレンジが縮小するのが普通である。また、第4声の「就」は一旦上がってから急に下がるというパターンで、重音が付加される場合、上がりも下がりも激しくなるが、弱化する場合はピッチレンジの縦の幅が小さくなる。

③ 持続時間の変化

結論を言うと、取り立て副詞に重音が付加される場合、持続時間が延長するが、弱化する場合は持続時間が短くなる。次の5.2.3でデータを示しながら分析する。

このように、第1声、第2声は第4声と同様に、弱化する場合はF0値が下がるとともに、持続時間も減少する。第3声が弱化する場合はF0値と関係なく、ピッチレンジが縮小し、谷が小さくなる傾向にある。

5.2.2 語アクセントパターンによる2音節語の弱化の音声特徴

2音節語のアクセントパターン（「轻声」を含む語、「前重型重音」の語と「後重型重音」の語）による弱化の、それぞれの声調に応じた音声特徴の変化の有無を考察する。以下では、「前方スコープ」と「後方スコープ」を両方もつ「也」を例として挙げる。

(5-25) a. 他会说英语。

彼は英語が話せる。

b. {他重音句 也会说英语弱化句}。

彼も英語が話せる。

(5-26) a. 他会说俄语。

彼はロシア語が話せる。

b. {他重音句 也会说俄语弱化句}。

彼もロシア語が話せる。

(5-27) a. 他会说法文。

彼はフランス語が話せる。

b. {他重音句 也会说法文弱化句}。

彼もフランス語が話せる。

(5-28) a. 他会说日语。

彼は日本語が話せる。

- b. {他重音句也会说日语弱化句}。
彼も日本語が話せる。

(5-29) a. 他喜欢小芳。
彼は芳ちゃんが好きだ。

- b. {他重音句也喜欢小芳弱化句}。
彼も芳ちゃんが好きだ。

(5-30) a. 他喜欢小明。
彼は明ちゃんが好きだ。

- b. {他重音句也喜欢小明弱化句}。
彼も明ちゃんが好きだ。

(5-31) a. 他喜欢小舞。
彼は舞ちゃんが好きだ。

- b. {他重音句也喜欢小舞弱化句}。
彼も舞ちゃんが好きだ。

(5-32) a. 他喜欢小丽。
彼は麗ちゃんが好きだ。

- b. {他重音句也喜欢小丽弱化句}。
彼も麗ちゃんが好きだ。

2音節語の弱化の特徴は1音節語とほぼ同じであるので図示は省略する。結論を述べると、「前強型2音節語」が弱化する場合、前の音節は第1声、第3声、第4声の場合、ピッチの上限が下がるとともに、持続時間が短くなる。後の音節も同じように、ピッチの上限は下がるが、変化幅は後ほど大きくない。持続時間については、2つの音節はほとんど変わらない。一方、前の音節が第3声の場合、弱化の特徴はピッチの下限が上昇し、持続時間が短くなることである。このように、「前強型2音節語」が弱化する場合、前の音節の変化幅がより大きい、「後強型2音節語」が弱化する場合、後の音節の変化幅がより大きいと分かった。

5.2.3 重音と弱化の細かい分析

重音がある場合、重音がないが弱化しない場合、弱化する場合の3つの関係を「就」(4声)を例にとりまとめる。

(5-33) a. 小李就重音去。 「就」自身に重音が置かれる
李さんはすぐ行く。

- b. {小李重音句就弱化}拿了三张票。 「就」は弱化する
李さんだけで切符を3枚も取った。

c. 送他上了火车，小李就回来了 重音も弱化も付加されていない

彼が汽車に乗るのを見送ったあと、李さんはすぐ帰った。

上記用例(5-33)が示すように、「就」には3つの意味があり、意味の違いに応じた発音も異なる。例(5-33a)では、「就」という副詞自身が焦点を働き、「すぐに」の意味を表す。例(5-33b)では、「就」の前の主語「小李」に重音が付加され、「就」は弱化する。一方、例(5-33c)における「就」は重音も弱音も付加されず、普通に発音される。

以下に示す図 5-33a、b、c はそれぞれ例文(5-33)a、b、c の周波数と波形図である。

図 5-33a 「就」に重音が置かれる

図 5-33b 「就」が弱化する

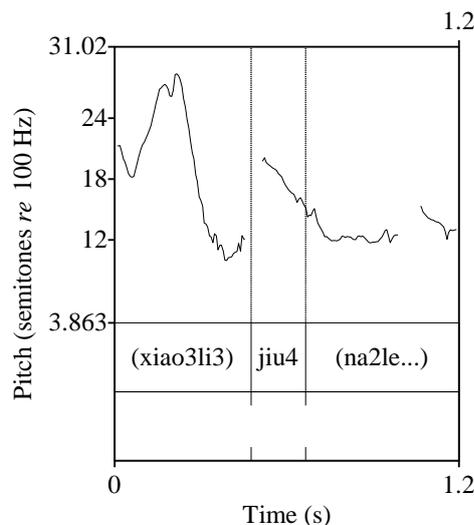
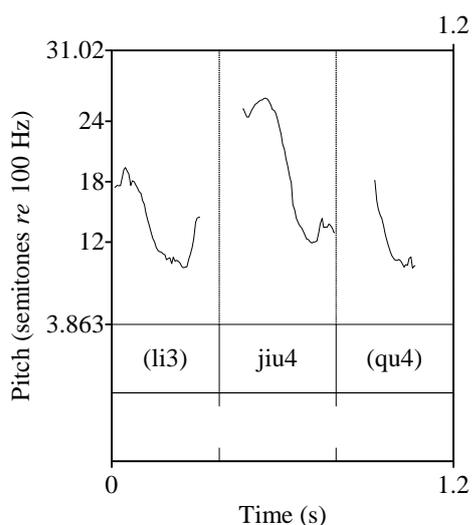
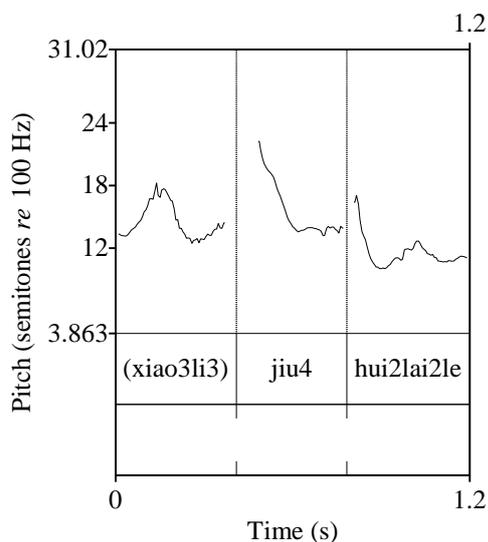


図 5-33c 「就」に重音が付加されないかつ「就」は弱化していない



上の図から次のことを見出すことができる：

①図 5-33a では、「就」の F0 値が高く、最高点は 24 を超えている。一方、図 5-33b の「就」は a より低く、最高点は 24 を超えていない。ピッチパターンについては、図 5-33b が示す

ように、「就」は弱化する場合、普通に発音される時図 5-33c のようなはっきりとした下がりピーチパターンが見れない。持続時間も図 5-33b は図 5-33c のより短い。一方、図 5-33a が示すように、副詞自身に重音が置かれる場合、持続時間が長くなり、ピーチの上限も上昇する。

②持続時間については、3つの「就」の持続時間を統計し、考察した。以下の表 2 を参照されたい。

表 2 3つの「就」の持続時間

	(5-33)a 小李就去。	(5-33)b 小李就拿了三张票。	(5-33)c 送他上了火车， 小李就回来了。
1	0.457	0.291	0.373702
2	0.433753	0.384	0.3807
3	0.454003	0.283	0.360780
4	0.435771	0.306	0.394463
5	0.41544	0.334544	0.365755
6	0.415	0.352457	0.344
7	0.422	0.334576	0.348
8	0.435	0.307	0.333
9	0.417	0.36511	0.337340
10	0.415	0.328	0.348
平均値	0.429997	0.328569	0.358574

上記の表 2 で示すように、以上の統計データは以下のことを示している：

重音が置かれている例(5-33a)の「就」は3つの「就」の中で一番持続時間が長く、0.429997秒である。普通に読まれる(5-33b)の「就」より持続時間が長いから、重音が置かれると、「就」の持続時間が長くなる傾向にあると分かる。弱化する「就」は普通に読まれる(5-33b)の「就」より短く、0.328569である。このように、弱化する場合、「就」の持続時間が短くなるのが通常であると分かる。他の取り立て副詞について同様なことが言える。

③ 振幅については、例(5-33)の a、b、c におけるそれぞれの「就」の振幅の最大値(maximum intensity in SELECTION) は 89.02143537762976 dB (a)、88.72853684000793 dB (b)、84.11196482005686 dB (c) で、3者の差は大きいものではない。

5.3 「語調重音フレーズ」の音声的実現

「語調重音フレーズ」の音声的実現には、上記にまとめたような重音と弱化の音声特徴が観察される。

(5-34) a. 李老师教英语。

李先生は英語を教えている。

b. {李老师重音句也教英语弱化句}。

李先生も英語を教えている。

(5-35) a. 李老师教英语。

李先生は英語を教えている。

b. 李老师{也教重音句英语弱化句}。

李先生は英語を(勉強も教えるもしている)。

(5-36) a. 李老师教英语。

李先生は英語を教えている。

b. 李老师{也教英语重音句}。

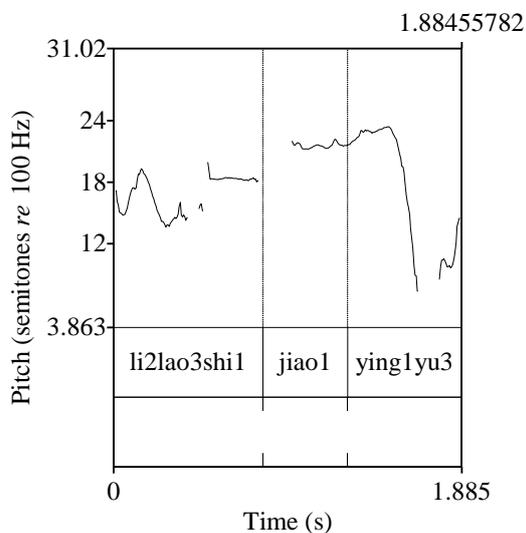
李先生は英語も教えている。

以下に示す図 5-34a、図 5-34b、図 5-35b、図 5-36b はそれぞれ例文(5-34a)、(5-34b)、(5-35b)、(5-36b)の周波数と波形図である。

(5-34) a 李老师教英语。

李先生は英語を教えている。

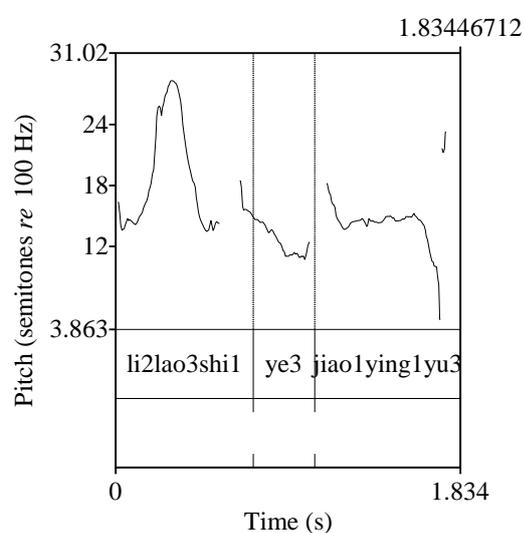
図 5-34a



b 李老师重音句也教英语。

李先生も英語を教えている。

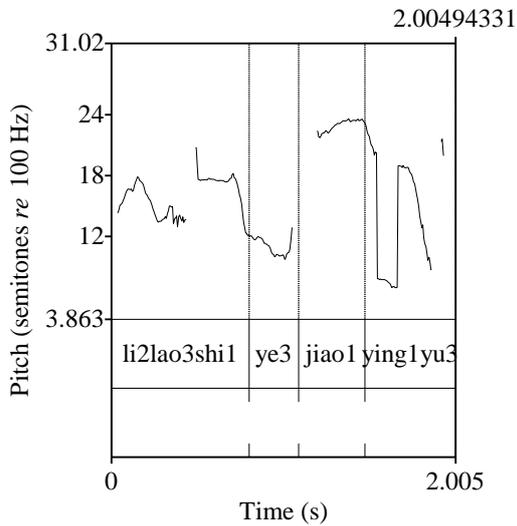
図 5-34b



(5-35)b 李老师也教重音句英语。

李先生は英語を(勉強も教へもしている)。

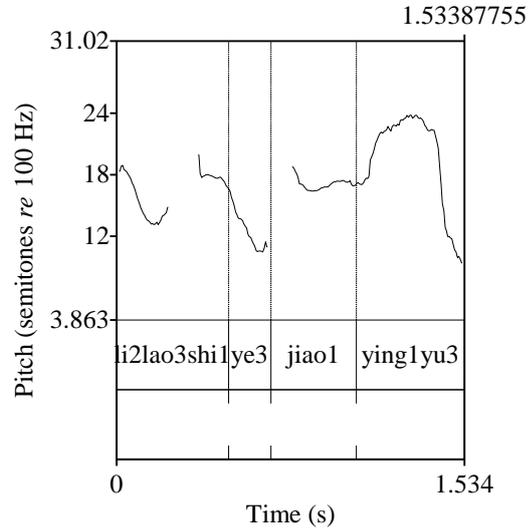
図 5-35b



(5-36)b 李老师也教英语重音句。

李先生は英語も教えている。

図 5-36b



上の図から次のことを見出すことができる：

- ① 「前方スコープ」の場合、図 5-34b が示すように、重音が取り立て副詞の前の取り立てスコープに置かれ、目的語の「語法重音」がなくなる。例えば：図 5-34a では、文末の目的語「英語」に「語法重音」が置かれている。しかし、主語「李老师」に重音を置くと、図 5-34b が示すように、文末の目的語「英語」の F0 値が下がり、「語法重音」がなくなる。
- ② 「語法重音」に重音が重なる場合は F0 値がさらに上昇する(第 3 声の場合は下がる)。図 5-34a が示すように、目的語の「英語」に「語法重音」が置かれる。さらに、図 5-36b が示すように、目的語に重音を置くこともできる。この場合、第 1 声、第 2 声、第 4 声の場合、F0 値がさらに上がり、持続時間がさらに長くなる。第 3 声の場合、F0 値がさらに下がり、持続時間がさらに長くなる。

重音と弱化の音声特徴を考察した結果は以下のようなものである：

ピッチ上限の上昇(第 3 声以外)、ピッチレンジの拡大及び持続時間の延長が重音の音声特徴である。第 1 声、第 2 声、第 4 声の場合、ピッチの上限が上昇する傾向があるが、第 3 声はピッチの上限と関係なく、ピッチの下限が下がるというのが特徴的である。

これとは逆に、持続時間の減少、ピッチ上限の下降、ピッチレンジの縮小が弱化の音声特徴と考える。第 1 声、第 2 声、第 4 声の場合はピッチの上限が下がるが、第 3 声の場合はピッチレンジが縮小し、ピッチ下限が上がる傾向が観察される。

第六章 取り立て副詞の音声パターンの提案

日本の中国語教育の現場において、これらの副詞を含む文では、どこに重音を置くのか、ポーズの入れるべき場所と入れては文の意味が変わる場所がどこなのか等の問題に悩まされる中国語の学習者が多い。これらの問題の解決が強く求められているから、これを少しでも解消できればと思い、本章では、各取り立て副詞の音声パターンの提案を行う。

前述したように、「語調重音フレーズ」には以下のような5つのパターンがある。

- ① {取り立てスコープ重音句+取り立て副詞+述語+(後続成分)弱化句}

「前方スコープ」

- ② {取り立てスコープ重音句}+ 取り立て副詞

「後方スコープ」: ③ {取り立て副詞+(述語)+取り立てスコープ重音句+(後続成分)弱化句}

- ④ 取り立て副詞+(述語)+{取り立てスコープ重音句+(後続成分)弱化句}

副詞が焦点: ⑤ {副詞重音句+後続成分弱化句}

まず、「也」を例として、意味の違いによって、「語調重音フレーズ」がどのように現れるのかを分析する。「也」は単独で焦点を担う機能がないため、いつのような4つの「語調重音フレーズ」を持っている。以下の例を参照されたい:

(6-1) 太郎さんも花子のことが好きだ。

a. {太郎重音句也喜欢(花子)弱化句}。 パターン①

b. {太郎重音句}也喜欢花子。 パターン①

(6-2) 太郎さんさえも花子のことが好きだ。

{太郎重音句也喜欢(花子)弱化句}。 パターン①

(6-3) 太郎さんは花子のことが好きでもある。

太郎{也喜欢重音句花子弱化句}。 パターン③

(6-4) 太郎さんは花子のことも好きである。

a. 太郎{也喜欢花子重音句}。 パターン③

b. 太郎也喜欢{花子重音句}。 パターン④

上記用例(6-1a)では、「他の誰かが花子のことが好きで、太郎さんも」という意味を表す

場合、取り立てスコープの「太郎」に重音が置かれ、その後の「也喜欢花子」は弱化してもよい、弱化しなくてもよい。弱化するかどうかによって文の意味が変わらないが、重音句の後の要素は新情報である場合、音節数が多い場合は弱化する。また、日本語の「も」の後の要素は省略されるが、中国語では、述語の「喜欢」は省略されない。「也」の前にポーズがなければ、弱化する。また、「也」は「類似追加」の意味だけではなく、「極端な場合の例示」の意味を表すこともできる。この場合、取り立てスコープの「太郎」に重音が置かれる。重音の置かれる位置は「類似追加」を表す場合の重音と同じだが、「也」は弱化しないという点では異なる。また、2つの重音は異なる音声特徴を有している。「極端な場合の例示」を表す重音は「類似追加」を表す重音に「感情重音」を加えた重音で、普通の重音よりピッチの上限がさらに上昇し、持続時間もさらに長くなる。

また、「後方スコープ」の場合、「花子のことが好きでもある」という意味を表す場合、述語に重音が置かれるが、「花子のことも好きである」という意味を表す場合、目的語に重音が置かれる。述語に重音が置かれる場合、「也」は必ず「語調重音フレーズ」の中にあるが、目的語がスコープである場合、「也」は述語とセットとして、必ずしも「語調重音フレーズ」の中にあるとは限らない。

このように、取り立て副詞の意味決定に重音、弱化、ポーズが重要な役割を果たしているといえる。第4章で提案している「語調重音フレーズ」の5つのパターンを用い、本稿の研究対象である7つの取り立て副詞を含む同音異義文の意味を確定することができる。以下では、各副詞について例を挙げ、取り立て副詞の意味解釈における韻律特徴を分析する。

6.1 「也」の音声パターン

「也」は次のような4つの「語調重音フレーズ」を持っている。

(6-5) a. 昨天{小王重音句也去颐和园了弱化句}?

「前方スコープ」

昨日王さんも颐和園に行ったの?

昨日王さんさえも颐和園に行ったの?

b. 昨天{小王重音句}也去颐和园了?

昨日王さんも颐和園に行ったの?

「後方スコープ」

c. (昨天小王去了长城,)小王{也去颐和园重音句了}?

d. (昨天小王去了长城,)小王{也重音去弱化}{颐和园了}?

(昨日王さんは長城に行った。)王さんは颐和園にも行ったの?

6.2 「又」の音声パターン

「又」は焦点を働くことができるため、次のような 5 つの「語調重音フレーズ」を持っている。

- 「前方スコープ」(6-6) a. 他 {今天重音句又买了一本漫画弱化句 }。 パターン①
b. 他 {今天重音句} 又买了一本漫画。 パターン②
彼は今日もまた漫画を 1 冊買った。

- 「後方スコープ」 c. 他今天 {又买了一本漫画重音句 }。 パターン③
d. 他今天又买了一本 {漫画重音句 }。 パターン④
彼は今日 (小説を買ったが)、また漫画も 1 冊買った。

- 副詞が焦点 e. 他今天 {又重音买了一本漫画弱化句 }。 パターン⑤
彼は今日 (漫画を買ったが)、また漫画を 1 冊買った。

上記例文(6-6)の a と b は「前方スコープ」の場合であり、「又」が「今日もまた」という意味を示す。この場合、2 つの音声パターンが存在するが、意味の差はほとんど見られない。「又买了一本漫画」は旧情報の場合は弱化するのが多い。一方、「後方スコープ」の意味は「前方スコープ」と異なる。「又」が「追加」の意味を表し、この文は「彼は小説を買い、漫画も買った」という意味に解釈される。

6.3 「再」の音声パターン

「再」はその前に時間副詞が置かれ、継続するという意味を表す場合のみ「前方スコープ」に解釈される。「再」自身は焦点を働くことができるため、次のような 5 つの「語調重音フレーズ」を持っている。

- 「前方スコープ」(6-7) a. 他 {明天重音句再买一本漫画弱化句 }。 パターン①
b. 他 {明天重音句} 再买一本漫画。 パターン②
彼は明日また漫画を 1 冊買う。

- 「後方スコープ」 c. 他明天 {再买一本漫画重音句 }。 パターン③
d. 他明天再买一本 {漫画重音句 }。 パターン④
彼は (小説を買ったが)、明日さらに漫画を 1 冊買う。

- 副詞が焦点 e. 他明天 {再重音买一本漫画弱化句 }。 パターン⑤
彼は (漫画を買ったが)、明日また漫画を 1 冊買う。

上記用例では、上記用例(6-7) a と b では、「再」は継続を表し、まだ実現していない動作あるいは経常的な動作に多く用いる。この場合、「再」の前の時間副詞に重音が置かれる。「明日また」という意味に解釈される。一方、「再」は「追加」の機能を働くこともでき、

「彼は小説を買い、漫画も買う」という意味にも解釈される。この場合は「後方スコープ」のパターンとなる。また、「又」と同様に、「再」も「重複」の意味を表すことができ、動作が繰り返されるという意味を表す。この場合は副詞「再」自身に重音が付加される。

6.4 「就」の音声パターン

「就」は「前方スコープ」と「後方スコープ」の両方の可能性を持つ場合は、②の「語調重音フレーズ」が容認できない。

「前方スコープ」(6-8) a. {小王一个人重音句就读了弱化句}三遍。 パターン①

王さん1人だけで3回も読んだ。

「後方スコープ」 b. 小王一个人{就读了三遍重音句}。 パターン③

c. 小王一个人就读了{三遍重音句}。 パターン④

王さん1人で3回を読んだだけだ。

副詞が焦点 d. 小王{就重音读弱化}。 パターン⑤

王さんはもうすぐ読む。

上の例文(6-8)では、「就」は数の少ないことを強調し、取り立てスコープは「一个人」である。「就」の後に数量詞がある場合、「後方スコープ」に解釈される可能性が残るため、重音句の後にポーズを入れることができず、「就」及び述語は必ず弱化する。「就」の後に数量詞がない場合、「就」の前にポーズを入れることもできる。例えば：

(6-9) a. 足球联赛{明天重音句就开始了弱化句}。 パターン①

サッカーのリーグ戦は明日から始まる。

b. 足球联赛{明天重音句} || 就要在新建的体院馆开始了。 パターン②

サッカーのリーグ戦は明日から新しく建てられた体育館で始まる。

上記例文(6-9a)では、「就」の前に時間副詞「明天」がある場合、「明天」に重音が置かれ、その後にポーズがなければ、文末まで弱化する。また、例文(6-9b)が示すように、「就」の後の要素が長ければ、または新情報の場合、副詞「就」は弱化せず、前にポーズをおいてもよい。

6.5 「才」の音声パターン

「才」はその前に時間副詞が置かれ、「時間が遅い、または長い」という意味を表す場合のみ「前方スコープ」に解釈される。また、「才」自身は焦点を働くことができるため、次のような5つの「語調重音フレーズ」を持っている。

「前方スコープ」(6-10) a. 小王{明天重音句才能到弱化句}。 パターン①

b. 小王{明天重音句}才能到。 パターン②

王さんは明日やっとな着く。

- 「後方スコープ」 c. 小王{才读三遍重音句}。 パターン③
 d. 小王才读{三遍}。 パターン④
 王さんは3回を読んだだけだ。

- 副詞が焦点 e. 小王{才重音读弱}。 パターン⑤
 王さんはたった今読んだ。
 王さんはやっと読んだ。

上記用例(6-10)の a と b が示すように、「才」が「事態の発生、または終結のしかたが遅いこと」を表すことができ、前に時間副詞が伴う場合は、「時間副詞」に重音を置く。一方、「才」は「数量が少ない」、「程度が低い」ことを表すこともできる。この場合、「才」の後の取り立てスコープに重音が置かれる。また、「才」が「事が今しがた発生したこと」を表すこともでき、この場合、「才」に重音を置くのが通常である。ただ、この場合は「事態の発生、または終結のしかたが遅いこと」という意味を表すこともある。この場合は語気で意味の区別をする。

6.6 「都」の音声パターン

「都」は以上に述べた5つの取りたて副詞と異なり、「前方スコープ」しか容認できない。

- 「前方スコープ」(6-11)a. {我们重音句都上班弱}。 (極端な場合の例示)パターン①
 私達さえも出勤する。
 b. 这几天{我们重音句}都上班。 (総括)パターン②
 ここ何日間、私達は全員出勤する。

上記用例(6-11a)では、「都」は「極端な場合の例示」の意味を表す場合、取り立てスコープと「都」の間にポーズを入れないため、①のパターンしか容認できない。「都」は弱化する。一方、「都」は「総括」の意味を表すこともでき、「都」の前にスコープになる可能性がある要素が2つ以上存在する場合、取り立てスコープに重音を置くが、「都」の前にスコープとなる要素は1つしか考えられない場合、「都」に重音を置くことが多い。

6.7 「只」の音声パターン

「只」は「後方スコープ」しか容認できない。

- 「後方スコープ」(6-12)a. 我{只翻了翻重音句这本书弱}，还没详细看。 パターン③
 この本はざっと見ただけで、まだ詳しく読んでいない。
 b. 我只翻了翻{这本书重音句}。 パターン④
 この本だけをざっと見た。

「只」は「後方スコープ」しか容認できない。重音が動詞の「翻了翻」に置けば、例(6-12a)が示すように、「ざっと見ただけで」という意味に解釈されるが、重音が目的語の「这本书」に置けば、例(6-12b)が示すように、「この本だけ」の意味になる。

まとめ

本論文は取り立て副詞の意味決定における韻律特徴の役割を考察した。取り立てスコープがどこにあるかにコンテキスト、語順、音韻等様々な要素が関与している。特に、ポーズやストレスのような音韻的な要素が同言語における意味決定に深く関わっていることが分かった。

本稿はまず、取り立ての概念を取り入れ、取り立て副詞の定義、種類とそれぞれの特徴を明らかにした。その上で、取り立て機能有無の弁別基準を提示し、それぞれの取り立て副詞のどの用法が取り立て機能を持つのかを考察した。考察の結果としては、以下のような2つの結論が得られた。

i 取り立て副詞の取り立ての機能有無の弁別基準は以下の三つである：a. 取り立て副詞は意味的に繋がりのある成分と共に起する。b. 取り立て副詞が文中に現れない場合、文の論理的意味が変わる(非文となる場合も含む)。c. 取り立ての自者は文中に明示されているあるいは暗示的に含まれている。以上の三つの条件を同時に満たせば、取り立ての機能を認める。

ii 取り立て副詞は同じ文中位置でありながら、意味的にいくつかの要素を取り立てることができる。それは取り立て副詞が典型的な副詞で、主語の後、述語の前に置かれなければならないという制限が課せられているからである。

取り立て副詞の概念を考察した上で、取り立て副詞が含まれる同音異義文において、重音の種類と位置が文の意味決定にどう関係しているかの解釈を試みた。明らかになるのは以下のようなことである。

まず、2.1では、重音に関する先行研究を概覧し、「邏輯重音」(論理アクセント)、「語法重音」(文法アクセント)及び「感情重音」(感情アクセント)の特徴を明らかにした。文法アクセントは統語構造によって常に定められた位置に出現するアクセントで、単語単位で定義されるものである。それに対して、論理アクセントはいわゆるフォーカスが生む強調アクセントで、単語単位、場合によって、単語の一部に掛かるものである。軽声に論理アクセントは来ない。感情アクセントは文法アクセント、論理アクセントと違い、文全体に関わることが多い。

2.2では、2つの取り立てスコープと重音の関係を考察した。一般的にいえば、取り立てスコープに重音が置かれる。「前方スコープ」の場合、取り立て副詞はその直前にある要素を取り立てる傾向が見られる。実際の話し言葉では、語順と関係なく、重音の位置によって、取り立てスコープの位置を確定することができる。「前方スコープ」しか容認できない「都」は動詞の後の目的語を取り立てる場合は、目的語を「都」の前、主語の後の「強調の位置」に移動させる必要がある。「後方スコープ」の場合は取り立て副詞は必ずしもその直後にある要素を取り立てるとは限らない。

さらに、2.3では、2音節の語に重音が付加される場合、どのような音韻的特徴が現れるのかを分析した。取り立てスコープに重音が付加される場合、取り立てスコープのすべての音節に強勢が付加されるわけではない。軽声に読まれる音節には音節強勢が来ない。2音節の語に重音が付加される場合、すべての音節に重音が付加されるが、「前重型重音」、「後重型重音」の形は維持される。

第2章では、重音は取り立て副詞の意味解釈と緊密な関係を有していることが分かった。しかし、重音が付加されていない部分にも特徴的な音声がある。第3章ではどの部分が弱いのか、ということ及びポーズの位置も取り立て副詞を含む文の意味に重要な役割を果たしていることを主張した。重音を含む重音句の後ろの部分は正常の発音より短くかつ弱く発音される。本稿は正常の発音より短くかつ弱く発音される要素を「弱化句」と呼んでいる。「弱化」には4つの特徴があり、それをまとめると以下ようになる：

- i 弱化現象が重音を含む重音句の後ろの部分に起きる。
- ii 旧情報は正常の発音より弱く発音され、弱化する。新情報の場合、弱化が付加される可能性もある。
- iii 重音句の後にポーズがあれば、弱化しない。
- iv 重音句の前に前置させられた要素は旧情報であっても、弱化しない。

弱化の定義と特徴を分析した上で、3.3では、取り立てスコープと弱化の関係を考察した。

取り立て副詞に弱化が付加されれば、「前方スコープ」である。「前方スコープ」の場合、取り立て副詞の右側まで弱化するかどうかは、取り立てスコープより右側の要素が新情報であるかどうか、単語の長さ、数量詞が強調されるかどうかなどが関係する。「前方スコープ」の場合、取り立てスコープに重音が付加されるの一般的だが、取り立て副詞に弱化が置かれるかどうかによって、文の意味が変わり、または文が成立できなくなる場合が存在する。取り立てスコープに重音があれば、「又」、「再」については弱化するかどうか文の意味が変わらないが、「就」、「才」の前後ともに、数量詞が現れ、かつ複文ではない場合、「就」、「才」は必ず弱化する。「也」、「都」は「極端な場合の例示」の意味を表す場合も必ず弱化しなければならない。ただし、「都」は「すべてを総括する」という意味に解釈される場合は、弱化しない。「也」は「類似追加」の意味を表す場合は弱化しても良いが、弱化しなくても良い。

「後方スコープ」を持つ取り立て副詞は「都」を除き、六個がある。それぞれは「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「只」である。「後方スコープ」では、取り立てスコープに重音が付加されるパターンと取り立て副詞に重音が付加されるパターンの2つがある。それぞれのパターンに「取り立て副詞は弱化しない」と「取り立てスコープは弱化しない」ということが大切である。

第四章では、「語調重音フレーズ」という概念を導入し、取り立て副詞を含む文の音声的特徴から、語意の限定・区別を試みた。3.1で述べたように、弱化は、重音を含む重音句の後ろの部分に、単語を単位として加えられる。重音句とこれに続く弱化句が構成する単位は内部にはポーズを置くことはできず、ある種の句をなしていると考えられる。これを「語調重音フレーズ」と呼ぶ。ポーズは前章で述べた弱化とも密接に関わっている。重音に続いて弱化が起こる場合は、間にポーズが置かれてはならない。ポーズが置かれると、その後では弱化しない。ただし、ポーズを置くことができる位置にポーズが置かれない場合には、重音に続く位置であっても弱化は起きない。したがって、実際にポーズが現れるかどうかよりも、ポーズを置くことができるかどうかのほうが取り立て副詞の意味の区別にとって重要である可能性があることが分かった。

取り立て副詞の「語調重音フレーズ」は統語的面、音韻面の両方からの定義である。1つの「語調重音フレーズ」の中で、取り立てスコープに重音が置かれ、重音より右側の要素に弱化が起こる。「語調重音フレーズ」の中に重音が必ず存在するかつ2つ、2つ以上存在しないことが約束される。

「前方スコープ」の場合、取り立てスコープに重音が置かれ、取り立て副詞は弱化する。取り立て副詞の後の要素は旧情報、または重要度が低いと話し手が判断する場合は、副詞とその後の要素との間にポーズを置かず、文末まで弱化する。取り立てスコープとその後の弱化している要素は1つの「語調重音フレーズ」になる。「語調重音フレーズ」の中の要素の間にポーズを置くことはできない。取り立て副詞の後の要素はとても長い場合、ポーズを入れてもかまわないが、話し言葉では、そのような文は非常に少ないため、取り立て副詞の後にポーズを入れないのが通常である。ただし、「也」、「都」は「極端な場合の例示」の意味を表す場合、「就」、「才」の前後ともに、数量詞が現れ、かつ複文ではない場合は②のパターンは適応できない。

「後方スコープ」の場合、取り立て副詞はその前の主語と1つの「語調重音フレーズ」になれず、弱化してはいけない。取り立て副詞もしくは取り立てスコープに重音を置く。「都」を除く、6つの副詞は「後方スコープ」を持っているが、「又」、「再」のみは重音が副詞に置かれるか、取り立てスコープに置かれるかによって意味が変わる。

第五章では、Praat ソフトによる音声実験を用い、重音、弱化の音韻特徴を探り、重音、弱化の位置と副詞の意味の関係について考察した。「語調重音フレーズ」の範囲と副詞の意味の関係についても実験によって検証する。

「前方スコープ」の場合、重音が取り立て副詞の前の要素に置かれ、「後方スコープ」の場合、重音が後に移り、動詞或いは目的語に付加される。取り立て副詞に重音が付加されると、持続時間が延長し、ピッチレンジが拡大する。振幅は変化するが、重音の特徴ではない。

第1声、第2声、第4声に重音が置かれる場合、ピッチ上限が上昇する傾向だが、第3声に重音が重なった場合、下限が下がる。

弱化の音韻的特徴については、「前方スコープ」の場合、取り立て副詞の後の繰り返された要素のピッチレンジが縮小するという弱化現象が観察される。第1声、第2声、第4声の場合はピッチの上限が下がるが、第3声の場合はピッチレンジが縮小し、ピッチの下限が上がる傾向が観察される。重音が付加される部分とその後の部分との間にピッチの落差があり、重音の後続部分のピッチレンジが縮小する。

重音が掛っているところはピッチ上限が上昇し、ピッチレンジが拡大する。その右側はピッチ上限が下がり、ピッチレンジの縮小が見られる。しかし、この影響は左側には及ばない。重音が掛っているところは持続時間が延び、その右側は短縮する。発音速度が速くなる。しかし、ピッチの変化と同じように、左側に影響しない。取り立て副詞に重音があるか否かはピッチ上限が上昇したかどうか、その右側との「ピッチ落差」があるかどうかによって判断できる。

第六章では、各取り立て副詞の音声パターンをまとめ、様々な音声符号を用いた教授法を提案した。以下のようにまとめている。

- 「前方スコープ」：① {取り立てスコープ重音句+取り立て副詞+述語+(後続成分)弱化句}
「也」、「又」、「再」、「就」、「才」、「都」(極端な場合の例示)
② {取り立てスコープ重音句}+ 取り立て副詞
「也」、「又」、「再」、「都」(総括)

- 「後方スコープ」： {主語+取り立て副詞弱化句} ×
③ {取り立て副詞+(述語)+取り立てスコープ重音句+(後続成分)弱化句}
「又」、「再」は追加の意味
④ 取り立て副詞+(述語)+取り立てスコープ重音句+(後続成分)弱化句
「又」、「再」は重複の意味

副詞が焦点： ⑤ {副詞重音句+後続成分弱化句}

「前方スコープ」の場合、取り立てスコープに重音が付加され、その後にポーズがなければ、副詞は弱化し、ポーズがあれば、副詞は弱化しない。「只」を除く、6つの副詞は「前方スコープ」を持っているが、複文ではない文における「就」、「才」また「極端な場合の例示」の意味を表す「也」、「都」は必ず弱化し、②のパターンが許さない。「総括」の意味を表す「都」は弱化しないため、①のパターンを持たない。

「後方スコープ」の場合、取り立て副詞はその前の主語と1つの「語調重音フレーズ」になれず、弱化してはいけない。取り立て副詞もしくは取り立てスコープに重音を置く。「都」

を除く、6つの副詞は「後方スコープ」を持っているが、「又」、「再」のみは重音が副詞に置かれるか、取り立てスコープに置かれるかによって意味が変わる。

参考文献

日本語の文献は著者名の50音順で、中国語の文献は拼音順で掲載する。

日本語文献

- 相原茂 木村英樹 杉村博文 中川正之 1991 『中国語学習 Q&A101』 大修館書店
- 相原まりこ 2011 「中国語の韻律的手段による「文焦点」標示」『言語研究』
139 pp. 121～131
- 荒川清秀 2003 『一步すすんだ中国語文法』 大修館書店
- 上野恵司 1995 『中国語入門』 NHK 出版
- 植田均 2002 『実際の中国語会話 [初級篇]』 晃洋書房
- 遠籐佳代子 2003 「強調を表す“连～都”“连～也”の差異についての考察」 金沢大学
中国語学中国文学教室紀要 第6輯
- 郭春貴 1994 『日本人のための中国語発音特訓』 白帝社
- 郭春貴 2001 『誤用から学ぶ中国語』 白帝社
- 金成姫 2006 「数量強調における「も」と「也」の相違について」『東方論叢・中日語言
翻译与跨文化交际』 世界知识出版社
- 金成姫 2009 「とりたて詞「さえ」と中国語の“都”について」『日中言語研究と日本語
教育』 第2号
- 香坂順一 1985 『中国語学の基礎知識』 光生館
- 香坂順一 1988 『初心者も使える中国語虚詞辞典』 光生館
- 児玉望 2005 「鹿児島タイプ二型アクセントの音調句」『熊本大学言語学論集 4』
pp. 281～307
- 児玉望 2007 「音調句と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集 6』 pp. 1～22
- 児玉望 2008 「曲線声調と日本語韻律構造」『熊本大学言語学論集 7』 pp. 1～40
- 佐治圭三 1991 『日本語の文法の研究』 ひつじ書房
- 崔春愛 2006 「中国語における“也”」『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』 第一集 昭和女子大学
- 重松淳 2007 「中国語イントネーション研究の現状」音声研究 第11巻第2号 pp. 5～15
- 筈春生 新谷秀明 1998 『中国語の広場』 中国書店
- 徐建敏 1994 「中国語の「只」と日本語の「だけ」「しか」—とりたての観点から見た対
応」『都大論究』 31号
- 武田みゆき 2004 「“我也真高兴”の非文性について」『中国語学と日本語学の視点』

白帝社

- 高橋弥守彦 1991 「关于表示强调的「也/都」『云梦学刊』 云梦学刊编辑部
- 高橋弥守彦 1991 「2つの構文の中の「也/都」について」 大東文化大学語学教育研究所
- 張建華 1996 「日中両語における取り立て表現の対照研究—「だけ」「ばかり」「しか」と“只”“净”を中心に」 東京外国語大学大学院地域文化専攻 博士論文
- つくば言語文化フォーラム編 1995 『「も」の言語学』 ひつじ書房
- 寺村秀夫 1991 『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』 くろしお出版。
- 湯延池 1987 『中国語変形文法研究』 白帝社
- 中川正之 1982 「中国語——とくに「も」に対する一音節副詞をめぐって」『講座日本語学』第11巻 明治書院
- 中俣尚己 2008 「日本語のとりたて助詞と並列助詞の接点——「も」と「とか」の用法を中心に」大阪府立大学人間社会学部
- 沼田善子 1986 「第2章 とりたて詞」奥津敬一郎他『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- 沼田善子 徐建敏 1995 「とりたて詞「も」のフォーカスと取り立てスコープ」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 樋山健介 1991 「中国語のストレス(重音)とその教学方法について」『早稲田商学』第348号
- 馮蘊澤 2007 『中国語の音声』 白帝社
- 平山勝利 1983 「中国語ストレスアクセント試論」『伊地智善継・辻本春彦教授退官記念論文集』 東方書店
- 望月八十吉 1994 「反復疑問文と“也”“都”“还”」『現代中国語の諸問題』 好文出版
- 茂木俊伸 1993 「とりたて詞「まで」「さえ」について——否定との関わりから」筑波大学国語国文学会
- 山口直人 2008 「中国語の反復疑問文と“也”の共起に関する新考察」『語学教育研究論叢25, pp. 27~42
- 湯山トミ子 武田紀子 沈暁文 土屋肇枝 余瀾 根岸宗一郎 田禾 虻川誉之 成蹊大学 2002 「インターネットによる中国語音声教育支援システム—中国語音声教育データベースシステム」『情報教育方法研究』第5巻第1号
- 楊凱榮 2002 「「も」と“也”—数量強調における相違を中心に—」『対照言語学』 東京大学出版会
- 楊立明 2002 「中国語の文ストレス(重音)の音声的特徴」早稲田大学語学教育研究所紀要 第57号
- 楊立明 2003 「中国語「岐義文」の意味判定における文ストレスの役割」 早稲田大学語学教育研究所紀要 第58号

- 楊曉安 2004 「中国語疑問詞特指疑問と是非疑問の音声実験」『北海道文教大学研究紀要』第28号
- 李宗禾 2006 「台湾人日本語学習者におけるとりたて詞「も」の習得——日本語母語話者との比較を通して」
- 李臨定著 宮田一郎譯 1996 『中國語文法概論』 光生館
- 李智麗 2011 「現代中国語の副詞“也”の多義性について」『ありあけ』10号 熊本大学言語学論集 pp.59~74
- 李智麗 2013 「取り立て副詞“就”の音調と意味」『熊本大学社会文化研究』11号 熊本大学社会文化研究 紀要論文 pp.185~206
- 劉月華 潘文娛 故[イ] 相原茂監訳 1988 『現代中国語文法総覧 上』 くろしお出版
- 劉月華 潘文娛 故[イ] 相原茂監訳 1991 『現代中国語文法総覧 下』 くろしお出版
- 劉勇 2008 「中国語2音節語句におけるストレス構造分析」『鶴山論叢』第8号
- 呂叔湘主編 牛島徳次・菱沼透監訳 2003 『中国語文法用例辞典 現代漢語八百詞増訂本 日本語版』 東方書店

中国語文献

- 白梅麗 1987 「現代汉语中「就」和「才」的语义分析」『中国语文』第5期
- 陈小荷 1994 「主观量问题初探—兼谈副词「就」、「才」、「都」」『世界汉语教学』第4期
- 陈雅 2003 「试析副词「就」的语音形式及语义指向」『南京社会科学』南京社会科学杂志编辑部
- 陈立民 2005 「也说「就」和「才」」『当代语言学』第7卷年第1期 pp.16~34
- 陈昌来 2000 『现代汉语句子』 华东师范大学出版社
- 崔永华 1997 「不带前提句的「也」字句」『中国语文』1997年第1期
- 端木三 1994 「重音理论和汉语的词长选择」『中国语文』第4期 pp.246~254
- 端木三 2000 「汉语的节奏」『当代语言学』第4期
- 端木三 2007 「重音、信息和语言的分类」『语言科学』第6卷第5期 pp.3~14
- 邓根芹 李秀云 2006 「限定副词「就」的句法、语义分析」常熟理工学院学报
- 范熙 2007 「副词“也”的主观性分析」华南师范大学硕士学位论文
- 范开泰 1985 「语用分析说略」『中国语文』第6期
- 方梅 1995 「汉语对比焦点的句法表现手段」『中国语文』p.247 中国社会科学出版社
- 冯胜利 1998 「论汉语的“自然音步”」『中国语文』第1期
- 冯胜利 1997 『汉语的韵律、词法与句法(修订本)』北京大学出版社

- 冯胜利 2013 「汉语的核心重音」『中国語学』260 pp. 6~24
- 哈杜默德·布斯曼著 陈慧瑛编译 2003 『语言学词典』 商务印书馆
- 侯学超 1998 『现代汉语虚词词典』 北京大学出版社
- 李晓琪 2004 「汉语虚词教学方法」『新世纪对外汉语教学—海内外的互动与互补学术演讲
讨论会论文』
- 林茂灿 颜景助 孙国华 1984 「北京话两字组正常重音的初步实验」『方言』第 1 期
- 林焘 1962 「现代汉语轻音和句法结构的关系」『中国语文』第 7 期
- 刘丹青 1996 「词类与词长的相关性—汉语语法的“语音平面”」从论之二 南京师范大学学
报(社会科学版)第 2 期
- 刘丹青 徐烈炯 1998 「焦点与背景, 话题及汉语“连”字句」『中国语文』265 中国社会科学
出版社
- 刘耀华 1998 「谈副词也及又在事理逻辑上的差异」『汉字文化』1998 年第 1 期
- 卢福波 1999 「“也”的构句条件及其语用问题」华东师范大学学报(哲学社会科学版)南开
大學
- 陆丙甫 1989 「结构、节奏、松紧、轻重在汉语中的相互作用」『汉语学习』第 3 期
- 陆俭明 马真 1999 「说「也」」『现代汉语虚词散论』 语文出版社
- 陆俭明 1997 「关于语义指向分析」『中国语言学论丛』第 1 辑
- 吕叔湘 1980 『现代汉语八百词』 商务印书馆
- 孟凡铃 2008 「副词「才」、「都」、「就」的主观量研究」辽宁师范大学
- 全国斌 2004 「句法框架中非同义词语的中和现象——从“都”和“也”的中和谈起」郑州
大学学报(哲学社会科学版)第 37 卷第 2 期
- 宋欣桥 2004 「普通话语音训练教程」 商务印书馆
- 沈炯 1994a 「北京话上声连读的调性组合和节奏形式」『中国语文』第 4 期
- 沈炯 1994b 「汉语语调构造和语调类型」『方言』3 pp. 221~228
- 沈炯 1985 「北京话语调的音域和语调」『北京语音实验录』pp. 73~130
- 沈敏 范开泰 2008 「多功能副词“才”表短时义的相关问题考察」『语言科学』第 7 卷第 4
期 pp. 359~366
- 沈家煊 1990 「语用学和语义学的分界」『中国语用学研究论文精选』上海外语教育出版
社 pp. 604~623
- 石汝杰 1988 「说轻声」『语言研究』第 14 期
- 史金生 1993 「时间副词「就、再、才」的语义语法分析」『逻辑与语言学习』第 3 期
- 史锡尧 1991 「副词“才”与“都”、“就”语义的对立和配合」『世界汉语教学』第 1 期
pp. 18~22
- 唐作藩 2007 『中国语言文字学大辞典』中国大百科全书出版社
- 王璐 吴洁茹 2009 『语音发声』 中国传媒大学出版社
- 吴为善 1986 「现代汉语三音节组合规律初探」『汉语学习』第 5 期

- 吴为善 2003 「汉语“韵律词”的界定」『语言学从论』第28期
- 吴为善 2013 「强势层级扩张与词语概念整合的互补效应」『中国語学』260 pp. 25~39
- 吴宗济 1982 「普通话语调规则」(Rules of Intonation in Standard Chinese. In Papers for the Working Group on Intonation, 13th Intonational Congress of Linguists, Totyo, 1982) 曹文译
- 徐烈炯 1988 『生成语法理论』上海外语教育出版社
- 徐烈炯 刘丹青 1998 『话题的结构与功能』上海教育出版社
- 徐烈炯 2001 「焦点的不同概念及其在汉语中的表现形式」『现代中国语研究』第3期
- 徐霞 2003 「表类同叠加的副词也的语义指向考察」天中学刊 第18卷第4期
- 徐烈炯 刘丹青 1998 『话题的结构与功能』上海教育出版社
- 徐世荣 1980 『普通话语音知识』文字改革出版社
- 徐以中 杨亦鸣 2010 「「就」与「才」的歧义及相关语音问题研究」『语言研究』语言研究杂志编辑部
- 徐杰 2001 『普遍语法原则与汉语语法现象』北京大学出版社
- 杨亦鸣 1988 「「也」字语义初探」『语言研究』1988年第4期
- 杨立明 1992 「语句重音声学特征初探」『中国语学』240 pp. 1~10
- 余弦 2001 「从句法看汉语「也」和日语「も」的预设——兼谈「也」与「も」的对译」天津外国语学院学报 2001年第1期
- 叶军 2001 『汉语语句韵律的语法功能』华东师范大学出版社
- 袁毓林 1999 「走向多层面互动的汉语研究」『语言科学』第6期
- 于雷 2002 『我是猫』译林出版社
- 张建华 1995 「「だけ」「しか～ない」と「只」について」言語・地域文化研究第1号
- 张建理 2007 「汉语「也」的认知研究」浙江大学学报(人文社会科学版)第37卷第5期
- 张伯江 方梅 1996 汉语功能语法研究 江西教育出版社
- 张亚军 2005 「语气副词的功能及其次类归属」扬州大学学报第5期
- 周韧 2011 『现代汉语韵律与语法的互动关系研究』商务印书馆
- 赵元任 1933 「中国语的字调跟声调」『中研院史语所集刊』第4卷3期 pp. 52~57
- 赵元任 1968 『北京口语语法』丁邦新全译本『中国话的文法』香港中文大学出版社
- 赵元任 1980 『语言问题』台湾商务印书馆发行
- 钟华 2009 「“才”重读与非重读时语义、语用功能差异」『安徽农业大学学报』第18卷第2期 pp. 46~50
- 朱德熙 1982 『语法讲义』商务印书馆
- 郑旭 2007 「「也」字歧义句的逻辑分析」重庆工学院学报(社会科学)第21卷第12期

- Chao Yuanren. 1932 A Preliminary Study of English Intonation (with American Variants) and Its Chinese Equivalent. 中央研究院史語所集刊外篇 1 本 1 分 蔡元培先生六十五岁庆祝论文集
- Chomsky, N. 1955 Logical Structure of Linguistic Theory. MIT Humanities Library.
- Chih-hsiang Shu. 2011 Sentence Adverbs in the Kingdom of Agree. Stony Brook University.
- Halliday, M.A.K. 1967 Notes on Transitivity and Theme in English. Journal of Linguistics 3.
- Halliday, M.A.K. 1970 A Course in Spoken English Intonation. Oxford University Press.
- Hayes, B. Lahiri, A. 1991 Bengali intonational phonology. Natural Language & Linguistic Theory.
- Jackendoff, R. 1972 Semantic Interpretation in Generative Grammar. Cambridge MIT Press.
- Lambrecht, Knud. 1986. Topic, focus, and the grammar of spoken French.
PhD dissertation, University of California. Berkeley.
- Lambrecht, Knud. 1987 Sentence focus, information structure, and the thematic-categorical distinction.
- Lambrecht, Knud. 1994 Information structure and sentence form. Topic, focus, and the mental representations of discourse referents. Cambridge: CUP.
- Lieberman, P. 1967 Intonation, Perception and Language. MIT Press.
- Lieberman, M. & Pierrehumbert, J. 1984 Intonational Invariance under Changes in Pitch Range and Length. Language Sound Structure. MIT Press.

1 香坂順一(1985)は中国語の特徴について、「中国語は語形変化がなく、しかも格を示す助詞がなければ、文の意味を決定するものは語序によらなければならなくなる」と指摘している。

2 『現代汉语虚词手册』 p. 1 李曉琪 2003

3 楊氏が言う『語義前指』、『語義後指』は本稿における「前方スコープ」、「後方スコープ」に相当する。

4 呂叔湘主編 牛島徳次・菱沼 透監訳 『中国語文法用例辞典』(2003)の pp. 432~434 より参照している

5 「取り立て副詞」のほか、「取り立て助詞」、「取り立て助辞」と呼ばれる事もある。一般的には、「取り立て副詞」は「取り立て副詞」と「取り立て助詞」に分けられる。

6 本稿の p. 5 ですでに説明しているが、ここではもう 1 回繰り返して説明する。

7 「也」を含む文に多義性が生じているという問題については、数多くの研究において指摘されている。例えば、高橋(1991)、余弦(2001)、徐霞(2003)等がある。しかし、これらの研究において詳細な議論はなされていないため、「也」の多義性に関する研究は未だに十分とは言えない。

8 本稿は『現代汉语八百词』の日本語版『中国語文法用例辞典』(2003)を参照している。

9 この文には「雨很冷，「风也很大」。」(雨は冷たかった。風も強かった。)という解釈もある。李智麗(2011)ではこれを「内包スコープ」と呼んでいる。本稿は取り立てスコープの種類と韻律特徴の關係に重点を置き、「内包スコープ」の韻律特徴は明確ではないため、本稿は分析しないことにする。

10 馮蘊澤(2007)等では、「語句重音」このことを「句重音」、「文強勢」等とも呼んでいるが、本稿では、「語句重音」に統一する。

11 馮勝利が『汉语的韵律、词法与句法 修订本』(1997)では、次のように指摘している:「普通重音就是指‘把一个句子作为一个完整的信息体’时所说的重音结构。有人叫它「核心重音」(nuclear stress);有的叫它「无值重音」(default stress);也有的叫它「正常重音」(normal stress)。无论如何,它是句子在最一般的情况下表现出来的重音形式,而这种形式的特点是「后重」。这里我们称它为「普通重音」。

12 继赵元任先生提出「最后的最强」以后,在汉语语言学中对普通重音观察最细的要属汤延池(1898)。他首先把「最后的最强」的提法归结为一条「从轻到重的原则」。(馮勝利 1997 『汉语的韵律、词法与句法 修订本』)。

13 この文は「李老师给他也改作业」とも言うが、文の意味は変わらない。

14 2音節語の重音型に関する先行研究は(陆丙甫 1989)、(沈炯 1985)等がある。

15 葉軍(2007, p. 227)では、「赵元任主张“调头”、“调干”二分,不过他仍然认为,调头包括起首轻音节(Anacrusis)和主调头(Main Head),调干包括调核和调尾巴。」と述べている。

16 劉月華など,1988『現代中国語文法総覧(上)』のp. 3より参照。

17 この文は「後方スコープ」で、「也」の後の「书法」に重音が付加されるが、ここでは、第3声の「也」の重音の音声特徴を考察するため、「也」にも重音を置く。